女子文壇

第三巻第拾三號

明治四十年十月一日発行（毎月一回一日）
明治卅七年十二月十九日第三種郵便物認可



秀錦堂印刷

四十雀



富岡はき子筆

十月一日より

一、第十四回新柄陳列會開催

一、懸賞模様圖案展覽

一、寄せ切れ見切り反物大賣出し

尚ほ呉服物の外各種類の日用商品を一層澤山に取揃へ何れも最新流行の物相撰み陳列仕り休憩所及食堂をも取設け置候間御遊覽被成下候樣偏に奉願上候

「デパアトメント、ストーア」の元祖

東京日本橋駿河町

三越呉服店

(振替貯金口座五〇〇番)

本月發行の當店雜誌(時好)には新懸賞廣告あり御一讀を乞ふ

於東京勸業博覽會



各女學校御用
美術造花材料

附屬品並ニ
造花器械類一式

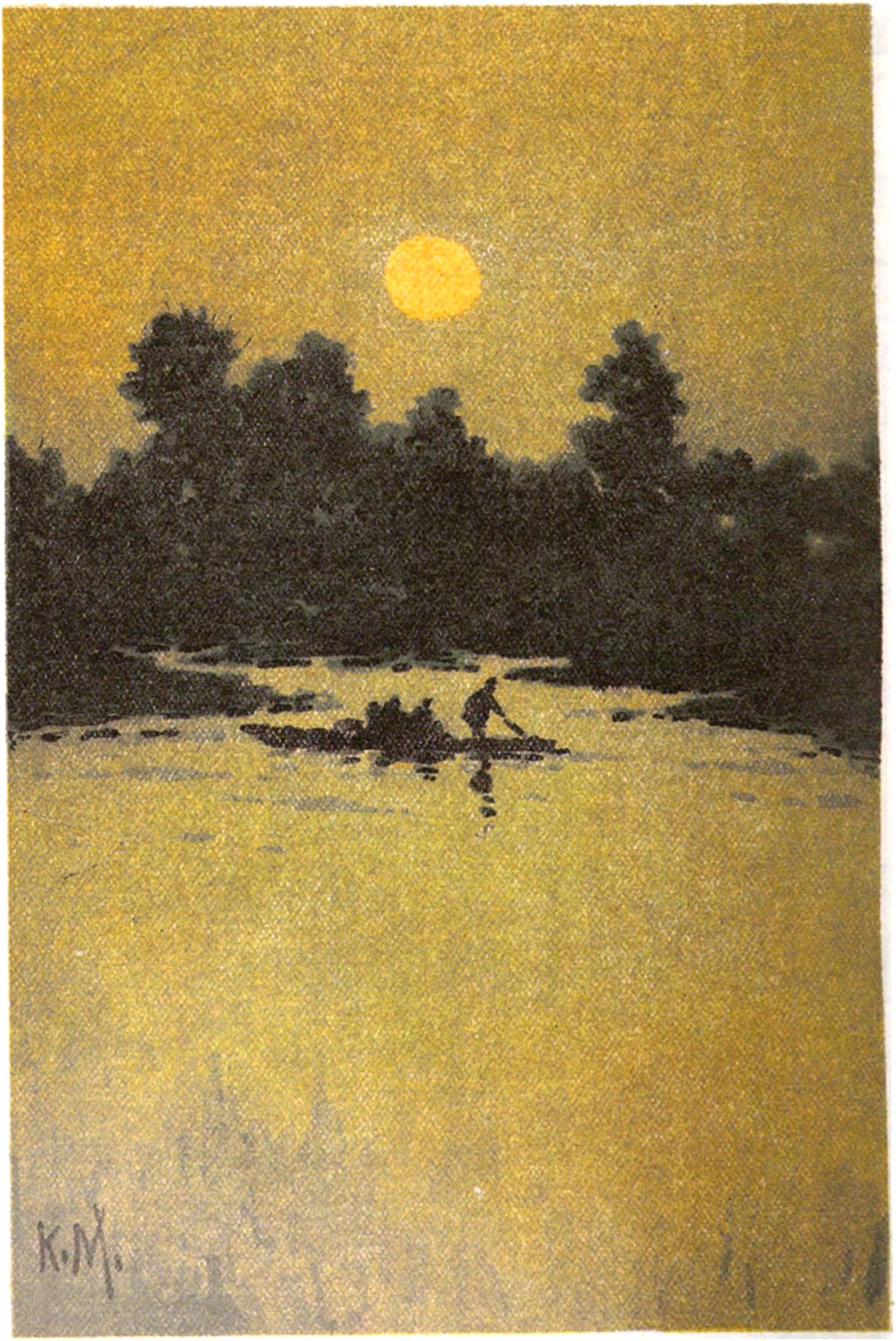
東京市日本橋區横山町壹丁目拾六番地
天野卯兵衛
電話（長）浪花一六四三番
振替貯金口座四九七〇番

……切取線……

◎營業目錄御入用なれば此切取を添へ御申越被下度候（女子文壇）◎

縣　　郡　　町村

秋の月



三宅克己先生筆

以上貳藥專賣元 東京市神田五軒町十九番地 **日新館藥房**(電話下谷五四六番)

女子文壇の廣告によ り御申込の節は其旨御書添を乞ふ

補習學校・夜學會用最新教科書

金子元臣先生著

青年補習讀本
女子補習讀本

▲見本刷御申越し次第進呈▼

和裝全二册
定價前編後編各廿四錢
郵稅各四錢

和裝全一册
定價金廿五錢
郵稅金四錢

◎本書は敎育勅語の精神を大綱と立て、これを組織するに、進取的、實想的、國民的なる、多方面の材料を以てしたり。立憲治下に活動すべき公民、及び各種の實業者を養成せんとするには、一に本書の力に竢たざるべからず。

◎本書には、種々の文體を網羅し、且、男子用には、平易なる漢文をも收め、なほ又、懇切なる練習問題を揭げたり。生徒は以て讀書力と作文力とを養成し得べく、敎師は以て敎授上の煩勞を省く便益あるべし。

◎されば、補習學校、及び靑年夜學會、その他の特殊學校の國語敎科書として、はた家庭用の讀本として、最も適當なる良書なりと信ず。

文學士 内海弘藏先生著

再訂 日本實業讀本 全三册

定價卷一、二、三各金四拾錢　郵稅各六錢

堀内新泉先生著

實業靑年讀本 全二册

定價上下各金貳拾貳錢　郵稅各四錢

發行所　東京神田錦町一丁目十番地　振替貯金口座四九九一番　明治書院

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

法學士滿田寛一著＝定價九十錢郵稅八錢

英雄ナポレオンの母と家庭

和裝 意匠優美 高尚

良妻賢母として歐亞に其名を高めしナポレオンの母レーテチアが一生の事蹟を洩なく顯す者良妻となり賢母とならんとする者本書を繙きて可ならん。

帝國婦人學會編＝定價四十錢 郵稅六錢

婦女子の本分

洋裝 新形 製本 嶄新

婦女子が家庭用として良書に乏しきは大に遺憾也本書は即ち女子が日常必要の事柄を網羅す一度繙く時は健全に圓滿なる家庭を造り得るは疑がはず

大和田建樹著＝定價金六十錢 郵稅八錢

女子記事文林

和裝 優美 高雅 十版

女子記事文書良書乏しきは女子敎育の缺陷也詞學者中の大家大和田先生が嶄新なる構想と流麗なる筆を以てせらる文藻流麗作例嶄新とは本書の特色

女子の弱點

定價四十錢 郵稅六錢

女子世に立つや世間大抵男子の從物の如く輕ずる子何等の弱點ありて流婦となりて健全なる新家庭を作らんとせらるゝ世の婦女子は必讀す可き書也

美術技藝研究會長 梶山彬著＝最新刊 和裝高雅美本 定價五十錢郵稅八錢

女子技藝 刺繡術新書

本書は著者が多年の實地研究と授業上より得たる結果とに基き其乃洩た嶄新に且つ懇切に記述したるものなり。されば我邦獨特の美術を發達せしめんと欲するものは必ず本書に據りて其精巧目を眩し絢爛の妙技と蘊奧を修得せざるべからず殊に今や繡術盛ならんとす京風秋を裝ふ窓下に坐しながら一度本書を繙き一針動く所鳥飲ひ花笑ふ妙味を知らむ。且つ參考用として刺繡雛形圖百五十餘個を入れ斯術を研究せらるゝ諸嬢の資料となせり。

美術技藝研究會長 梶山彬著＝第二版 和裝高雅美本 定價五十錢郵稅八錢

女子技藝 造花術新書

世の進歩と共に女子技藝の發達は日に月に盛ならんとする中に其盛大を極むるは造花也とす本書は著者が敎授の傍ら實地研究せられたる結果を世に公にせられたるもの其內容は學理と實際とを調和し染色鏝當組合せ等極めて懇切に解說し加ふるに一花一葉ごとに正確なる切雛百九十餘個を附したれば一度此書を繙く時は容易く座がら千紫萬紅の花弁を自然の儘に造り得べし。且造花は近年刺繡と共に高等女學校必須の一科目となり居れり。

美術技藝研究會長 梶山彬著＝最新刊 和裝高雅美本 定價五十錢郵稅八錢

女子技藝 摘み細工新書

近來摘み細工は大抵專門家の堂奧に秘せられありしため斯術に熱中する人は大に遺憾となせし所然るに著者は從來其專門家なりしが研究會を創立以來女子美術に裨益せんと志し斯る秘法を致て惜まず世に公にせらるされば此書を繙くときは如何に細小なる花弁と雖ども能ふが儘に造り得べし世の閨媛等が斯道研究のためには最好の指南車たるを疑はず

發行所 東京市京橋區桶町二番地 廣文堂書店 振替貯金口座四六八四番

誌友おもかげ（十七）



（東京）秋野百合子



（信濃）町田鶴子



（大阪）田宮輝子

（東京）赤倉とみ子

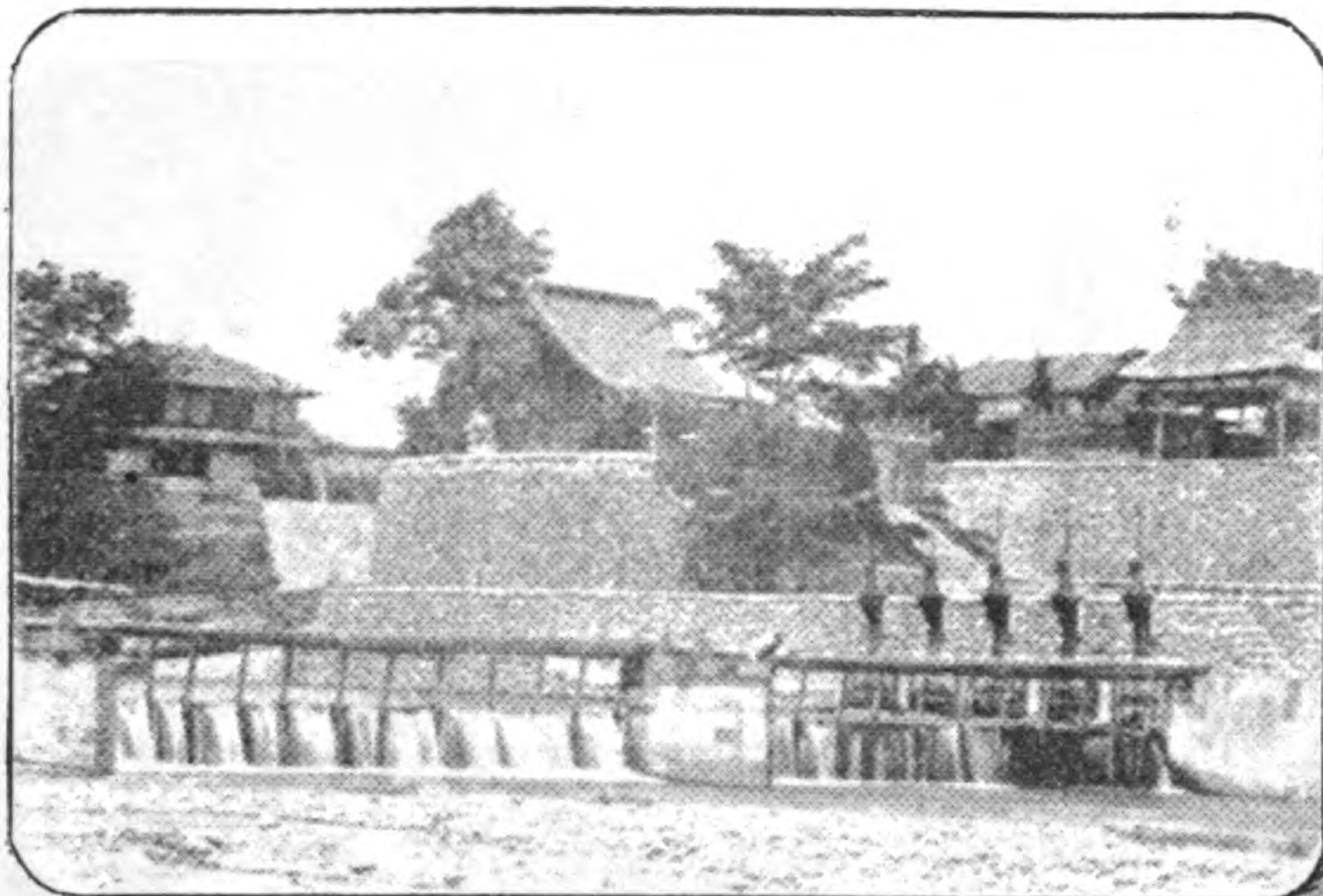
（京都）静尾子

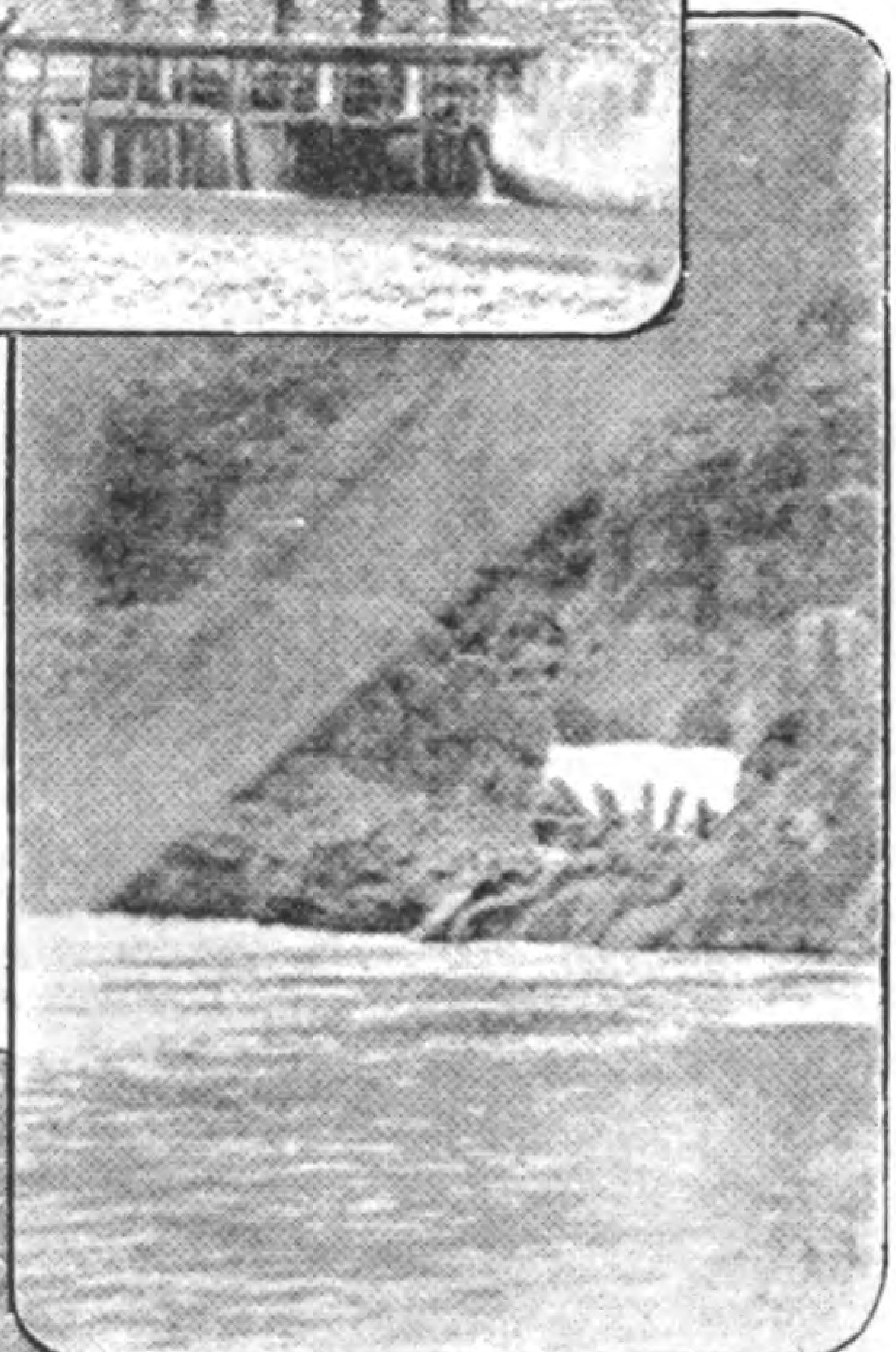




（續々御寄送を願ます逐次掲出お返し申ます）

日向三田井町附近
窓の瀨の景



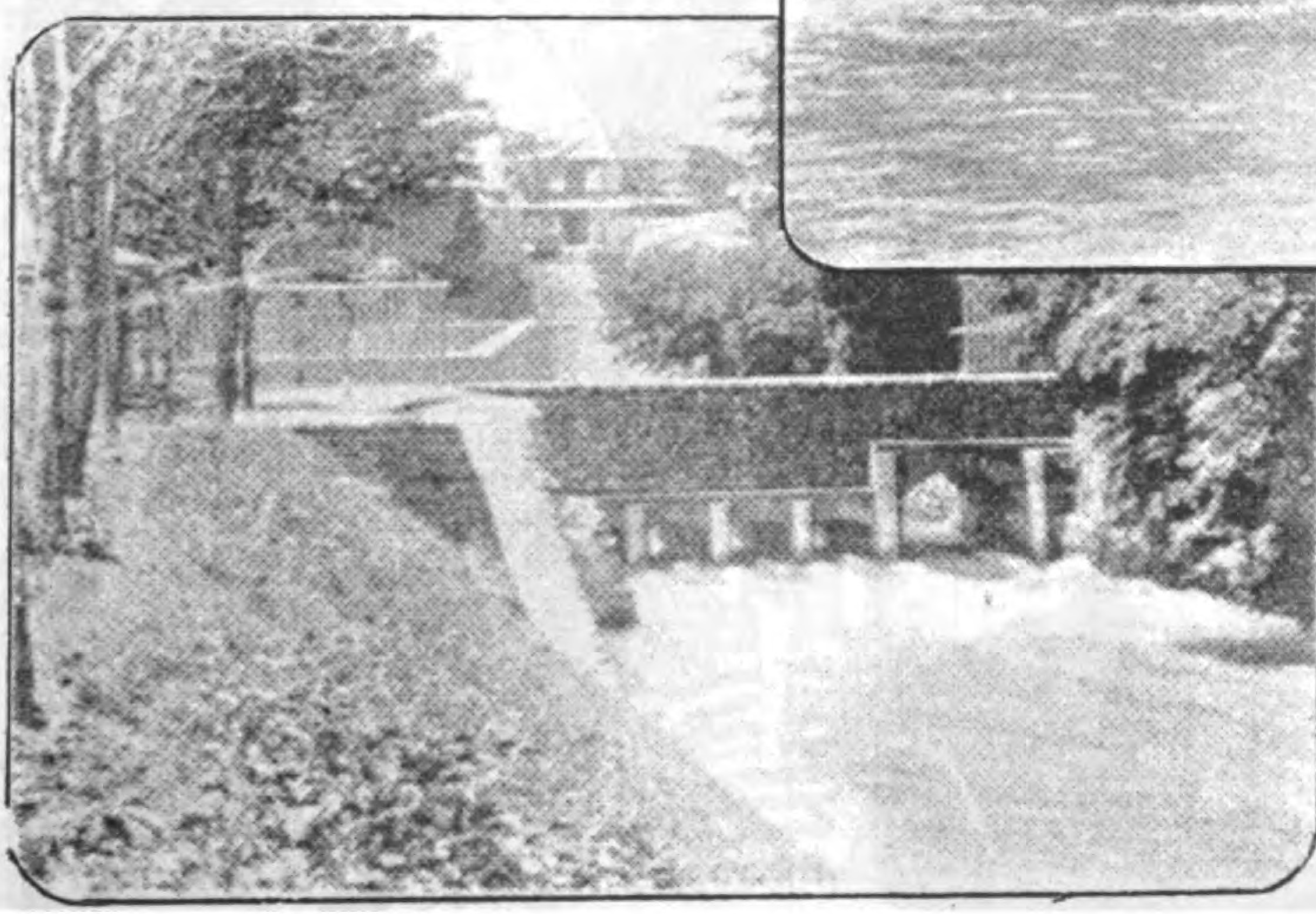


（日向右松琴子寄）

玉川上水神宮

（府下西多摩郡粕谷縫子寄）

玉川上水水門



誌友おもかげ



(七戸)三浦愛子



(濱松)鈴木三榮子



(濱松)須田すみ子



(丹波)難波愛能子



(千葉)高梨多賀子

續々お寫眞の寄送を願ます順次掲出お返し致ます

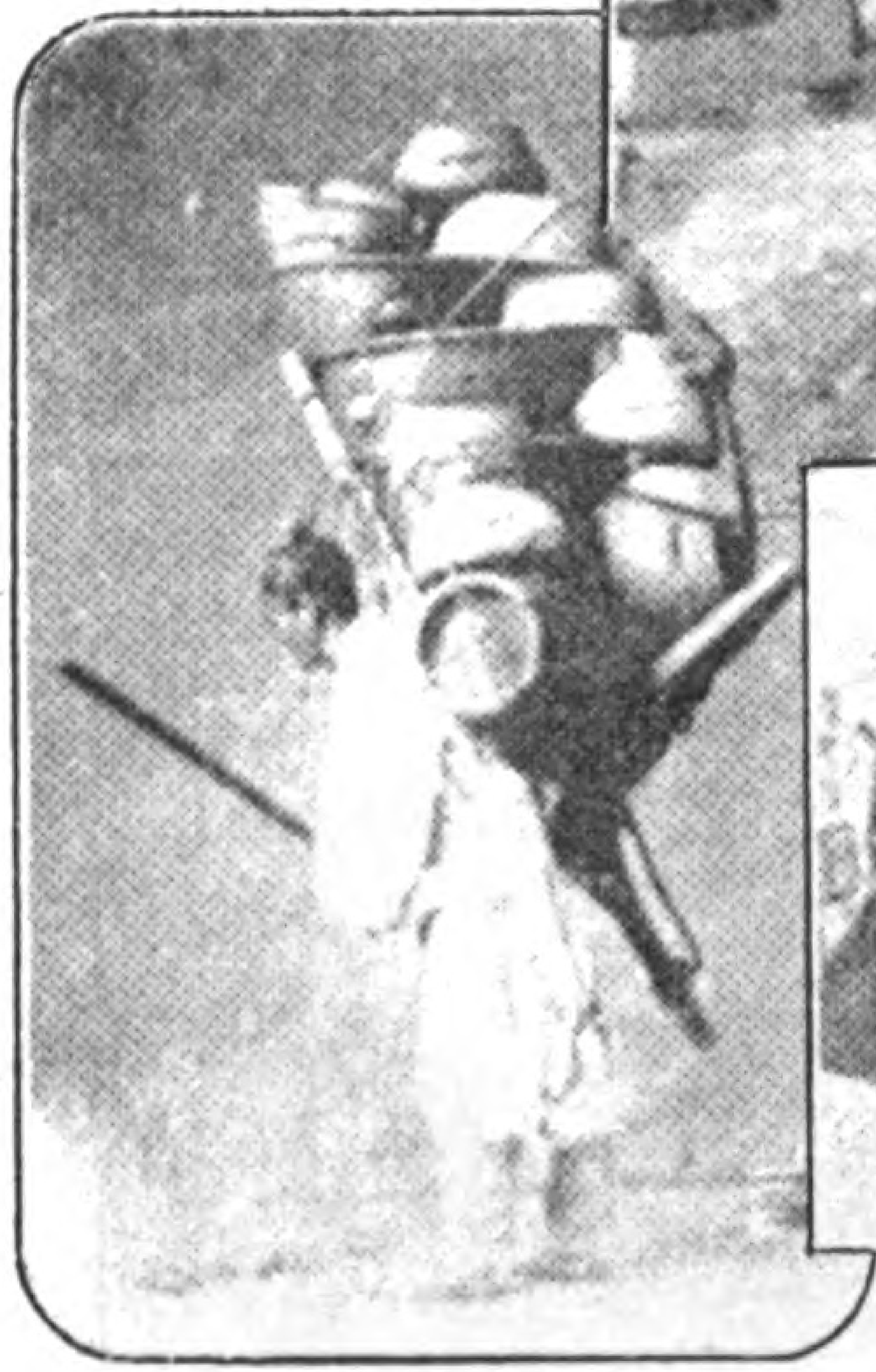


韓國農夫
（小國敏子寄）





清國の役者
（紅葉子寄）



韓人の行商



韓人の入獄（小國敏子寄）



韓人の工夫

韓國婦人外出（鏡白萩子寄）

女子文壇

第三卷　第拾三號　目次



第三卷　第十三號

（明治四十年十月一日發行）

明治の文學

近頃起つて來た自然派と技巧派との對論は端なくも明治文學の上に、一つの溝を穿つて、我等が尊崇して明治文學史上の大功蹟と信じて居る者さへ、價値を墮されさうになつて來た、時勢の趨勢、思想界の潮流は滾々として止まず、昨是今非は世の姿として怪むに足らないが、青年男女諸君が此れに誤られて、明治の文學に大功蹟あつた作物をおとしめるやうになると不可ませんから一言します。所謂自然派の態度より見て紅葉の作が技巧以外取る處なしと云つても、諸孃は紅葉の作に不信用を置いてはいけません、今迄絶對に褒められて居たものが、反對者の側から褒められなくなるのも、誠は其作物の眞の永遠の生命を極められるからです、永遠の生命ないものなら論題になりません、紅葉又は一葉の小説に於ける、正岡子規の俳句に於ける、默阿彌の、脚本に於ける、落合直文の和歌に於ける、福澤諭吉の論文に於ける、齋藤綠雨の短文に於ける、森田思軒の飜譯に於ける、高山樗牛の文學論に於ける、皆明治文學史上に消散すべからざる大功蹟を殘すもので、今後世の議論が如何やうに變化するとも、是等の作物には相當の信用を置き、敬意を拂つて研究せねばなりません、明治の文壇に立たうとするものが、明治文學上の大功蹟を忘れてはなりません、世論の推移に鑑みて一言を諸孃に呈して置きます。



女王の鼻（お伽噺）

磯　萍　水

一

賑かな都の片隅に、三人の兵士が住んで居た、いづれも年若な、血氣の盛んな、働きざかりの人達であるが、氣の毒な事には三人とも、不具である、廢兵である、過ぎ去つた年の戰ひに、槍や彈丸で、或は片眼となり、或は片脚、或は片腕。

多からぬ下賜金で、恙なくとは謂ふものゝ、面白からぬ日を送つて居た、二年、三年、やがての事餘りの不愉快に堪えかねて、誰が謂ひ出すともなく相談は決した、旅に出て見やう、また面白い事もあらうから。

月にも花にも樂しい都を後に、あはれなる三人は相携て旅途にのぼつた、行方とても無い、果は何邊の土となるやら。

野暮れ、山暮れ、里くれて、旅の辛さも二月、三月、

ある日行き暮れたのは大きな森の裡、水とパンで空腹をしのいで、木の根を枕に、二人は寢た、殘る一人は、もしもの時の用心、賊や、獸の襲ふた時の見張にと、二時間交代の不寢の番。

蟲の聲、梢の風、夜は更けた、不寢の番はつくねんと、星の瞬きや、雲の走るのを、それこそ無心に眺めて居た。

すると、驚くも倘餘りがある、眼の前、ひよつくり現はれたのは、まづ黑々な、一寸法師。

「兵隊さん、何か面白い話を聽せてくれないか、良い物をお禮にあげるから」

普通の旅人ならば吃驚もしませう、腰も拔しませうが、そこは戰爭に行つて來た兵士、驚きなんぞしない。

「おゝ、話してやらう、さアおきゝ、面白いぞ」

一時間ばかり話して聞せました、一寸法師は大きに喜んで、偖、

「有難う、大相面白かつた、これをお禮にあげやう」

短い少さい外套をくれました。

「いらないよ、こんなもの、着られやしない、お禮なんか欲しくはない」
「これはね、見かけは小供の外套のやうだが、願ひ事の外套と謂つてね、これを一寸、斯う肩にかけて、何でも自分が欲しいと思ふと、直ぐ目の前に出てくる、結構な寶物なのだ、大事におし」
渡すかと思ふと、烟のやうに消えてしまつた、兵士は眞實とは思はれないので、まあ一度試して見やうと、敎はつた通り、肩にかけて、恰然、腹が空いたので、焚火と、暖たかいスープと、甘い肉が喰べたいなと思つた。
あゝラ不思議や、欲しいと思つた、焚火も、スープも、甘い肉も、目の前に現はれた、これには有繋に吃驚したが、喜んで御馳走になつて了つた。
時間が來たので、交代して寢た。
明る朝起きて見ると、一人は美しい財布を、一人は角笛を胸にかけて居る、どうしたのかと訊くと、二人は口を揃へて。
「昨夜位變な夜はなかつたよ、一寸法師が出て來てな、面白い話をしてくれと謂ふから」
「面白半分に、二つ三つ話してやると、非常に喜んで」
「僕には、こんな綺麗な財布をくれた」
「僕には、これ此通り、立派な角笛」
「それは不思議だ、僕も話のお禮に、一寸法師から、この願ひ事の外套と謂ふのを貰つた、これを着て、何でも欲しいものを、欲しいなと思へば、直ぐ目の前に出てくる、君等のは何の利益があるのだ」
「僕の財布は、いくら使つても、盡きない財布だ、これからは貧乏しないよ」
「この角笛は、一度鳴らすと、百萬人の兵隊が飛び出して、僕の自由になると謂ふのだ、何と豪からう」
「良いなア」
「何しろ目出度」
「運が向いて來たぞ」
と三人は喜び勇んで、相談の上、地勢の良い場所を撰んで、一郎が、例の外套を肩にかけて、

「立派な城が欲しいな」
と思ふと、瞬くまに、白雪のやうな代理石で築きあげた、世界にまたと無い城が目の前に浮び出た。
三人して入つて行くと、そラ王樣のお歸りだと謂ふので、多くの臣下は下へも置かない、金の入用の時には、二郎が財布から掴みだしてやる、いくら掴み出しても、少しも減らない、三人は悦しくつて堪らない、得意になつて、昔の不自由はどこへやら、すると油斷は大敵、大變な事が湧いておこつた。

二

その隣り國に、ある女王が住んで居た、急に隣りに一つの國が湧いたやうに起つて、美しい城に、三人の不具が住んで、贅澤をつくして暮して居る、驚いた、ウッカリ爲ると、何日攻め取られて了ふか解らない、御機嫌をとつて置かうと、三人を招いだ。
三人は喜んで行く、いろ／＼と御馳走の時に、女王は早くも二郎の腰につけた財布に目をつけた。
「まあ、大相お美くしい財布てすこと」

二郎はこれ見よがしに、見せびらかして、そして其功能を說いた。
女王は、さア欲しくてならない、が奈何とも仕やうがない、三人はさん／＼御馳走になつて歸つた、その時は無事に。
女王は財布欲しさの念にたえない、どうかしてとの一心の末、一策を考へついた、暫くしてまた御馳走に呼んだ、こん度は二郎一人ぎり。
前にもまして御馳走した上に、醉はして寢して了つた、その間に寶の財布と寸分違ひのないのと、取りかへて了つた、二郎は夢にもそれと知らない、例の如く、喜んで歸つた。
歸つてから、金の入用な事があつたので、腰の財布をさぐつて、金貨をばら／＼掴み出さうとすると、ない、十圓一個ない、吃驚した、手に取つて、さかさに振つて見た、塵ひとつ出ない、漸つと掏りかへられたのを知つて、床にたゝきつけて、泣いて口惜しがつた。
一郎は見るに見かねて、

「僕が取りかへして來てやらう、待つて居ろ」
と出て行つた。
夜にまぎれて一郎は、女王の室に忍び入つたが、どこに財布が隱してあるのか、さつぱり解らない、まごまごして居る内に、物に躓いて、轉んだ。
その音に何事かと女王は眼がさめた、一目見るより、一聲高く、
『泥棒!』
すは一大事と、侍士は馳けつける、二郎は吃驚しまい事か、生命から／＼に、やつとの事で逃げて歸つた。
歸りは歸つたが、さあ大變、



あの逃げ出す時に、生命より大切な、願ひ事の外套を、何とした事、落して來た、こん度は一郎も、二郎と二人して泣きだした。
三郎は慰め顏に、
『さう悲しむものでない、僕が一戰さして攻め殺して、女王も城も捕つて了ふ』
孤り勇んで、胸にかけた角笛を吹き鳴らした、その音のまだ、まつたくきえないのに、天から降つたか、地から湧いたか、百萬か、千萬か、雲のやうな兵士は、城の前に列を組んで陣をはつた。

三郎は劒をふるつて、號令するやう、

「隣國の女王の城を總攻撃」

忽にして百萬の軍は、女王の城を攻めかこんだ、その鋭さは、雹のやう、その動かないのは山のやう、それが百萬か、千萬か、見渡す限り、雲から雲までつゞいて居る。

なまじ戰へば、徒らに味方を傷くるばかり、さればとて降参も望ましくない、女王は苦しんだ末に、またしても一策を考へついた。

裝をかへて、花賣りになつた、籠には時の花のいろいろ、紅や、黄や、紫や、露をおびて美しとも美しいのを肩にさげて、

「花や、花、花を買いませんか」

その花の美しいやうに、その聲の美しい事と言つたらば、これにも露がたれるやう。

鬼のやうな兵士も、この花賣りの美しい聲には醉はされて了つた、誰も彼も買はう、賣つてくれと集つて來る、けれど賣らない。

「これは大將さまに上げるのだから、大將さまでなくては賣れない」

その事忽ち、寄手の大將、三郎の聞く處となつた、面白し、こゝへ呼べとなる。

女王の花賣は呼ばれた、見ると美しい花、その聲の美しさ、人は花よりも尚更らに美しい。

三郎は見とれた、あまりの美しさに、そして花を、どれか、これかと見分けて居た。

その間に、女王は、三郎の陣に忍び入つて、寶の角笛を奪ひ取つた。

角笛をとられては、翼の無い鳥も同然、三郎の通力は忽ちに破れて、さしも雲のやうであつた兵士も、見る見る霧のやうに消えてしまつた。

女王は三個の寶を得た、得々として喜び極つて、もう天下に恐い者なし。

三人は三個の寶を失した、舊の儘の不具の兵士、昨日の王さまは夢のやう、今は食べるパンさへ無い、仕方なしにまた旅に出た。

三

旅にはなれた三人であるが、なまじい三日でも王さまになつたので、贅澤が身にしみて居るから、この再びの旅の辛さは格別である、あえぎ〳〵、とある山にさしかゝつた。

腹は空つても、何も食べる物が無い、水の流れに馳けよつては、水腹も一時、情けない生命をつないで行く、神の助けか、途ばたの梢に、甘さうな〳〵、雫のたれさうな林檎が、鈴なりになつて居るのを見つけた。枝もたわゝに、一郎は猿のやうに飛びついて、息をもつがず、二個食べた。

「あゝ甘い！」

その顔を見ると、三郎と二郎は、驚いた聲をあげて倒れた。

一郎は何の氣もつかず、ひよいと顔をあげると、何だか顔が重い、はて變だなと思つて、よく〳〵見ると、木の枝にからまつて居るものがある、尚よく見ると、こは如何に、自分の鼻である、七八間ものびて、枝にからまつて、さきには鳥がとまつて鳴いて居る。

一郎は餘りの悲しさに、泣きだした、二人は餘りの可笑さに笑ひころげたが、笑つてばかりも居られない、一郎の鼻をかついで歩き出した、いや重い事〳〵、二三里來ると、こん度は梨が、何とも謂へない甘さうになつて居る、二郎は見るより、餓鬼のやうに飛びついて、一個を呑み込むやうに食べた。

「甘い〳〵、甘い」

顔をあげると、どうしたのか、、、、もんどりをきつて後に倒れた、三郎は起してやらうと馳けよつて、顔を見ると。

「やッ、鼻がない、二郎、お前の鼻が失くなつた、」

二郎驚くまいことか、撫て見ると、無い、鼻が無くなつた。

「ワアーッ」

一郎と二郎と泣きだした。

三郎も殆んど困つた、鼻を失くしたのと、鼻を擔ぐやうに長くしたのと、二人の鼻病人を抱えては何とも仕

末にいかない、餘りの事に考へ込んだ。
考へ込んだ末、一策を案じ出した、馳けて行つて鼻の長くなる林檎をとつて來て、二郎に一寸食べさした、これは不思議、二郎の鼻は舊のまゝに生えて來た。
そこて一郎には、鼻を失くした梨を半分ばかり食べさした。
これまた不思議、程なく舊のやうな鼻になつた。
〆めたと三郎、二人に謀事を話した、それよからうと、一郎は林檎賣り、二郎は梨賣り、三郎は占者、仇なる女王の國へと向つた。
市の人は、甘さうな林檎や梨を見ると、蟻のやうに集つた、是非賣つてくれ、高くつても好い。二人の商人は何と謂はれても賣らない。
「これは王さまでなければ賣らない」
この事忽ち女王に聞えた、それはさぞかし甘からう、買ひ取らせいとあつて、二人の商人は、澤山の金貨を賜つた、二人は其儘姿をかくす。
女王は靜かに長椅子の上にねて、侍女に皮をむかせて、先づ林檎を一個。
召し上ると、お約束の通り、鼻は長くなる長くなる、硝子窓をつき破つて、お庭に出た、蝶々はそのさきに、止つては飛び、飛んでは留つて居る。
侍女は吃驚して逃げて行つた、女王も驚いたが、仕方が無い、むきかけてをつた梨を食べられた。
さしもの鼻も、失くなつた、流石の女王も泣いて悲しまれた。
林檎を食べるとは長くなり、梨を食べれば失くなつて了ふ、仕末にいかない、如何とも仕方がない。
處へ、一人の占者が伺い出た、私は何でも占ひます、女王さまは只今御困りの樣子、私が見れば直ぐ直して上げまする。
女王は喜ばれて、即座に召された。
占者は一目見て、
「女王さま、陛下は他人の物を三度お盜みになりました、それをこゝへお出しになりますと、直ぐと御病氣は御全癒て御座る」

旨くも當てられた、最う斯うなつては三つの寶も、鼻の長くなり失くなるにはかへられない、占者の前に並べて、罪を語つた。

「ア、これだ」

占者は、有難うとも何とも謂はず、それを掴んで一目散、女王はあつと謂つたぎり。

＊　＊　＊　＊　＊

女王の隣國には、また白雪のやうな城が生れ出た、これを守るは三人の廢兵!。

（おしまひ）

英語の學び方

女子英學塾講師　河井道子

英語を獨りで學ばうと云ふのは、殆ど不可能のことで御座います、只文字を覺えると云ふことは、或は獨學ても出來ましやうが、書物を正しく讀み、會話を自由に操るやうに成らうとするには、何うしても師に就きませんければ、獨學ては到底望む可からざることゝ存じます。が、極く不便な土地であつて、何うしても師に就いて學ぶことの出來ないと云ふお方は、止むを得ませんから、次のやうにても致します外御座いますまいと思ひます。

英語を學ぶ上に於て、第一に重要なことは發音で御座いまして、如何程本が讀めましても、發音が間違つて居りますると、何の役にも立ちません、折角多年苦心して學んだことが、發音の不完全なために打毀されて了ひます、而已ならず、一度間違つて覺えましたことは、後に至つて直さうと致しましても、其惡い癖が先入主となつて、なか〳〵直りませず、場合によりますると、たゞ發音を直す爲に、空しく一二年を費さねばならぬやうなことになりますから、成らうことなら、攻めてアルハベットだけても宜しう御座いますから、發音の正しい師に就いて學んで置く必要があります。先づアルハベットだけが分りましたならば、それからは極く容易い書物…ナショナルリーダーなどが宜しいてしやう…について、餘り急がずに沈着いて學ぶ

のてす、最初の學び方は、可成一字々々を拾つて覺えるといふやうに爲ず、一綴の文章を呑込むやうにするのてす、譬へば、ナショナルリーダー第一の初めにある、It is a dog. と云ふ一つの文章に就いて、一字一字に其字の意義を詮索するといふやうなことをせずに、It is a dog. て「それは犬てある」といふやうに覺え込み、それを暗記したならば、今度は自分てそれに類似した言葉を、幾通りも作らへて見るのてす、It is a cat. とか、It is a hen. とか云ふやうに、種々に名詞を變へて練習して見まして、It is a dog. と口て云へば、直ぐに「それは犬てある」と云ふことが、直覺的に悟れるやうに覺え込むのてす。斯うして練習を積みますると、物を指示す時には何う云へば宜しいとか、問ひを發する塲合には何うてあるとかいふことが、自然に會得されまして、終ひには本を讀めば、別に解釋を考へずとも、讀むと同時に其意味が頭腦の中に浮んて來るやうに成ります。そして第一リーダー位は殘らず暗んじて了つて、何處に何ういふことがあつたかと云ふとを、整然と覺えて居る位まて精讀して置きますると、先きに進みましてから大層樂て御座ます。

右のやうにして、多少暗記が出來ましたらば、書物を離れて其暗記したところを書取り、それを書物に引合はして見て、誤つて居るところを正すとか、或は友人なり他の人なりに書物を讀んで貰つて、それを筆記して、後て引合はして問違ひを直すことも、大變に爲になります。暗記する時ても、筆記する塲合ても同じことてありますが、冠詞を決して疎かにしてはなりません、A dog. とか The Cat. とか云ふ塲合の A. The. は最も大切なものてすから、見落さないやうにして、如何いふ塲合に A が使つてあるか、何んなところに The が用ひてあるかを、注意して見て居りますると、自然に其使ひ方が解つてまゐります。斯樣なこと而已を調べまするには、神田乃武さんの著された「會話文法」と申します本が宜しう御座いますが、少し力がついて來てからで無くては、分り惡いところが御座いましやう。

段々分つてまゐりましたらば、少し位は隔つて居りましても、何うにかして、何處かで西洋人か日本人の良い師を見附けて、一週間に一度なり、一ヶ月に二度なり日を定めて、其師に就いて敎を乞ふやうに致したらば進みが早からうと思ひます。僅かの時間に師に就いて敎はるには、此方が餘程上手に致しませんと、大變損がありますから、充分自分で下調べを爲て置いて、不審の要所々々を拉へて質問するやうに致しませんければ、自分でも分るところを丁寧に敎はつたり、さうかと思ふと、解らないところを畧されたりするやうなことがあります。妾なども、折々外國人に賴まれまして、日本語を敎へてあげることがありますが、熱心なお方になりまするど「何うか一時間のうちに四時間分を敎へて吳れろ」抔と仰しやるお方があります。之は餘程學び方の上手なお方と申さねばなりませんので、一時間に四時間分をお敎へ申すことは、敎師の方も餘程骨の折れることで御座いますが、さういふことを仰しやる位の方は、自分に充分四時間分覺えられるだけの用意がしてありますから、それだけ覺えることが出來ますので、斯う云ふ方には、妾共は喜んでお敎へ申します。猶短時間のうちに、少しでも餘計に覺えやうとするには、時間を正確に守らなければなりません。殊に西洋人は時間が嚴しくありますから、何時から何時までと豫め約束した塲合には、キツカリ其時間に行きませんと、十分遲れゝば十分だけ少なく敎はらなければなりません、さうかと申して、定めの時間より早過ぎるのも、先方の迷惑になりますことですから、これは遠慮せねばなりません。西洋人は時間で其人の勤惰を見ますから、餘り時間を不規律に致しますと、此人は懶惰であると思つて、身を入れて敎へて吳れません、反對に、よく時間を守る人であれば、其人は熱心な人である、見込のある人であるとして、丁寧に敎へて吳れますから、殊に短時間のうちに少しも餘計に敎はらうとするものは、斯ういふ點にも注意すべきです。又、師に就きました塲合には、文字の讀み方に注意して、音節の高低を正しくすることを忘れてはなりませ

ん、譬へば、Village（村）と云ふ字があつたとすれば、此字の發音は何う讀めば正しいのであるか、之は初めのVの音が上がつて、後は穩かに讀めばよいとか云ふやうなことに氣をつけますので、之を覺えます塲合には、一々暗記するといふのは困難でしやうから、さういふ塲合には何か自分に分り易い符號を、本につけて置くのも宜しいと思ひます。

猶一段進みましたならば、これは如何程隔つて居るところでも搆ひませんから、親切な良い師を見付けて、通信で敎へを乞ふのです、自分で何か書くとか、或は會話文法書杯のうちの例題を英譯して、郵便で送つて添削して貰ふやうに致しましたならば宜しう御座いましやう、それには最初から、六ケ敷い込み入つたことを書かうと思ひまするると、困難でもあり、又、苦勞する割に爲になりませんから、矢張、成るべく平易なことを輕妙に書くやうに心掛ける方が爲になります。多數の中には、自分の書いたものを添削されるのを、甚しく嫌ふ方がありまして、眞紅に添削されやうものなら、それこそ泣いたり、口惜しがつたりして、折角始めたことを、中途で止めるやうな方もありますが、之は大變な心得違ひであります、生徒の書いたものを眞紅に添削して下さる先生は、餘程親切で熱心な、よく其人の爲を思つて下さる方ですから、さういふ塲合には、添削された箇所を一々精細に調べて、自分のと引合せて見て、間違ひを改めるやうにしなければなりません、それを添削されたからとて、泣いたり怨んだり、怒つたりするやうなものは、到底英語を習ふ資格はありませんのですから、其樣な心の方は、最初から英語を學ばない方が宜しう御座います。序に注意して置きますが、書いたものを師に添削を乞ふ塲合には、行と行との間は必ず一行宛明けて置いて、其間へ先生が充分に書き加へて下さることの出來るやうにして置くのです。文字は巧みに書くよりも、寧ろ丁寧に明瞭と分り易く書くのが禮で御座います。

右のやうにしまして、多少書物も讀め、文章も書けるやうになりましたならば、それからは自分で種々な本を

讀んで見ますると、最初は六ケ敷く思はれるものも、段々解るやうになつてまゐります。左に少し力が附けば自分で讀まれさうな書物の名を、七八種擧げて見ましやうなら、

(1) Famous Stories.
(2) Fairy Tales.
(3) Easy English stories.
(4) Baron Munchausen.
(5) Greek Stories.
(6) Black Beauty.
(7) Lord Fauntteroy.
(8) The Penny Poets.

などは、文字も平易で面白くもあり、且、價も廉てすから、少し讀み馴れましたらば、直に意味が解かるやうになれましやう。

又、研究上書物の見方を二樣にして見るのも宜しう御座います、即はち一は比較的六ケ敷い書物を選び、解らぬところは一々字引を引いて、一字一句も忽諸にせぬやうに研究するものと、他の一は、何か面白い……前に列記しましたやうなものでも宜しい……ものを見附けて、此方は意義の詮索を餘り嚴しくせず、全体の意味を知つて樂むと云ふやうに、讀むものを、眞に勉強の爲めにするものと、慰みにするものとの二つに別けて、研究致しましたならば、興味も多く、飽きも來ず、從て進み方も早からうと思ひます、殊に暑中休暇のやうな場合などには、此方法が最も宜しう御座いましやう。

（文寶在記者）

吾アルバム

橫瀨夜雨

飯の匂つてどんな匂だ、南京米でも喰ひはしまいし、そんな洒落は止せといふ友も有る、すべてのインテレストを失うたのぢや無からう、なぜ髀閉するか、根岸名產の紫蘇を贈るから喰つて見ろといふ友もある。喰ひたくないから喰はないので、洒落だの氣狂だのと

人の事を大きな批難をするやつはお茶でも上れといひたい。

けれど、どことなしに疲れを覺えて起きてゐても寢てゐても辛度てならぬ時がある、室は奥、蟬の聲ならては音づれず、枕に寄るは迷ひ入りし蝶蜂の類ばかりあまりの所在なさに、こゝに三卷のアルバムを開いて美しき爲に遠く近く散在せる友の上を思ふた。

自分は繪葉書が嫌なのてはないが、買ひたくも、食パンすら三里の路を下館に出ねば無いやうな筑波の麓に賣てはゐぬ、さればアルバムは有てるけれど人に貰うたのてある。

二枚差横綴、表紙に銀泥して角笛吹ける天童の月界に立てる繪のついてるのは柳橋なるFより贈られて、『さ月廿四日、都の人より。心閉ぢ胸塞がりて人戀しき夕に候ひき。岩手の友の林檎おくるとのみありて、それは着かず。燕軒に啼く』と題した。挾めるは品のよいのばかり、多くは挿したるまゝアルバムと共にFより來たのだ。金蓮華の蔓をのたくらして、實物には有りさうもない色の花が四つばかり描いてある、四枚ざしの無格構なやつは一金八拾錢也人に買うて貰つて持てあました品、これには始めて繪葉書といふものゝ出來た頃醉茗から珍らしさうによこしたのをどつさり挿してある。大きな口を明いて兩手を思切りのばした石版ずりの美人などを、なんと思うて買込んだらうと不思議だ。

も一つは、今度は四度目だ叉候外れたとあつては何の面目ありて西京の姉さんに見えやう、着物も洗濯した、いつ華厳つてもよいのだと、しよげてゐたS生がうまく高等學校へ入れたお祝に呉れた、うつかりすれば挿方も知れなさうな新式の品て、まだ葉書は二枚きりない、挿したくももう無いのだ、日本中の人がよいのばかり選て贈つてくれるとすぐ枕頭の慰みにするがなあと慾の深いとを考へる。

繪葉書は贅澤だといふものがある、かう言ふ人は江戸から長崎へ一錢五厘て用を足してくれるのすら高いものだと思うて、海山隔てた遠い土地に自分の足を運

はずにすむのを忘れてゐるのだ。けれど繪葉書を贅澤だとはけなしても、美しからぬものぞといふ者はあるまい。

繪葉書は美しきものである、家族や知己やの寫眞を集めた寫眞帖を持つほどの人なら、美しき繪葉書を冊と積み卷と重ねて珍藏してもよいてあらう。僕には寫眞帖は無い人の寫眞は二つ三つは有つたが持つてればきつと失すので、皆姉に預けてある、繪葉書だけはかうして一枚も疎にせず長く坐右に置て佗しき命の慰めらるゝ限は慰みて、世に有りたいと思うてをる。

書翰箋として見るのぢやない、人の手に撰された自然それは、山にしろ水にしろ、方丈の室に在るものを除いては自分には皆目新らしいので、月清き夜は野に行かんとを願ひ、花咲く朝には堤に立ちたいと思ふ、風吹く日黍の穂に逃げられた馬も、四竹振りて内に踊る踊り子も、今は思ふがまゝに見らるゝのでも無いから、僕に殘る『自然』は三卷のアルバムのみとなつたのだ。

夫婦のちよんがれを書いたのへ、『吾輩は下戸てある、酒は無論のまない、さうかと言て甘い物も澤山くはない、牡丹餅ならたつた七つ、汁粉ならたつた四杯、羊羹ならたつたひと棹、さうかといつて煙草も喫はない、さうかといつて女には嫌はれる、さうかと言て金もたまらない』とかいてよこした友がある。三卷中の秀逸なるもの。

詩を作る用意

河井醉茗

能く諸孃から新體詩を作るには初め何んな書物を讀めばよろしいとか、獨習書があれば敎へてくれとか、上手になるには何う云ふ方法を取れば好いのかとか、いろいろ尋ねて來られますが、左樣な技巧上の問題に入る前に、最も肝腎な思想上の用意が入ります、其用意がなければ如何に技巧に熟して居ても、詩人として成功することは出來ません、其用意とは何かと云ふに創

意あれと云ふことです、創意の創は創世記の創で、ものゝ始めて起る意味です。元來詩が今日に到りて世間の注意を惹き、多大の潜勢力を持つやうになつたと云ふのも、從來詩人として立たうとした諸氏が、熱心に此創意を把持したからです、歴史的、習慣的に我等が文を囑し、歌を作らうとする時に、舊い思想、ありきたりの文句が頭腦に浮んで、何うも其れに依頼して作ると作り易く、苦痛が少い、而して出來た文章なり和歌なりが相當に見られるから、成るべく其方に依頼する。然るに新體詩は然うでない、形も新しい、想も新しい、新しい思想を、新しい形で表はさうと云ふのだから、何うしても苦しい、苦しい結果は何うかと云ふに、外の歌文のやうに整はない、疵瑕が多い、耳慣れないから人が讀まない、反響がない、それでも彼等は舊思想、舊詩形と闘つて、創意あるものでなければ詩にしないと自信を持つてやつて來た。外の小説や文章は未だ以前からの型もあらうし、自由な點は詩より好い、詩はいろ〳〵の約束に制限され、其中て創意あるものと云ふのだから、苦しさは確かに散文以上である、追々創意ある作が表はれるものだから、詩を作るものは最も眞面目に藝術的良心を發揮するものであると云ふことが分つて來た、それて世間では詩を分らぬものとして排斥して居ても、少數の具眼者と、血性ある比較的感情の純潔な青年男女とは、詩に憧憬を持ち、詩に傾いて來た、之れ正しく詩の勢力であつて、此處に到つて原因は、創意ある作を成さうと務めた結果です、獨習書や、秘傳があつて詩は進んで來たのではなく、一に只創意ある作を得やうとして務めたからです、諸嬢も先づ此の創意を得る力を養ひ、それから技巧の上手になる方法を工夫するのです、それて今迄の詩人は如何なる方面に創意を得たかと云ふ事は、多くの詩集を讀む外に、簡單に知る方法は一寸ありません。

御見舞

八月下旬關東、東海其他の大洪水、函館の大火、其後に又九州中國の暴風雨等、各地の災害に就いて、本誌の愛讀諸孃も直接間接其害を蒙られた方は少くはありますまい、本社は其れ等の諸孃にお見舞申上ます、洪水後又大火後の慘狀更に痛ましきものがあるてせう、幸に自愛を祈る

新智識

▲去る八月の東京附近の大洪水は明治になつて初めてだと云ふが、明治以前の江戸時代には今より百六十五年前寛保二年に洪水があつた、其次は天明六年の大洪水で千住、本所、深川方面は言ふに及ばず小石川、牛込邊まても浸水し溺死者の多かつた事など當時の記錄に存して居る▲獨逸及び獨逸領の瑞西邊には空氣浴塲と云ふものが設けられ、多くの人間が其處に嬉戯してある、人間の不健康は多く惡い空氣を吸ふから起ると云ふので衛生を重んじて空氣浴塲と云ふやうなものも出來た、周圍には凡そ高さ一丈の板塀を造り、地には一面の芝草を植ゑ、一部に砂を盛り又冷水浴の用意もあつて此空氣浴塲は民家を離れた空氣の淸良な塲所に設けられるのは勿論の事である▲空中飛航家の泰斗サン、デュ－モン氏の『空中記』の一節に曰く夜中の飛航は極めて愉快なりと▲最近三十年間の統計に據ると歐洲各國では出生率も死亡率も減少して居る、即ち生理思想の進歩は人間を長壽ならしめると共に一方では子供の生れる事が少くなつた、此處二百年以前から人口は非常の增加した、其反動で右の如く近頃は出生數は少くなつたので文明の進歩はさま〴〵の原因から出生數を少くするかも知れない▲學月と地球とは親子の關係がある、理上、月は地球の一部が分離したものであるとは確かな説である、何れ位昔の事か恐らく算定は出來まい、併し月の離れて行つた跡が今日洋々たる太平洋となつて地球の表面に殘つてゐるのだと云ふ▲韓國の山林へ鉛筆の木を培養したら大いに有望てあらうとは林學士の話▲姿勢を正しくする事は體育上必要であるが女の姿勢は茶を立てる時、茶器を抱えて茶室に入る體、小原女が薪を戴いて市に赴く時の形が好い標本ださうだ▲理學上、鐘聲は晴天よりも曇天に、晝間よりも夜間に、陸上よりも海上に、低地よりも山頂に於て分明に聞える筈だ▲凡て動物は音樂に感應する性質を持つて居るものだ、松蟲、鈴蟲のやうな蟲類は人の足音、物音などを嫌ひ、一寸響がしても鳴止むものだが、其反對に三絃、琴殊に尺八を吹く時は不思議にも競爭して鳴き始めるさうだ。其他鳥類も然うだ、狗も亦音樂に對する耳を持つて居る▲東京市内一日間に發着する郵便物の平均數は六十三萬〇八百八十通である▲同じく一日間に電報の發着が一萬二千七百八十四通、電話の通話數が十八萬六千百五十二回となる。

山中古洞先生選

懸賞當選圖畫（其十二）

（1）空也念佛（二等）　下谷區上根岸四六　藤井　星子
（2）夏の雲（三等）　東　京　後藤　順子
（3）葡萄棚（四等）三河國寶飯郡一ノ宮　近田みつ子
（4）弟　妹（五等）　埼　玉　村上　花月
（5）鋳かけや（五等）　本郷區弓町一ノ八　和田てい子











叙事文

文學士沼波瓊音先生選評

三等　○ながれぼし

三河寶飯郡一宮　近田みつ子

夕餐もすまし行水も終つて、御祖母さんと妾と妹の花ちやんと三人で夕顔棚の下で涼んで居ると、『あ、わたい今撫でるだつたが』と花子、流星の流れるひまに髪を撫でると髪が黒くなると云ふ我地方の諺を思ひ出て流星を見たから髪を撫でようとしたのだが頭まで手の行かぬまに流星はすーつと消えてしまつたのだ、今度こそはと思ふのであらう、頭の上一寸程の所に手を置いて、圓い眼をきよろ〳〵させて空を眺めて居る、すーつと空を流れたと思ふと、花ちやんも髪をさらりと撫でた、『もうわたいこれて良いから今度は姉ちやん撫でなさい、姉ちやんの髪ももつと黒くなるから』『あいよ姉さんも今度はきつと撫てます』と手を髪にあてると『あれ、姉たん先きから撫てゝ居ちやあだめだわ』と云ふから、花ちやんのやうにして天を見て居ると、此度はおばあさんに向つて『おばあさんも仕なさいきつと其白い髪が黒くなるから』『おほゝゝゝおばあさんは良いからおまへもう一度おなで』『いゝえわたいは良いのよ、おばあたんいやならわたいが撫てて上げるわ』と云つて空を見上げると直ぐ『あ』と云つて優しい小さな掌で白髪の頭を一面に撫てたが、流星はまだ消えないのでまたぐるぐると白髪を撫てたがまだ消えない、後れ螢がつーいと一つ飛んだのであつた『あら螢だつたわ』幾度も撫てたからきつとおばあさんの白髪が眞黒くなりますよ、おほゝゝゝ』と妾がからかうと『此度はきつと撫てゝあげるわねえおばあさん』と云つてまた空を眺めて居るが中々流星がない五分間も空ばかし見て居て小さな手は白髪の上一寸程の所にあるのだ。

『あーつ』と欠伸をしたから眠くなつたのだらうと思つて『花ちやん今夜はもう寝ませう、また今朝のやうに朝寝をすると朝顔が見れぬから』と妾が云ふと『いやだわ一度撫ててあげにや』と中々聞きさうにもないから其儘にして空を見て居ると、つーいと初めもなくまた終りもないやうに流れた『そら』と妾が云ふともう花ちやんの手は白髪の頭にのつて居

る、『さあ寝に行から』と妾がおんぶして歸つて來ると『あのおばあさんの髮が黑くなつたらわたいのりぼん二つあるから一つ上げるわねえ』。妾もおばあさんも一度にどつと『おほゝゝゝおばあさんに赤いりぼんはよく似合ふだらうねえ』『ほゝゝ』母屋の方でも『ほゝゝゝ……』と母上の笑聲。

（評）話も面白し花ちやんの熱心なる様子飾氣無き筆によく／＼寫し取られたり幼女老婆の白髮の上に手をかざして流星を待つ邊詩趣迸る。

四等

○渡船

本所區外手町六十一番地　田中久子

園枝さんの帶の紅いのが黑ずんだ水へ映つてゐるかと思ふと夫が散り／＼に搖れて崩れて船は今棧橋を離れた。頭の赤く禿げた片肌脫の船頭はうすい唇をグイと歪めて結ぶや、水の滴る長い竿をグッと杭につくと蹬を斜に旋せかける。スルスルときれいに水をわけて音もなく、今此小さい渡船は隅田川を横に突切らうといふのです。乘合ひは園様と私と二人ぎり、大きな空の碧をいたゞいて周りは漫々たる蒼き水、心地のよいのはいふまでもない。園枝さんは今無心に水面を眺め乍ら小さい鐵の欄に寄て破居る。油のない束髮の毛が亂れて後にさした紅薔薇のうすうい絹の辨が川風にビラビラと戦いでゐる、白絣に紅の多い友染のおみ帶でスッキリ立つたら誰でも妬ましいと思ふやうな優しいお姿、しやがんだ裾の下から白い踵が少し見えてお下駄の黑塗が夕日にかゞやく。

「まあ時さん」と園枝さんは行成と私の膝へかぢりつく何つて云ふ間もなく船が右へ傾いてフワッと高く浮いた「こわい」と園枝さんが白い頬を私の胸へおしつけると又船が高く上る、シュッと大きな音を立てゝ今蒸氣船が橫網町の發着所へついた、とみる今度はずうッと下へ、水の底の底の方へても落ちてゆく様な氣持がする、ドッボン、ジャブンと水が舷へ打つかる音がして飛沫がバッと頸へかゝる、ドッボン／＼と云ふ音がして船が二三度上下へ搖れるとやッと少し靜になッて自分の前の舷へ立つた船頭の足の大きいのが目につく、園枝さんも一所に見上げると赤い顏の耳から顎へかけてトゲ／＼に生へた髯にこわみは在ても煙管を啣へた口元に笑をうかべて「大丈夫てさあ、蒸氣が通つたて」と二人を見下し乍らいふ。園枝さんは肩で息を吐て輝いた目で私をご覧になる、蒸氣はもう遙兩國の方へ走て行て了た後で白い泡が百本杭に當つては碎けてゐる。船は川の眞中迄出て了たので右からも左からも大きな船が徐に寄せてくると其間に炭俵だの緒の切れた下駄だの土瓶の釣の外れたのだのが流れてくる。藁挨や外の小さい埃は外の塊へ引かゝつては大きく成

てゆるりと水を一周りして其處で小さく水をせき分ける、そして私の船の舳の方に引かゝつて來たが藻の長い尾を引いたまゝ、一所に流されてくる。つい直目の前を大きな傳馬が過る、幾反帆か鼠色に成た大きな帆を風に孕ませて今上つてくる所だ、手拭を冠つた女房さんが桃色の着物を來た赤ン坊に乳をのませ乍ら二人を繁々見守てゐたが聽て赤ン坊を一搖り搖ると帆のかげで見えなく成つた船頭は竿をグイと深くさし立てたが煙管をポンと舷へはたいて手早く竿を持ち直すとギーとゆれて船はもう病院のわきの細い流れへは入つて行く。園枝さんはしやがんで船頭の後姿を寫生していらつしやる所で鳥渡私を見て目でわらつて又俯く。瓦斯會社の太い煙突の黑い煙が北の方へと流れる。

（評）渡船、汽船、傳馬、流るゝガラクタ、大川の光景殆ど描盡さる、筆蓋緻なり。



鎮守の森　淑子

五等

○引越の前

四谷區愛住町四七　孤蓮女史

今迄田舍で自分の家に住んで居たから引越の味は知らなかつた、が此間東京へ來て、兄の住んでゐる今迄の家が狹いからと云つて、今度引越をすることになつた明朝七時に引越車が來ると云ふのでけふは終日大騒ぎわれはまづ書籍から片付始めた、二つの本箱にぎつちりと大かばんに一杯、夫からごた／＼物を行李や鞄に詰込んだり、こはれ物の荷造りに座敷は足のふみ場もない、外を通る屑屋を呼んでは端から端から出る不用物を拂つてしまふ、それも少しでも役に立ちさうな物は近所のよく世話して吳れたお婆さんに遣ると大悦びして、幾度となくお禮を云ふ、夜具と臺所道具の一部分は明朝として、大抵は片付いた樣だ、日はもう山の端に近くになつた、一應座敷の掃除して、まあお茶でも一つと姉樣が入れて下すつた香ばしいのを戴きながら自分はさう思つた、まあ何と云ふ騷ぎだらう、東京の人はよく引越をするが、しつけない我々などはいやな事だ、二度とこんな騷ぎを繰返さうとは思はない、新家持の此家でさへ、之で車へ七八臺はあると云ふ、そして是丈かちんとしまひ込

んだ荷物を、あすは麹町から四谷まで運んで行つて又すぐに引づり出して再び夫々へ始末をつけなければならぬと思ふと、馬鹿らしくなつてくる、兄樣は一人で植木の心配計りして入らつしやる、植木計りでも隨分だ、是丈が大方一車はあらう、夫から猫をどうして行かうと云つたら、姉樣が是に入れてと、大きな信玄袋を出された、みんな大笑ひ、あすはさぞをかしいであらう。

一同お湯に入り、夫から此家での終りの晩餐をした、めて、こよひは早く寢についた、いよ〳〵こゝでの寢をさめだ、われは戸じまりをしながらさう思つた、此後は又どんな人が來て此戸を開閉するであらうかと。

（評）山は無けれどさら〳〵としてよし。

秀逸

◎寐顏

愛知縣　永田舞鶴子

麗らかなる秋の日和の春の如、淡き〳〵陽炎立ち迷ひつ、午後三時頃の日は、弱く暖き光をば眠れる稚兒に與へつ。

寶に愛らしの兒や、美はしの寢顏や。年は二つか。雪の如き白フランネルの衣に包まれて、配合よきとき色レースの涎掛の中に眠る靜なる其かほよ。女といひても人は怪しまざるべし。されど何處やらに見ゆる凜たるけはひよ。我は正しく男の兒と見し。ふくよかなる羽二重の如き双の頰は、林檎の如く紅く彩られつ。閉ぢたる眼、小羊の如く和きまなざしをや包むらむ。雪の中に匂へる紅梅の一花、それにも似たる愛らしの口よりもるゝ寢息靜か、今にも笑ひ出さんけはひ。

傅りする人は何地行きけんあたりに人のけはひもなし。松の根方に眠りし毛色美はしき一疋の洋犬、我足音に褐色の長き尾引立てゝ靜に歩みよりつ。じつと我をば熟視する事暫し。よくこそ主を守れるよと頭撫でやれば、安心せし如く我邊を一めぐり、幼き主の寢顏を靜に見やりて、再び岩の傍に耳を垂れ、目を閉ぢたる顏をば前足に乘せつ。眠れるか將さめたるか。

翅弱き白蝶一つ、散り殘れる白萩のあたり彷徨ひしが、いつしかヒラ〳〵と飛び來つ、眞白きショールに包まれたる胸のほとりにとまりぬ。

さながら神の命をさゝやき傳ふるが如くに――

木蔭に眠れる洋犬は、雀折々せはしげに鳴く聲を、いと物憂げに微かに眼を開き耳をそばだてつ。

靜けき風さと起りぬ、淋しき梢を搖がして落葉の音雨の如く。燃ゆるが如き深紅の紅葉、無心の寢顏に二つ三つ！

すや〳〵と眠れりし稚兒僅に動きぬ。つときて身を一

ゆすり。持ちたるおもちや手をすべりてガラ〲と音しつ。

蝶は驚きて飛び去りぬ。犬はねぶり醒まされて立ち上りぬ。無心の寝顔尚平かに、宛然聖き美はしき神のやどりますごとく……。

（評）巧妙なる油繪、活ける油繪。

○眞晝　駿河　大倉光代

暑い日である。

歸省してからまだ一度も雨を見ない、身體中から汗がじみ〲と滲み出す、私は本を置いて窓際へ行つて、團扇を使ひ乍ら階下を眺めた。

日は家根の上にあるのか、此處からは見えないが、向ひの家の屋根瓦は、煥々と照輝いて、其めまぐるしい反射は見た丈でも汗が出る、かん〲と鐵を打つやうな音が遠くから響いて來るが、是が又妙にねむ氣を誘ふ、氷屋の風鈴を鳴らす程の風もない。

敬さんが重さうに手桶を提げて來たが、旋て暑い〲と云ひ乍ら、乾き切つた往來へ水を撒く、可笑なもので、私が未だ小供の時には、毎日敬さんと遊んだが、此頃は稀に口をきく計り、異性と云ふ事がお互の頭にあるからでせう。

自轉車が一臺、ずつと泥をはね飛して、勢よく行つて了ふ、敬さんは其をよけるやうに飛退いたが、其儘家へ這入つた、十二ばかりの男の子が、何か風呂敷包を持つた跡へ、蝙蝠傘が二つ揃つて通る、男の子は此方の塀へ寄つたので、姿は見えずに軍歌が聞える、鳥渡往來が途絶えた、のんびりとした調子で鶏の鳴くのが又ねむ氣を誘ふ、耳を澄すと机の上の懐中時計が秒を刻むのまで聞ゆる。

ごろ〲と橋を渡る荷車の音がした、角を彼方へ行つたのだらうと思つて居ると、まだうら若い少女が右手から現れる、手甲脚絆の甲斐々々しい服装で桃色メリンスの襷をかけ、青物の荷をかついで居る、と左手から美裝の若い二人連が來た、とき色の手帕て顔をふく途端に指環のダイヤがギラリと光る。

階下てお母さんの呼ぶ聲がしたから、窓を離れた、自轉車の騒がしいベルが窓に近く響いた。

お母さんが何か御馳走をして下さるだらう、と思ひ乍ら梯子段を下りた。

（評）眠くだるき趣よく寫されたり。

○歸省の兄　土佐　軒の玉水

つひこの四五日前、五年振りに故郷の土を、おふみなすつた角帽の兄様、此地にお出ての時分は、それはそれは質素な、少さいお心だつたのに、五度の星霜は、

殆んど別人かとも思はしむる位、兄様の身心に大なる變化をあたへたのである。

お歸り早々先づ驚かれたのは、御風采！お言葉使ひ！其昔棕梠箒かとも思はれたお髪は、今やぬばたまの黒髪と變つて、眉もかくれる程な其長さ、丁度墨に朱を交ぜた様だつてからかはれた、お色は召して被居る服と同じ様、何寸もありさうなカラをなすつて、眼鏡越しに、キロキロと。下界をお見渡しなさる様つたら、どうしても五年前共に爭ひをした、秀兄様とは思はれぬ、それにお言葉使ひの變り様つたら、ひどい、お祖母様など、やうお聞きなさらないと見えて、幾度もお問ひ返しなさる、五年前の、おかよ、お前何々をしてくれいは、いつしか、香代さん、あなた一寸このカラをはづして下さいよなんて、まるで他人の様に、被仰る、此方からどうお返事していゝやら、きまりの惡いさつたら、ありやしない、これでは、いか程、厭な事を、御命令遊したつてまさか否も出せまい。

其上、お副食の御非難、お母様と御一處に汗水たらして、製つたものを、やれ滋養が少ないだの、消化が惡いだのと被仰つて、容易に箸を、おつけにならぬ。本當に、お香物でもかまはぬと、お茶漬のザブザブを遊ばした昔は夢の様。

それから立派な、釣床など、買つて被居つて、坐敷の晝寢はどうもつらいと、大事な庭木へ、どし／＼と、くつつけなさる、弟は泣きさうな顔して、あら兄様いやよ、そんなに木を動かしたら蟬が逃げてしまうだものと、せびたまを、持つたまゝ、こぼして居る、今日はお友達が、被居ると、ソーラ御馳走をとの、御命令有り合せの、お菓子を持つて出たら、いきなり、エーこんなつまらんものをとて、ひどい御立腹、お給仕に出た私は、お友達の前もあるのにと顔から火が出さうお煙草と云へば、平常でも極上等のを、半分位のみかけては、火鉢の中へ、つゝこみつゝこみ、一日に幾包みもめし上がる。

外出の折だつて、刻煙草て事を足して被居つた、お父様を、見なれて居らるゝ、おばあ様は「どうもおよけない」と、云ひそうなお顔付で見て被居る。

嗚呼本當に、兄様のお變り様にはあきれた事よ、東京とはあんな處か知ら？なんぼ學士の月桂冠を頂いてもあれじやあ、とても…………。

昨夜も少し、お嫁の事を申かけたら、そんな田舍者はどうもなんて、一向おきゝにならぬ、あゝあの優しい妙子さんと、近々のうち一處に居るやうになるんだとひとり悦こんで、居たものを、望のつなも切れてしまつた。

あ……も……もしかあちらにお約束遊した方でも？おゝそれ昨日も女文字の變な手紙がお机の上にあつた

實に學士の兄樣が、ほしいほしいと朝夕に思つて居たが、いざ望み通りになると、慾かは知らないけれども又色々悲しい事が出來て、母樣は、女親では、とてもむつかしいと、おこぼしなさるのも御尤もだわ、あれまた坐敷で母樣とのお爭ひ！　何を云つて被居るのか知ら？

いさゝ川

（評）この兄樣は「文明開化」とかいふものゝ權化。

○お團子屋の姉さん

根岸　姉さん

私は今日からお團子屋の姉さんになりました、私の家は極閑靜な御宮の傍にあつて前は玉川と云ふ美しい川に面して居りますいつも夏になると涼みがてら釣などに來る人も大分ありますので御父樣の發議此夏休を利用してお團子屋を始めることにしました、僅ばかりで道具も整つてさて各々の役割が定まりました、第一の粉引が父樣と兄樣、それをふかしたり餡を造へたりするのが母樣、二人の妹は餡を付けたり付燒にしたりするのです、そして一番最後の役即ちお店の方は皆私が引受けることになりました。



朝早くから大騷ぎやつて漸く出來上りましたので其を行儀よく並べ、さて早く客が來ればよいと待ち構へて居りました、ところが如何したものか今日はチットモ人が通らない、すると少さい方の妹が時々障子を開けては「姉さんまだ誰も來ないの？姉さんは下手だね、私がして上げるわ」と店のかどに立つて、「入らつしやい、えーお團子を召上つて入らつしやい」と妙な聲色をつかつて云ふのです私はをかしくて一人でころげて笑つて居りますと臺所の方からも笑聲が聞えて來ます暫くして通りかけたのはいつも取付の魚屋の淸さん、「ヤア面白いとが始まりましたな」と例の威勢のよい調子で入て來てヤアそれに御孃樣の店番とは愈々妙ですな是非一つ戴かして貰ひましやう早速御茶と御團子を出すと頻りにうまい〳〵と食べて吳れますのでなんとなく嬉しく微笑まれました、歸るとき私が默つて笑つて居りますと妹が傍に居て、

周防　朽葉子

「有難う又おいてなすつて下さい」と頓狂な聲を出して云ふのです「秋ちやんはオシャマね」と云へば、「姉さんは默りね」との返答。

それから晷染の衣の旅僧が來る、近所の乳母さんが子供を連れて來る、書生さんが來る、釣の歸りの人が來る、中々忙がしうございました、そして私は給仕して居る間に「オイ姉さん」なんて呼ばれる度に何となく恥かしいやうな氣がして知らずに面を赤くするのでした、來る人々は皆歸りに妹の例のオシャマな「有難う……」に笑はされるのです。

夜になつて賣上高を計算すると三圓十六錢、お父樣が之は皆お前達の勞力てなつたのだから夏休中のを貯めて欲しいものを買ひなさいと仰つた、私は兼てから望んで居たロングフエローの詩集と銀時計を買つて貰ふ事に約束しました、お團子屋の姉さんとしての一日賃に面白う御座いましたよ、これからあと一ヶ月半の間彼の詩集と時計を毎日夢見ながら能く働きませう。

（評）わざと氣取つた所が無くて宜し。

○踏切番　大阪　大磯年子

お父樣が踏切番となつて、此小さな小家へ住はれたのはいつの昔でありましたか、妾は少しも覺えませんのですが、妾を小學校へ入れて下さつた時分から、もう此あたりの人樣はお父樣を踏切の爺さんて、妾を踏切のお由さんて呼で居られましたのは幽に覺て居ます、お由さんは賢いたち、惡氣のない可愛兒だとおほめ下さる人樣のお噂、爺は業務に忠實じやとは時々お出になる鐵道員のお話し。

澤庵に麥御飯、人樣の樣に榮耀な暮しは出來ませんでも、妾は毎日お父樣と御一所に心樂しい日を送て、花の樣に着飾られますよそのお孃樣を見ても、羨しいと思はず、學校を退た去年の四月から、毎朝々々お日樣のお出にならない先に起きて青々とした畑の細道の露を踏んで紡績會社へ通たのです、而して夕方歸るさに逢ふ村の人樣や學校の先生さまが、お由樣は孝行な子ですねと云て下さる、それが亦妾には何となう心嬉しう感ずるのです。

然し今は其會社へも休て居ます。

今我父は病て床に臥す身となりました、妾は破れた白い旗を振つて、上り下りの列車を送り迎て此線路に立初めてからもう一月、まだお父樣の御病氣はよくないのです、こんな時には人樣よりも神樣て御座います、妾は毎日神樣に祈て居りますから、屹とすぐよくなるに違ひありません、早く御病氣がおなほりなさつて、妾は早く會社へ行きたいので御座います、只旗を持て立つ位の業は若い身の妾には勿躰ないと思ひますわ、

お父樣に申しますと、中々踏切番はそんな賤々しい者ではない折には人の命を救ふ擧があるからの、と申されました、人の命！、さうそ去年の夏此て轢れて死なうとなされた女の方を助けた事が御座りましたわ。何故てんな樂しい世の中に住て居て、轢れて迄死なうとなさる方があるのでせうか、妾は本統に不思議でなりません。

（評）飾り氣無きが愛す。

○訪づれ　下谷　橋本波子

芦の葉渡る湖上の風、露を含みて、冷やかに頰をなむるに、吾は不圖、夢破られて、身を起して、窓に倚りぬ。水上一面、白絹を延べたるが如き淡靄に蔽はれ、辨天島の邊、只仄かに淡墨の畫を見るが如き綠樹の影の波に搖ぐ、折しも好し、今迄雲間に息を潛めし、十日餘り三日の月は、天上なる秘密をば、下界に知らすが如く、徐々と其半面を現して、美しく、さやけく、淸く涼しき、光の一線をサッと湖へ投げぬ。突如、何魚か、一尾の銀魚波上三尺の高さに跳りぬ、花ならば莚としも見る可き、水底の月影を中心として葩の如き波紋の幾線となく、輪を畫きつゝ、汀の方へと廣まり行く。時、髣髴として吾が眼底に映じ來れる、一個の奇しき物影あり、恰かも波紋の中心なる月影の、抜出したるかの如くに――。月の精――叫ばんとしつ。神氣を落着けて再び篤と、透かし見るに、優しき、美しき、女人の姿、丈の黑髮を兩肩に流しつ、身に水色の浴衣輕くまとひ、瘦せて、蒼白なる面を、月影に浴せつ、スックと靄の彼方に立ちて、懷しげに此方を瞶めぬ。彼女は、黑く涼しき眼に、凄き微笑の色を堪へて、纖き歩みを汀に進めぬ。彼女は疾くも歩を運ばしつ、此方の岸なる、巨岩の兀々として突出せる所に迫りぬ。彼女は怨しげに、巨岩の頂を視上げつ、其儘其所に泣き沈みぬ。途端！月は雲間に隱れて、彼女の姿は闇に消えぬ。水上の冷氣は颯と肌に襲ひ來て、大牛の寢臥れるが如き岩影の闇にいと黑し。折しも天使の叫ぶが如く、睦友なる美爾子の君は、危篤なりとの、知らせありしと、後なる襖開けつ、聲張り上げて、妹は叫びぬ。吾はアと驚きて、答ふべき言の葉も忘れ、暫時自失せり。噫、美爾子の君が病、そは今始めて耳にする所なりき今にして思ひもされつ、彼の女人の面影は、何處となく美爾子君に似よれるを――。彼れは果して月の精なりしならんか。

（評）趣向面白し、かゝる不思議を書くにはまだ筆の力足らず。

○漂浪　神戸　佐々木翠子

屋形の小舟はわれ等を載せて、蛋の苫屋の殘んの燈に見送られ、瀲灔たる海波を蹴つて沖へ〳〵と、辷り行く。

薄紅梅を散らしたやうな夕映の色も、看る〳〵黒幕に包まれた、今まで蒸霧深く罩めたる須磨の海、折柄吹きくる一陣の汐風に名殘なく吹拂はれて、浪路の末に一圓の明月洗ひ出された途端、岩屋の燈臺の光がパッと目を射る。

「好い凪でがさー。こんな晩にや龍宮の乙姫どんも海の上へ夜遊びとくるか知れねーぜ、ナニ出て來たら俺がふん捕まへて、旦那樣や孃樣方の酒のお酌でもさすますだハッハッ……さー行けと云はつしやるなら何所までゞも行きますべー」

豆絞の鉢卷小意氣に締めたる老船頭、罪のない洒落も面白く、赤銅のやうな腕に一入力を込めて櫓の音高く漕ぐ、見顧れば浦曲一對は墨繪で畫いたやう、淡路島山は恰度寢牛のやうに見える。

「アレ姉さん螢が澤山浮いてゝよ」。靜ちやんの指さす方を觀ると成程…「アッ螢じやなくつて、漁師が魚取る火ですよ」、網引夫が手繰網の灯火點々と散在して、得も云はれぬ美觀、兄君は舟を寄せて潑溂とした鮮魚を購はれた、捻くつて見度くて堪らないから密ッと一番大きいのを確と捕まへて、俎板の上へ載せたが、ピシャッとやつた武者振に思はず手を放す機に海中へ淘然……。

「姉さんは食道樂の本なんか見て理屈はつかし言ふけど、何にもなりやしない」とは靜ちやんの惡口、伯母樣から無理にすゝめられたお酒を一口啜ると、其儘五體は夢心地。

湧くが如き談笑も斂まりて、夜は稍々闌けた、舷をたたく浪の音を枕に、空を仰げば碧穹唯一望際涯なく、月はいつしか瑠璃を碎いて、清氣澄める水に落ち、兄君の尺八の千鳥の曲に舟は眠るが如く、とろり〳〵と銀蛇を追ひつゝ、無限の沖に漂ひ行く。

(評)　あの邊の海は全く靜なり。

○雲の峯　三重　長井蓮月子

向ふの工場の烟突から、黑烟が出かけた、高く聳へた雲の峰は今くづれようとして、火の見櫓にかぶさつた日はやきつく樣にてつて、常には人通りのある街道も人一人通らない、よく太つた雌どりが一羽あえぎ〳〵軒へ來て、土をほり初めたから、手をあげて逐ふと、パッととんで土ほこりが白う家の中へ入つてくる今更逐はねばよかつたと後悔してゐると、どこからかペン

キの悪臭が鼻をついてくる、松並木の方からは絶えず蟬の音がやかましく聞えて來て、街道の砂はキラ〳〵と光つてゐる、奥の八疊で兄さんが寐ころんで文章世界をよんでゐたが、つひにすや〳〵と眠つて仕舞つた常にはよくなく軒の目白も目をすゑて居る、ゴロ〳〵と重い車の音が聞えてきて、瘦せた赤馬が鐵を積んだ車を苦しさうに引いて行く、車の尻には四十計りの馬方が腰かけて、煙草を呑んでゐる。

日はます〳〵輝いて、道を見つめて居ると目がくらみさう、汗はジワ〳〵と頸からも背中からも流れてくる團扇を持つても生ぬるい風が起る計り。

裏庭の葉蘭は今をさかりと咲いて居る横手の夕顔棚の板はそりかへつて、今夜咲く蕾も三つ四つ見える、桐の木の下かげには、多くの蟻が群つて、さつき兄さんが捨てた西瓜の皮を引かうとしてゐる。蜜蜂が一匹石燈籠の下からとんで、羽音靜かに餌をあさり行く。雲の峰はつひに亂れ〳〵て、空一ぱいに廣がつた、家の中は靜かに、座敷の時計は二時をうつた。

(評) 寫すべき材料の選み方になほ工夫せらるべし。

山頂の日出



無名子

○天守にのぼる

和歌山市 さき子

二錢の縱覧料を拂つて城門を潜り、處々の割目よりひよろ〳〵と秋草の生ぜし閤道を一筋に、武器庫兵糧庫の前を通抜けて妾は今五十五萬石和歌山城の天守に登らんとするのである。

青銹の大な銅の水溜を右に火の用心の札を左に、駒下駄を竹の皮の上草履にはきかへて、冷たき板間をトボ〳〵と薄暗い階下の一間へと來ました、其處にはかの元寇の役に夷クブライが對馬の我同胞を殘忍の刃を振うて殺虐した悲劇の一幕を繪具はげし古幕を背景に武者人形を以てパノラマのやうに現はされて居る。

鐵甲は乱軍の中に脱げて大童となり鎧の草摺は切落されて幾ケ所の深傷淺傷!! 血に染りし大太刀は鋸の歯の如く續く味方もなき松の根方にドッカと座して無念の巨眼クワッと見開たるは島主國宗てあらう、情もなき敵の刃に辱を受けんよりはと黒髪長き白無垢姿の夫人が愛くるしき七つばかりの姫君を膝下に

其玉の咽に白刃を加へんとしていく度かたゆたふを姫は楓の如き兩手を合掌して觀念の眼を閉ぢて居る「ク……」俄然妾は幻想よりさめた、何の聲であらうと思うてうるみし眼にて天井を仰げば白い鳩が二羽扉の上に巣をして其糞であらう点々として板の間に白い妾はあゆみを進めて三百餘級の木階をよぢて天守に出た人の氣絶えし五百疊の大廣間は鈍き夕暮の日影にてらされて一種黴臭き香が鼻をつく。

トントントン、誰か木階を登つてくる樣だが今頃ハテと思ひ乍ら少からず胸騷がしながら待つて居るとそれは門番の面白いお爺さんであつた「お孃さん」此んな處で日を暮しますとお化が出ますよハヽヽ、もう門限がきれますから早くお歸りなさい」と大きな銅鑼聲、それが重い室内の空氣に波動してガラン〱とひゞくのである、急いで階下に至り松の老幹にもたれて再び城を仰ぐと天守は夕陽に照されて美くしい黄金色にかゞやいて居た。

(評) 天守の下に人形がある等は振つたもの哉。

○秋の一夜　神奈川縣　飯田白露子

書見にうみていつしか文机にうたゝねしつ、故里忍ぶ折もあれ二聲みこえなき渡る雁がね、夢やぶられていそぎ窓の戸、おし開けば、名のりつる鳥のかげは見えで、十日あまりの月、ほの白うさえに〱て、部屋のうちふかく、松のかげをうつしぬ。

惜しき事しけるよと、くやめど詮なし。身にしむ秋風、袂にうけて庭のうち、そこゝとなくさまよへば、築山のほとりに、生ひたる、若竹の、葉末に、露のおきて、月、あやふげに、やどれり、さてもなか〱に、あはれなる眺にこそと、寒さもわすれて、しばし見入れば、上野のかね、淋しくあたりにひゞきて、わくら葉三つふたつちりぬ、あまりにおしき今宵のながめと思へど、夜もいたく更けゆきたれば月にあしたを約しつゝ、いつしかまた、夢路をたどりぬ。

(評) 筆はよくまはれり、趣向を考へ給へ。

○我が家の夕　丹波　難波愛能

「母上はぬる湯がお好きなるに、我さへ、斯く海老の樣に、成りたる後、嘸あつく、思し給はん。疾くうめて差し上げよ」との兄上の御言葉受けて手桶片手に忙しく裏井戸に走せつけぬ。折りから薄紅榮えし東の空、月や今昇るらし。小暗き夕べの幕の一重々々と剝がれ行く。

漸く井戸側近く到りて見るに、朦朧なる影にもそれと知らるゝ、隣の叔母様らの、何事をかてまく〳〵と話し居たまふ。母上のさてこそ待たせられんと思へば、心も心ならねど側へ行くともお手桶の充つる迄は待たねばならぬに、お話の腰折るも本意ならずと其儘梅の繁みに身をよせぬ。

爰と井戸側とは、距て四五間もありぬべし。話聲は、さやかならねど、時折。「さても感心なお方……高澤様や芳江様のお幸福……嘸かし彼の世から……戰爭が無ければ……お氣の毒……」等の語切れ〳〵乍らも、まぎれなく聞こえて、思ひ當る身の今さら乍ら良き母上に仕ふるを得し二人の幸を染々喜びぬ。

其中に叔母様らは御用果てたりと覺しく、猶何事をか語らひつゝも、隣れる軒へ入り給ひぬ。たゝずむ間にも早や二つ三つうなり寄る蚊に、さなきだに、湯殿なる母上の事思ひめぐらせ、待ち遠しさも一層なりし妾は、いざと計りに手桶取り上げ古井筒によりて棕梠縄たぐりつ。ざぶりと音して小さき釣瓶に水や滿ちたる、手應へするに、から〳〵と常ならず音も忙しく、一つるべ、さと汲み入れし折、傾きし井の屋根覗く月かげに、泡立つ水はきら〳〵と金糸、銀玉、思はず見恍れしが、漸くに二釣瓶の餘り汲み取りて、猶搖らぐ波のまに〳〵、小走りに湯殿に歸りつ。

ふと見れば、小暗きに蚊の音のみ繁くして、母上のみかげはあらず。あなやと勝手元窺へどそこにも在さず。さらばとて只二間なる奥へ這入れば、窓に凭せし兄上の詩詠のみ聲高く、「母上は――」と伺ふ妾が言に振りかへりて風呂は上加減なりと宣ひしが、そなたが水汲みに出づる間に上り給ひ、我の歸省を心計の祝に魚なりと求め來んとて、出で行かれたり。後にてそなたは日ねもす疲れし汗を流してよく休むやうに仰せ置かれぬ。」とにこやかに云はるゝに、妾は有難くて只言葉も無く首肯きぬ。彼方拭ひ清めし床の間には、今宵も變らぬ灯に、昔の儘のお二方の笑顔美しく三人の幸を守り居給ふ如。

(評) どこやらになつかしき所あり



嚴島　塚本きよみ子

新體詩

河井醉茗先生選評

一等

○化粧室

越前　萬差子

ああそのかみの宵なりき、
圓穹の華瓦斯に、
窓の浮彫薫りあふ、
きらびやかなる化粧室。

戸張の隙にかいまみて、
美しき扉の往きかへり、
心さやぎの、そのかみの、
扉をまたをしぬ、夢ごこち。

童さびたるもの怯ぢや、
いくたび室をよぎりしか、
また事老に、そのかみの、
夢ごこち、おゝ、扉をおしぬ。

押せば薫りぬ重き扉の、
音は薫りぬ、さゆらぎに、
ふと面上げてまたみれば、
ては燦びかの大鏡臺。

魘れごこち眸逸らして、
醉ごころふと浮足に、
戸外にこそはいでにしか、
あゝきらびかの化粧室。

少し西洋がり過ぎたかも知れませんが、此想、此技、容易く得べきものでありません、化粧室の扉を押すと云ふ刹那の感想ですけれど、よく歌つてあります、敬服。(醉茗)

二等

○古時計

名古屋市小島町　宮地すみ子

影を吸ふ壁にくろだみ
玻璃の面くすぶり銹びし
古時計闇にかゝりて
微かにも刻む針の音
(チクタク‥‥)と、歩みつかれし
病人がゆきかひしげき
塵あびて古戸にもたれ
現なく、あやしきさまに
いくたびか吐息する如
分銅は腕だるげに。

彈機の油やつきし
傷つゝむ——胸の痛み
活動の威力や衰えし
魂拔けて——礑と止りぬ、
衰滅よ、あゝ世の終か
ものおぢは、つとほのめきて
顫々と體ぞふるふ
血の氣なく靈はなやみて
しみ〳〵と胸にしみ入る
さみしさに涙流れぬ。

上田敏氏譯「海潮音」の中なる時計の詩を見て、感嘆したる自分は、此作に接して、亦才人の乏しからざるを欣ぶ(醉茗)

三等

○夜の海べに立ちて

信濃下諏訪　山田くにゑ子

あな寂しらの夜の海や、
陰府の扉吹ひて迷ひきし

其冷えぶりに夜の風の、
闇をまぎれのいづてより、
弱き我身の魂や吹く——。

泣きそぼつ、波のむせび音そとのせて、
世の漂流に一人泣く、

（血汐なき頬を辷り來し、冷き涙に悸きつ
胸の寂琴みだれ音に、
追憶の曲又奏くか、
あゝ吾はつひに涙の子——）

つと目を上て仰見る、
天に光の星見へず、
ため息低に頸垂し、
ゆく手に白き影うごく。

物怖ぢ安き我心、
つとおびえてぞすくまりぬ。
（こはなげかひの我魂の、
今宵寂しと闇の海に。
沈まん願ひ——我肉を、
のがれ出しにあらざるか——）

やらじ心の浮け歩み、
あな我魂にあらざりき。
眞白き鳥の只一羽、
鳴く音ひそめて物思ふ、

そと透し見したまゆらを
たよりなげなるたゞずまゐ
小さき悶えや何ならん。



若き惱み　廣島縣　今西鴨翼子

何とは知らず＝胸の海に、同じ姿の影一つ
今悲しびに「あ」と鳴きぬ——。
沖のいざり火一つ消え、あな寂しらの夜の海よ。

胸に暗い影がなければ、浮ばないやうな想像です、あなたは既に詩人たるべき素質を具へて居ることは、毎々本紙上の作物で分ります、その道の修養を怠らず、態度の輕浮を避けて進みさへすれば、一かどの作家となるでせう、挫折しないやうにお勵みなさい（醉茗）

四等

○出來心

土佐香美郡明治村　石川きよ子

それとしも、定めねど
人の一人の、歩みゐて
遇ふらんごとも、ふと思ひ
何となく、出來心。

厚薄の片よりし　樣もなう、唯ふはふはと
夜の大氣は、はてもなう　影を浮べて、よどみ流れぬ。
大きものあり。（水含み、霧を吹くごと）。樣にも
者を溶かせる、息吹すらん、膚ざはり、物うし。
何ものの、胸にひそみて　胸の想、かき亂す

銳き爪に、惡鳥は　ひきかきぬ、まざまざと。
心待ちせる、俤の、　人の一人は、逐にこず
それとしも、定めねど、　出來心ふと、つまづきぬ。

出來心、隱約の裡に彷彿す（酔茗）

五等

○蚯蚓の死

横濱市西戸部町一七八　室田野百合

如何なれば、あゝ身に知らぬ、罪うけて、
煩惱の、裸形の姿、宛らに、
醜の身を、世に隱るべき、籠居の、
芥食む穢土の運命と、呪はれし。

有りと聞く、光てふもの――（あゝ執や
業の魔の、刑の劍）――盲目の、
涙さへ出るに道なき、悶ゆれど
たゆけしや、と胸ぞ重き、狂へども。

嬉しきを歌ふ聲なく――（口惜しや
永久の詛の刑罰）――幾秋を、
寂寞の淋し夜すがら、嘆息の
忍泣き、眞闇の陰に、月も見て。

愼みの、年の長らへ、甲斐なくて、
眞夏日の、赤日照れる、地の下は、
焦熱の、火宅煉獄、じり〳〵と、
身に迫り、我も覺えぬ、苦患！

百轉び、藻掻き悶えて、這ひ出づる、
嗚呼運命！こは灼熱の、岩の上、
終の喘ぎ、喘ぎも敢えず、のけざまに、
生飯の肉、蟻に殘して、焦げ死にぬ。

醜の香の、黑き屍體ゆ、魂は、
あゝいづら、迷ひ出でけむ、かくはしも、
物皆は、滅亡に入るか、罪のわれ、
戰慄きて、流轉の姿、繪に見たり。

醜きものを捉えて詩化すると云ふこと、近時詩壇の一風潮で、此れも其一つに洩れません、技巧の工合は初心とも見えません、何處よりか此造詣は得たまひし（酔茗）

秀逸

○よべの夢

福岡市　澄水子

裾野の原に日は落ちて　そよぐ尾花の草道に
いづこよりとも思はれず　君と我とは出逢ひたり

君が瞳はくろかりき　　我が唇はかたかりき
空にわかるゝ白雲の　　浮雲のごと別れけり

一筋雲の浮ぶやうな、何氣なくて人をよろこばせる作（酔茗）

○笹舟

麹町　田原瑠璃

笹舟のひと廻りまたふた廻りして、
流れては物屑に觸れて止まりぬ、
淺瀨なる底石の大き小さき、
水の勢はさはまりてくぼにさばしり、
崩れてはまきかへる渦の波紋、
笹舟は風のまにひたと走りつ、
まきかへる水くぼにおちてはめぐり、
めぐりてはまた走り流れのまにまに、
いく度か沈まむかへらむけはひ、
小やすみのひまもなく流れて去りぬ。

纖細（酔茗）

○命の森

四谷　桃子

相逢そいみじ奇夢美しき、ふと倖を失ひて
明くる淋しき朝の戸や、空なる室にたゞひとり
靜かに醒めし我が魂は。——
彼方ほのかに朝霧の、匂かすめるたゆたひや
瑠璃鳥の音のほがらかに、夢かも淡き曉の
白き花咲く野を過ぎり、うつら見はてぬ幻の
人を慕ひて泉湧く、命の森に迷ひゆく。
夢にはぐれしわが魂は——
黃に開きたる沈默と、青く咲きたる寂寥の
小花の路を辿りつゝ、靜寂の森奧深く。
泉より湧く薫風は、茂れる森の樹々の葉の
裏かへすごと懷かしき、面影見する瞬間や。
青きが中にさゆらぎて、夢にうつらむ夏花の
奇しき匂に魂溶る、香ぐはし想ひ幻と
消えもや果つる悲愁に、頸冷たき白百合や
露美くしう下伏の、人の頰せまる靈の息。
命の森の朝露に、甦りたる我魂は
蘇醒心地靜寧に、森を出づればすがゞし
清き心の白蓮華、ひらく靈韻に水銹沼も
朝の波して光うまれぬ。

別に或る新しい詩の香に觸れたと云ふでもないが、首尾一貫して能く整ひ或る度まで作詩の技倆た心得たるもの（酔茗）

○雲

三重縣　長井漣月子

朝梨の樹の下かげに　清き空氣を吸ひし時
委脅うとき眞鶴の　翼の如き雲を見き
若草匂ふ綠野を　五百の山羊と步む時

灰色なせる大空に　巨人の如き雲を見き
濃紫の茄子實る　背戸の畑をめぐる時
櫻色なす大鋼の　鱗の如き雲を見き
夕べ濱邊にたゞずみて　消え行く白帆見たる時
いとも美はし七彩の　羽衣の如き雲を見き

比喩清新、愛すべき詩（醉茗）

○神の七石　小草子

太古のまゝに杉立ちて、　晝なほくらき神山の
七石こけにつゝまれて、　うらめしがほに横たはる。
百年むかし此山に、　十七八かうるはしき
男の子すみしを、七人の　里の少女はこひしけり。
あした夕をあらそひて、　少女の訪ふをうるさしと
彼のうるはしの少年は、　いづこともなくきえうせぬ
かくと知りたる七人の、　少女のなげきたゞならで
二日二夜をさがしゝが、　つひに姿は見あたらず。
たづねあぐみし少女等は、　戀しき山を下らじと
其まゝそこにうちふして、　雨と風とにさらされぬ。
かくていく年春秋を、　くちずくされず石と化り
七つならびてすはれるを、神の七石と人はいふ。

面白き神話、叙事詩材として最も佳、此作は可惜好い詩材を散文風にした爲め詩歌としての餘韻は乏しくなりましたけれど、七分の興味はあります（醉茗）

○雷電　伊豫　夕立雲

天かけるとゞろきの、　耳もとをつんざきて、
土壤深くわけ入りぬ、　目もあやに瞬間を。
み空とぶ蝙蝠も、　水底の魚族も、
明らけき電光の、　閃にあり〳〵と。
あとはまた烏羽玉の、　闇にして窓をうつ、
雨の音ほと〳〵と、　寂寞をやぶりつゝ。
忽ちに燃ゆる火の、　大柱輝きぬ、
仰ぐ目のきらめきて、　現なく地にふせば。
天地を動かして、　雷は轟きぬ、
地や裂けしかの響、　身も家も砕くかと。
風なきに樹は搖れて、　安らけき夢に入る、
百の鳥森蔭に、　物凄く鳴き叫ぶ。

あはれての麗はしく、
奇しき現象限りなく、
すさまじき天然の、
夏の夜をかゞるらむ。

雷の歌としては今まで見た多くの作よりも、力が籠つてゐるやうにおもひます（醉茗）

○夏野の歌

牛込 馬場不二子

今日し盛りのよそほひに、
梢さみどり美はしう
もゆるこかげに聳えては、
雄々し落葉松野に立てり。
今日しほこりと咲きいでゝ、
野花は小さき身の榮に
眞白、くれなゐ、八千綾の、
彩に牧場を飾りたり。
木かげすゞしき小草の上、
奇しき香にうたれては、
羊小さき「悟り」えて、
いつかも眠れ夢安う。
「無花果小枝やはらかう、
芽ぐむ頃しも夏來ぬ」と
崇きみ言を思ひてぞ、
夏は來にしか廣野邊に、
歌のしらべにきゝいりて、
眞晝の野邊に立ちつくす。
みつるや淸きさゝやきの
くまなき光明、胸に滿ぬる。

夏野のうたです（醉茗）

緑蔭



丹後 高橋豊子

○幽暗

土佐 大和田靜子

赫灼と眞夏の陽の、
あつ苦しき風ぞ吹くなる、
わずらひの胸の扉
灰色の礫にやけて
さながらの砂濱や
心の國の幽暗さに、
ひとり冥想の道にたちて
地心の冷えに怖れをいだき、
觀る瞳の空洞、
まじ物の巢くふと思ふ
眼ひらけど霧ひて闇の、
寂默につかれしか
ものゝ影みえわかず
まとひぬる衣は
徒らに冷えて重き

中心が無い爲に、漠として、詩與を惹きかれます、確に才筆たる事は認めます、必ず好い作を見せて下さるでせう（醉茗）

○戀幸

四谷 おつま

わが胸の湖に、
われはしもなつかしみ、
映りたるおもかげを
永劫に消えてあれと

あけくれに祈りては、　おのづからわがこゝろ
平和にいと靜に、　春の海のそれの如
懸幸にみち〳〵て、　浪風はたゝぬなり。

おちついた詩風（評者）

○聖子の恵

麻布　福谷以智子

我罪人の首なりしが、　君の功により神の子となりぬ
今は父なる御神よと、　恐れず仰ぎまつる
いづくが儘にみ誓成りて、　君の御姿にゐるぞうれしき
計りも得難き我救主の、　御恵み尊とし上なく尊とし
いでや傳へん世に偏ねく、　此よきおとづれを。

讃美歌の一つとしても宜しい（評者）

○くもり空

四谷　河野槇子

寂し日や――　世に罪の生れにし日か。
大空はふかき愁ひに、　しづむごと雲ひろごりぬ。
朝顔は蝶を待つにか、　晝すぎを萎みもあへず。
ひざの上の猫のいびきも、　ひやゝけき暗き國より
我をよぶこゑとこそきけ。
雷よそはおそろしくとも、　冷やかにねぶるが如き
大空のしゞまをやぶれ。
いなづまよ、そは凄くとも、　灰色の悲しみみてる
雲を裂け我胸晴れむ。
さびしさに堪へ兼て獨り、　胸抱く詩の小窓に
シャボン玉ふと舞つてきぬ。
七いろの彩美しき、　小さきは、我魂あはれ
黒蝶が羽風にもろく、　音もなうはと碎けたり。
あゝ寂し日や――　叫ばむに力なくして
こと問へどけふは憎うも、　答せぬ籠の鸚鵡よ。

即興の詩で、取まとめて批評するほどの作とも思ひませんが、詩語の工みにわざとならぬ才氣があるやうです（評者）

○鶴蘭の歌

麹町　淺井ゆき子

彌生を山のかげにして　はかなく消えし白雲や
暖風こゝにめぐり來て　再びもえしわか草の
なかに妙なる鶴らんや　鶴ともまがふ花開き
風につぶてをゆるがせて　香りぞ奇しく匂ふなる
春姫ひと日花こひて　賤き手にかざしては
鉢にもりたる土のうへ　あゝ美しき盆栽よ。

盆栽に盛らなかつたら、なほ自然で美しかつたでせう（評者）

○にはとり

紀伊　貞操賤女

羽ぶりの風に雨雲を、　呼ばふ力は持たずとも、
冠の色よ血に燃えて、　熱き焰をかたどれり。
羽色はいづれ神の手の、　深き技藝になりにけん、
輝く光りさながらに、　朝はなれゆく峰の雲。
潮に沈める白珠は、　かりに其眼の光りかも、

静かに歩む花の野に、
あゝ雛よいつの世に、
迷ふ夕雲、朝づく日、
纖雲いづる朝日子の、
薄るゝ光り夜の帷、
夢は秘すべき我世ならば、
など汝が聲の低くあらぬ、
さてこそ神のみさとしに、
汝が歌はしもなりにけむ。

初め頃の詩に接したるものは、其上手に驚くでせうけれど、此作踏襲の痕ありて、創意は多くありません（評者）

○夜　　麹町　とよ子

星も照らさず月もなき、
薬月の夜のさびしさよ、
わが足音をも恐れつゝ、
都はづれをさまよひぬ。

明日の望みも知らぬ身に、あまりかなしきこのさまや
聞くものとては森の端に、羽ぶりけうとき凶の鳥。
館の屋根の棟高く、尖れるのみは目に入れど、

曉の風のはれ〴〵し。
神の啓示をさとりけむ、
たゞ汝が歌にわかれゆく。
そこに希望の光りあり、
そこに夢あり安居あり。

夏の木かげ

はてしなきかな暗き空、ふりあふぎては胸痛む。

中田山崎　今泉桂花子

癖の無い作、其代り力も足りません（評者）



○魂の通ひ路　　岩代　根本松江

星一ツ高く飛び、怪鳥は魂呼ばふ
三更の夜半にして、
罪業の汚血に染まりし
魂洗ふ、冥府の温湯を、
尋ね得むと、——
闇眼にも青き肌の光や、
黒髪長ふ夜露に濡れて、
ひた走り——、
魄の通ひ路通り過ぎぬ。
遠鳴は、悲音に響き、
怪鳥は、嬉悦と啼きぬ。
膨らみし蓮の花は、
石の如き蕾に、化り
醜草に、咲きし黄の花、頻りに、狂ひ——
萬象は久遠の、靈香に、酔ひぬ。

少し妖怪談めきました（評者）

○日ぐるま　　小石川　海老澤　とく子

一

むし暑く氣もたゆたひぬ　南風たゞふきあれて
夢見顔ひとみ細やか　にじむあせかほごと手ごと
一坪の小さき庭に　おしろひやあさがほふして
みきふとき菊は折れけり　たけたかき日ぐるまのみは
しほれたれ小杖によりて　うそぶきぬ勇者とばかり

二

冬は逝きぬ悲鳴をあげて　散る花の行く方ながめて
つぶらなる露もつひとみ　足なへの母なき童子
片手には小杖をさゝへ　ぴよい／＼と飛つゝあゆむ
家の外は坂よ墓塲よ　他の子等の垣根づたひに
蝶とるとまろびつ起きつ　健にほてりの色を
石垣のほとりによりて　つぶらなる眼はかゞやきぬ
汝も共に遊びて見ずや　隣家のおうなは云ひぬ
青白き面をあげて　足なへのたのみの小杖
丁々と石にうちつけ　小杖しも半ば折られて
足本にはふりて去にぬ

三

幾月日雨にさらされ　良き材と花にむすびぬ
日ぐるまを今朝も見まひぬ　美しと見しほてりの中に
何となき惜しみ見えて　朝風はさゝと吹き來ぬ

意味のある作には相違ありませんが、作者が言はうと思つたことが能く表はれて居ません、技の足りないせいです、更に今二三篇の他の作を見たいものです（醉茗）

○暮れ行く里　　奈良縣　中富よしみ

垣根をめぐるいさゝ川　たゆみもあらず囁けど
穗きびの畑に少女子の　さゞめく聲はうち絕えて
秋の調を奏でぬる　小鳥の樂は消え果てぬ
暮の男神は天降して　見渡す四方の山や野を
いつしか染めぬ衆に。

今や眼に就かんとて　やはらぎ滿てる萬象の
しゞまを破る鐘の音よ　語る友なき山僧が
堪へぬ想ひのこもらずや　響と共にうすれ行く
野末にひくき彩雲の　淸きみ姿慕ひてか
招くぜや池の邊に。

鐘の響は消果てゝ　萬象は靜かに眠り行く
星はみ空に七ツ八ツ　灯は里に二ツ三ツ
靜かに暮るゝ天と地を　裝飾ひそめて森の端の
み空は紅の色濃く　今や出てんの月姬を
むこふる蟲の聲淋し。

○曙　　龜戸　鵜澤白菫

空紺青、　曉の星消えて、
醒めずや風、　滿野の露は深かし、
森の何處、　眠むさうな鳩の聲、
子を呼ぶ、　要をや慕ふ、
いざ去なん、　草籠は草に滿ちぬ、
眉おもし、　母へ土產の百合多ければ。

○花ふね　　福井縣　野田ちの子

女神は夏の夕ぐれを、　百合の花ふね漕ぎかへし、
湖心に文の黑綫の、　影をひたしつ歌ひたり。

男神はそゞろ驚角に、
物憂かる日の別とて、
夕べとなれば川瀨に、
怒によりては知らざりし、

○教會

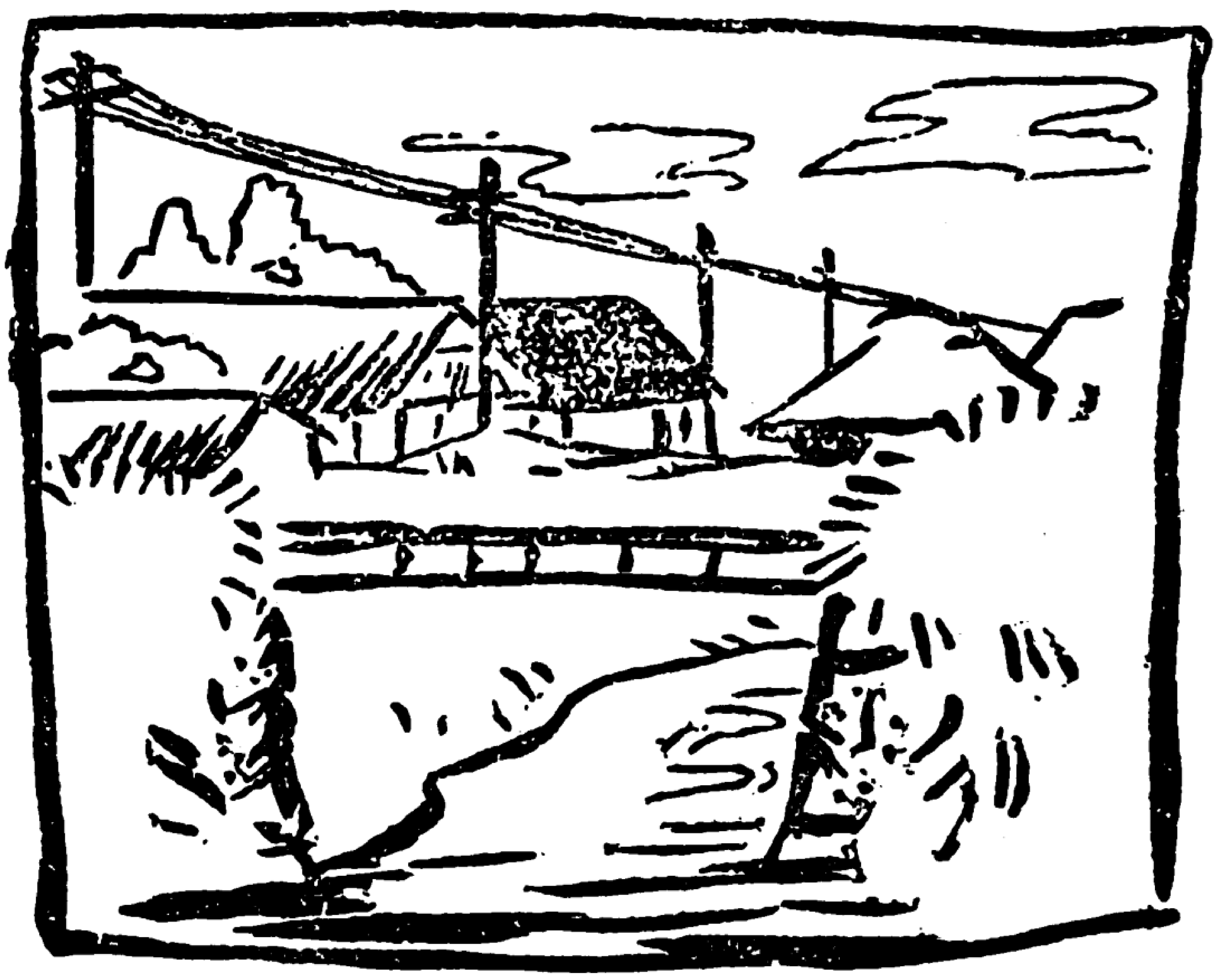
岩代　かすみ子

始めをつぐる鐘の音に
どよみの聲も靜まりて
會堂はたゞ寂として
神の御榮光あふぐとき
老いたる牧師は嚴かに
けふの祈りを捧げます
やがて發はし讃揚て、
ゆたけき笑を讃へつゝ
尊とき神のみこゝろを
いと懇ろに傳ひまし
「いざはらからよ皆共に
主の御教ひを讃へむ」と
讃美歌高く手にとりて
聖壇近く立ちませば
若き樂手はをりたちて
「神の惠み」を奏し出づ
やがても起る歌ごゑに
平和のひゞき堂にみち
かくて世のさが總怒り
身はたゞ安き御教ひの

黄金のさつ矢たばさめど、
歎きてけりなその歌を。
ほの白みつゝ迷へども、
遊人の歌われは聞く。

夏の小川　東京　とき子

會堂ゆらゝゆらめきて
感謝の聲はあふれたり
こゝには凡てたえはてゝ
天津御國にある心地して。



○百合の花

清水流るゝ川岸に
咲ける艷なる百合の花
尋常裝束に似たる哉

遠き艪の音よ面白き
かくれつ見えつ波間ゆく
袂はしとゞ汐にぬれて
萬象寂と音なくて

上野　雲雀女史

水の鏡に化粧して
例へば天の姫神の
川岸つたひヒラヽヽと
舞ひつゝ來たる蝶一羽
美くし姿を眺めては
ホヽ笑みながら花瓣に
甜き夢を結びつゝ
スーと清水の面をかすめ
涼しき風の吹き來たり
花は搖げどまだ蝶は
甜き夢を辿り居ぬ
日の暮るゝをも知らずして

○磯の夕

麹町　船津康子

潮の香り袖にみちて
心澄みゆく磯の夕
清き聲して歌うたふ
舟子は姻の美くしき
あゝ神秘なる磯の夕
藻の花白ふ波にゆれて
月の光りは海上の
金波銀波を碎くなる
舟歌微かとぎれヽヽ
漁舟の燈赤きかな
歸るは惜しも夜は更けぬ
一人つきせぬ君の歌

輝く、高く、美くしく
眠れる波の上を何處に。

○夏の夜の夢

讃岐　たけ子

紅點するかの蛇いちご
可憐と摘みとり接吻すれば、
熱にぞ觸れぬる蝦の如くに
怪しや、我が身は忽ち熔けつ。

その時我れが魂魄あゝ又陥ちて、
叢草繁れる樊籬暗う、
『いつ世にかへろ』となきつゝ居るに『悔ゆな』と錦の小蛇は來たり、
我をば刹那に美少年となして、
靑き火焔しつ、いとゞし相見
『あゝ吾よ、永遠こそこゝに契れ』と、その軀も直ちに麗なる少女、
願ふは、秘戀、花甦に獨へよ、
諸もて題せん『夏の夜の夢』。

○水蝶花

向島　ほたる草

朝の氣は白ら靑葉の間流れ、
芬しう漂ふ戀の香や。
春は何處と菜蕻の、
隙よりひらゝ舞ひ出でゝ、
いざや來ませと白蝶は。
菫たんぽゝ蓮花草、
我が被布模様其まゝに、
空にや續く野の末を、
螢か、あらず月宮殿。
蝶よ／＼とさまよへば、
花吹雪なす雲間より、
春の女神ぞ下りまして、
「おゝ！少女子よ少女子よ、
心のまゝに摘めや摘め。」
ふと庭の面を打見れば、
今我が賜びし彩玉か、
月見草より抜けいでゝ、
濃紅にほふ水蝶花。
そよ風も無くほろ／＼と、
地に落つる朝映の露。

○土龍

和歌山　前田かをり子

黃泉の坂晒れにし骸に、
見かわして默しゝ破り、
夕霜の置く光なし、
星の烟にさゝめき渡り、
地に這ひて夜來を食むと、
さすがにも情にもゆる、
眞白蘭の金星照る夜、
頰の色は紅蓮ぞ浮ぶ。
穩すゝきの茂りの小徑
脊光照れば膚も、
忍びげに往きつ返りつ
血のわきて流るゝ熱り、
小走りの妹脊の土龍、
黑瑠璃の胸乳を抱き、
裝束の黑ににほへる、
雙肩は歡喜にふるふ。
妻がために粧をこらすと、
天に振る珠玉の小笹の、
膝に攀ち肩に爪立ち、
さや鳴りに霧輝けば、
咬へこし紅點しながら、
初戀の羞に惑ひて、
口つけてときめき移し、
隱れたる小土龍小女。

○蟬

京都市　島田千代

甘露の雫を吸ひて、
いぶかしや身は忽と化し。
綾羅の如き彩羽のべ、
胸笛のひゞき嘵嘵と。
眞夏日の夕陽浴びて、
茂れる森に反響しぬ。
地の龜裂るゝ日の暑さ、
煩悶くるしみ、涼風の——
靑葉かげしばし慰らふ、
うつ蟬の世をかこつ。
詩人の心そゞろに、
汝が妙なる笛の音は。
天つ御國にい行きして、
天樂を聞つるこゝち。

○秋草

靜岡縣　加藤だい

秋の靜か夜月姫が、
黃金の光野に榮えて、
其處に數ある野の花の、
うたげ開けりたのしげに、
露の眞珠に紅の、
片頰つゝめる小萩姫、
星の精なる紫の、
みけしも匂ふ桔梗姫、
琥珀の冠打ちゆする、
女郞花姫菊姫が、
秘めにし香の瓶の月に、
醉ひて亂るゝしろがねの、
枯髮たゆけき尾花姫、
虫の童の樂ふけて、
秋の長夜を野に響く。

短篇小說

廣津柳浪先生選評

一等　○魂祭

神田區表神保町十番地三浦幸太郎方　三浦升野

今迄、暗かつた軒が、はつと輝くなつた。

「やあ正ちやんの、處でも焚いてらあ、行つて見樣」と二三人の男の子が馳け出して來る。

切髪の品の良い老母、白い額には、苦勞の線が、幾線か刻まれ、凹んだ目には、露が宿つて居る。

「正雄や、御念佛を申すのですよ」と傍に居る四ッ五ッ位の男の子を顧る。

火は、炎々と燃えて、吹き込む風に黑い烟が奥の方へ舞ふて行く。

「正ちやん處では、いゝねえ、御迎火焚くから、内じやあ焚かないんだよ、誰れも死なゝいから」と外に立つた、子供の一人が羨まし想に云ふ。

「然かい、内やあ父樣も母樣も死んだんだよ、其れだから御迎火焚くの」と得意氣に、小さな肩を張つて友の顏を見て莞爾。

「おゝ」俯むいた老母は、慄へた聲を發げた。消え掛つた火の上に涙は散つて「ちゆう」と音を發てゝ處々消える。

「祖母樣、父樣も母樣も來ないぢやあ無いか、此れから來るの、え、祖母樣」

「もう、來たのですよ、今の烟の中に入つて、佛樣の内へ御入りになつたのだよ」

「然う、ぢやあ見て來よう」と嬉し想に、奥へ飛び込む、老母は、孫を見る、力もなく、消え殘つた灰を重さうに、隅の方へ押しやつて、じつと瞶めて呼吸も仕ない。

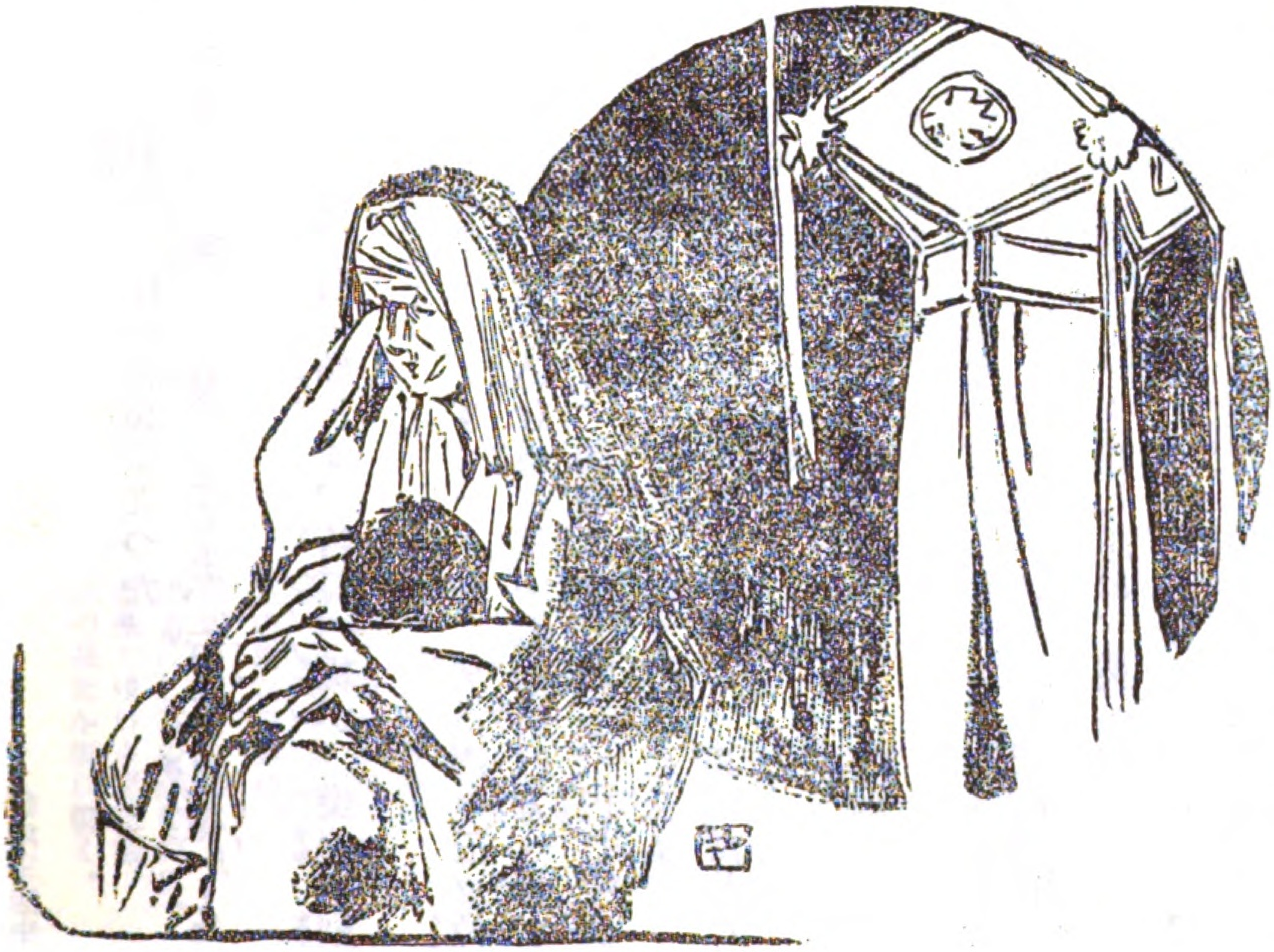
「父樣も母樣も居ないよ」と正雄が奥から、大聲る、はつと我に返つた、老母は、立ち上てかまちへ手を掛けて、ふら／＼と仕ながら上へ上つた。

「誰れも居ないよ」正雄が傍へ寄つて來て、可愛い顔を傾げる。

「お丶左様かい」と細い聲で云つて、つと佛間へ入つた、線香の、香は鼻を衝いて、先づ目に付くのは、朝夕の涙の種となる、忰夫婦の位牌、とんと膝を突いて坐る、嫁が、白い手に細工した、鈴敷も、今は片身と成つて、美くしいと、思つた緋縮緬も、嫁が吐いた血の如に思はれて、身を慄はして、よ丶と泣いた。

「母様戴いて種まいた、朝顔段々伸びて來たー」と幼稚園で習つた唱歌を廻らぬ舌で唱ひながら入つて來て。

「お祖母様如何したの、御腹が痛いの、え、お祖母、叩いて進げやうか、然して全快つたら、彼のお菓子頂戴な」と



一寸佛壇の方を見て、笑ひながら、後ろへ廻つて、小さな拳を、固めて帯の上を叩き初める。

「正雄や！」くるりと顧むいて、正雄を引取る如に、抱きしめた。

「痛いよう」とわつと泣き出す。

「お丶不憫想に忍耐して、おくれ……」と二ッ三ッ背を輕く叩く中に、晝の勞れて、すやすやと眠る。

「嗚呼罪の無い……私が死んだら誰れが育てるか」と思ふと熱い涙が又はら〳〵と頰を傳つて、正雄の頰に落ちる。燈明の油が、盡きてはち〳〵と音を發て丶、消えかゝる。

老母は、すつくり顔を上げた、凄い程光りを以つた目に、じつと燈火を瞶めて、わ

なわなと慄へる手に、力を込めて、合掌した。

如何なる力あつて此小說が讀者を動かすかと言ふに、眞情、心の底から出たかなしみが筆の間にほのめいて居るからで、別に書いてある事は悲慘極まる事柄でもない、只あり來りの魂祭の夜のさま、某と祖母の態度の眞を寸分の隙間なく襲取し得た此作者の頴才は豈し一寸得易からぬものであらう（選者評）

【三等】

○油障子

豐後國大分町字上野河野甚平方　黑百合子

午後四時頃、眞夏の光に包まれて、萬有は悉く熱を吐き出して居る、けれども少し降つた日輪は金色の光線を前の杉の木立に辷らして、餘光は妾の家の勝手の入口に懸けた白布の日除に當つて、油障子の破を透して、黒く光澤しい臺所の敷板に流れて居るのです。日除の下を潜つて來る風を、臺所と茶間の中障子を開け放して、妾は其處で裁縫をして居る、霎時すると裏木戸が開く音がして重たい草履の音が段々近寄つて間もなく、日除がすつと上つて黑い影が現れました。

下女のお新が畑から歸つたのだろう、未だ俯向ひて針を搬ばして居ました。

「御免下さい」

吃驚して振り向くと、赤紐の長く下つた笠を持つて、無地の窄袖に絣の前垂を卸しながら、丁寧に腰を屈めて恥羞さうに敷居の鐵線の所に、小形の女が立つて居ました。新家の三重さんだろうか……と思つて、

「はい誰方樣……」と云ひ切らないに「あらッ芳子さん、妾ですよ」吃驚しました、あゝ可懷い聲不覺裁縫を押しやつて、板間に迎え出まして「君子さんてしたか、免して下さいよ」と上へあげやうとしたのを、君子さんは靜に支へて、

「此麽にむさ苦しい姿をして居るのですから」と手を握り返へした、妾は未だ夢中です。

「君子さん、全く御見反れしてね、何とも申分けが御座いません、免して下さいよ」妾も手を堅く握つて接吻けたのです。

「妾も全然此麽田舍者に成つて仕舞ましたからね、人樣が御違ひなさるも無理は御座ませんよ、ホヽヽ」淋しく微笑みましたが、靑白い顋の邊に仄かに寂寥と歡喜との影が閃いて居ます。

此處に立つては話が出來ないから、此方に御上りと云へば、不潔いから、今日は上らないと、怎うしても上らないで框に腰を掛けて話し出した。

「全く御久し振りね、今御宅の畑の前を通過ると、お

新さんが御手を採つて被在るから、芳子さんは未だ御歸宅にならないの、と聞きましたの、すると最早昨日御歸になつて貴女をお尋ねなさるつて被仰つて居なすつたが、今日は相憎皆様が新宅に御他行になつたから單獨て御留守居して被在いますと、云ひましたから、可懷しくつて到々姿も構はず飛んで來て失禮しましたの」ともう、打ち解けて可懷さに擦り寄つて話して居るのです。

「本當によく來て下すつたのね、昨日も御宅に參堂うとしましたが、到々參堂れずに仕舞ましたのよ、今日も一人法師で貴女の事を思つて居ましたが、全く貴女が被在るとは思ひませんでしたからね、今晩でも皆が歸つてから參堂らうかと思つて居ましたの、御免なさいと被仰つた時は、新宅から誰か來たのだらうと、思つて、全然氣が付かなかつたのよ、眞實に姿が違つて居るから、一寸見ても分らなかつたわ、昔の君子さんのスタイルとは怎うしても見えませんもの」君子さんは家根廂が黑々と日除に影を落して居るのを眺めて被在る。

「田舍に在れば姿處でないから、直に婆さんに成つて仕舞うので誰からも彼からも、見離されて仕舞うのに、妾を思つてゝ下さるなんて、眞實に有難いのね」

「有難い事なんか有りやしないけれどもね、妾は何時も、君子さんの事は胸から離れませんのよ、先刻彼麼に惚けて御見反れした時、妾はなんて薄情な女だらうつて、貴女から思はれはしまいかと悲しくつて悲しくつてね、胸充滿でしたよ」

と顏を覗ひました、後髮のハラ〱亂る襟首、昔の華かな處女時代の面影に髣髴りです。

「勿躰ない、怎して其麼事が思はれましよう、貴女から毎時も御恩になつて居て、反つて妾が恨まれるが當然ですよ、御手紙は毎度戴いてよ、御返事は毎時も御無沙汰勝でね、田舍者だと勘忍して下さいよ」

「構ひませんよ、妾達は、何時迄も〱誓つた姉妹ですもの、怎して恨むものですか、最其麼事は止しましようね、恨も猜疑もあるものですか」

「えゝ、姉妹ですものね」力の籠つた聲に、紅の春の潮は花顏に漲りて瞳は華かな光に動いて居るのです。

あゝ、疑ひもなく昔の君子さんです。

* * * * * * *

木戸口から、夫を心配して、笠を手に急いで歸り行く君子さんの後影が、桑畑に見えつ隱れつ、村の垣根に

隠るゝ迄見詰めて居ました。

會話が如何にも其人を活かしてゐて、とりとめもない事を話し合つてゐる間に兩個の眞情が迸ふと云ふ事は、人情のつれて、此篇の主眼は其處にある、作者自ら、前く期して書いたのではなからうけれど、其々强に其れとなつた（選者評）

四等 〇石女

土佐國吾川郡弘岡上　深瀬ます子

静子は今の宅へ嫁入てはや六年になる、けれどもどうしたのか未だに子といふ物が無い、氣の置ける姑もなく、鬼千匹と世にいふ小姑もない、お人よしの旦那様は、静子静子と御側はなさず勞つて下さる幸の身、着物を拵へて、お琴を彈いて、お料理のお稽古をして、面白おかしく暮すにはこの上もなく、皆人に浦山しがられる、けれども其身に成てはなか〳〵うれしとは思へぬ、人は滿足よりは不滿の方をより大きく感ずるもので、七つの米藏よりはたつた一人の子がほしい。もしやもしやと今日迄もたのみにして來たけれども、どうしても静子には子が無いらしい、子のなきに何を己が榮華かなと誰やらがいつた樣に、もはや榮華には厭きはてゝ居るのである、昔ては自分の友達が早く小供をかき抱いて世帯に窶れて居るのを見て、窃に自分の身を誇つて居た。ほんに子供の出來た爲に夫婦の愛情の幾分を割かれてしまう、子といふものは慾しくない、願ふはどうか少しても遲く子供が出來てほしいと、静子は思つて居たが、それが何時といふ事はなく、元蔑視み哀んだ友達の身が羨しく成てより、日を經るに從て其の思は募り募り今は矢も楯もたまらぬ、夫も同じ心で、諸々方々の神々の祈禱、呪禁、契約あらんかぎりの事を仕盡した。まう〳〵子供が無くては長閑な春の日も家の中が秋の夕の樣で夫婦の對向がどうも淋しさに堪へられぬ、その樣なわけて静子の膝の上にはいつも可愛子猫がゐる、時々浴をさしてあるから玉の樣に美しく緋縮緬の頸玉をしてある、其上静子は色々の物を養ふのが

高瀬川のスケッチ　京都　野村案山子



好て、一節犬の子兎の子なども手づから養つて居た、何時か鷄の親が死だ時などは小い〳〵雛鳥を、綿に包んで、肌に入れて、育て上た事も有た、よく夫婦連て勸業場などへ行く時は、何時も小い人形を買て來る、そしてそれ〳〵の衣裳を拵へて、お床の上に並べて、皆梅子だとか、何だとかといふ名が付て居る、この樣にして、子といふ物に對する愛情を猫や人形に注いてせめて慰んで居る、或時靜子は洗湯へ行た事が有た、小判形の桶にまだ小い子供が仰樣に寐かされて、小い手をしやぶつて居るのがひどく目に付た、その樣に小供よりほかに何も目につかぬ樣に成たので、もとより近所の子供をばよく可愛がるので、いつも小い小供づれが遊びに來る、中で一番のお氣に入が太郎といふすぐ隣のである。

靜子は裁縫をして居る、庭の木戸を誰かあけて居る樣子、やがて椽側へ來て障子の外から、

「おーばーちやん」

といふ

「おばちやんは居ませんよ」といへばまた「おーばちやん」といふから今度は

「どーなした」

と聞けば

「太郎ちやんてつよ」

といふ

「私何所の兄樣かと思つてよ、早くお上んなさい」といつて障子をあけて縫さしの衣を片よせて、ゐずまゐを直せば、太郎は靜子の前へチヨコナンと坐る、紺絣へ白の前掛をしてくり〳〵とした目をして居る、靜子はこゝへお上りなさいといつて、自分の膝をたゝいて見せると、遠慮なく上る、そして、もし〳〵龜よ龜ちやんよ、と歌ひだす、やがて靜子は太郎の顏を見て一寸小い指を一本取て太郎の鼻にすりつけて、

「これどなた」といふ

「太郎ちやん」「あらよく御存じねえ」といつて今度は自分の鼻をさゝせて、

「これどなた」

「おーばーちやん」

「いやよ、ちやーちやん、といふのですよ、おばーちやんといふならこのお手々食べつちまいます、さあちやーちやんといつて頂戴」

「おばーちやん」といつて太郎はしやくり上て笑ふ。

「どれお手々食べつちまう〳〵」といへばなほ〳〵

笑ふ。やがて靜子は片手で側の菓子鉢から鶯餅を取て紙に乘せて、

「さあちやーちやんといはなきやあげない事よ」

靜子はまだ今年二十六であるが、何とはなしに日一日と暗い穴へでも這入て行く樣な氣がして、いつかほゝ笑といふ事も忘れてしまつて、身は次第に瘦せ衰へて行く、そんなにも子供はほしい物かしら、あゝ遂に靜子には子供はないのであらうか。

子を欲しがる女の情致、委曲盡くせり、怜悧な人が愚痴になり、迷信になり、たわいなくなる處、斯くもあらうか、其境に在らぬ者から見ると、奇怪に思はれる位であるが、之れ却つて實際であらう。（選者評）

五等　○姿と心

東京市四谷區坂町九ノ十五　吉田以爾子

花も葉も梢を去て物寂れた今日を、肋膜を病む賢次の胸は、厚き情をよせる秋子のために怪しく寂くのである。

「時にね秋樣、母樣は秋樣が此處へ見舞に來るのは好まないのだらう、僕は如何しても然う思はれて仕方がないんだ。いくら許してやるといつても家の用が缺ければよく思はないからね、若し秋樣にこうして來て貰へなくなると僕の病氣は決して治らないんだが……」

「マア賢樣は何故其んな事ばかりおつしやるの、決して其んな事はございませんから」

「そうかね、其れなら嬉しいが……しかし母樣は秋樣程僕を可愛がつてくれないのだから……全體僕の方が人に好かれない人間に出來て居るんだ。第一人並外れた此の醜い顏を提げて、よくも美しい秋樣の前に出られたものだと自ら怪しむね、殊に此頃の病で如何になつたらうと思ふと實に自身が嫌になつて來る、誰だつてお化見たいな顏は不快を感ずるからね、學校の方なら三番を落ちた例はないが……。そんな事いつて力んだつて此のご面相ぢや……」力なげに夜着の中に深く身を入れて天井を見つめて居る。

「お止しなさいまし な、天の與へた身體を如何のこうのといつても仕方のない事。賢樣あなたは姿の美を慕ふ人と心の美を愛する人と何方がお好」「無論顏の美に心を引かれる人は永く續かないさ」「其れ程ご承知なら女々しく美の醜のとおつしやいますな」賢次は固く眼を閉ぢ双手で額を抑へたが其の手はいたく振へて居た。秋子は少し言ひ過ぎたと思つて心配氣に見えた

「賢樣餘り話して障りましたか。まだ時間がありますから少々摩りませう」賢次は答へなかつた。秋子は靜かに夜着の襟を除けて摩らうと胸の邊に手の觸れた時、痩せた賢次の手は確と秋子の手を握つて己が胸にひしと當てた。「アッ」秋子は叫んだ。

「驚いたかい秋樣、許しておくれ、暫く胸を摩つてくれないか、せめて僕の……」靜に手を離した。眞紅になつた秋子は無言のまゝうなづいて打ち振ふ手は柔く賢次の心臟の邊に逍遙し初めたが、全身を搖る樣な鼓動に驚いてまだ消えやらぬ紅の面に憂の色を堪えて

「賢樣てんなに烈しうございますのよ、苦しくはありませんかマア如何したのでせう」開いた賢次の眼には露があつた「秋樣知らないのかい……何故だかよく考へておくれ……僕は。噫秋樣の胸に開いて見てご覽」

賢次の醜い面は痩せた二つの手で掩はれた。白き秋子の胸の上に止つた。烈しい心臟の鼓動は熱血を迸らして秋子の身を包むであらう、左なくば置かれた胸の手から傳はつて秋子の心臟に灑ぐであらう。

秋子の優しい同情に對する賢次の感謝は、やがて己が醜い容貌を打ち忘れて戀するに至つた。秋子は又賢次の性質を愛したので、美しい秋子と醜い賢次との交は清く且つ密であつた。誰知る人もなき此の光に浴して賢次は癒えた、そして卒業の華咲かせんと勉强に怠なかつた。

賢次の激した心中も、秋子の同情もそれ〴〵表はれてゐるが、何れかと言へば、賢次の熱情に對して、秋子の理性は稍冷かに見える、作者も其つもりて書いたのであらう（選者評）

秀逸

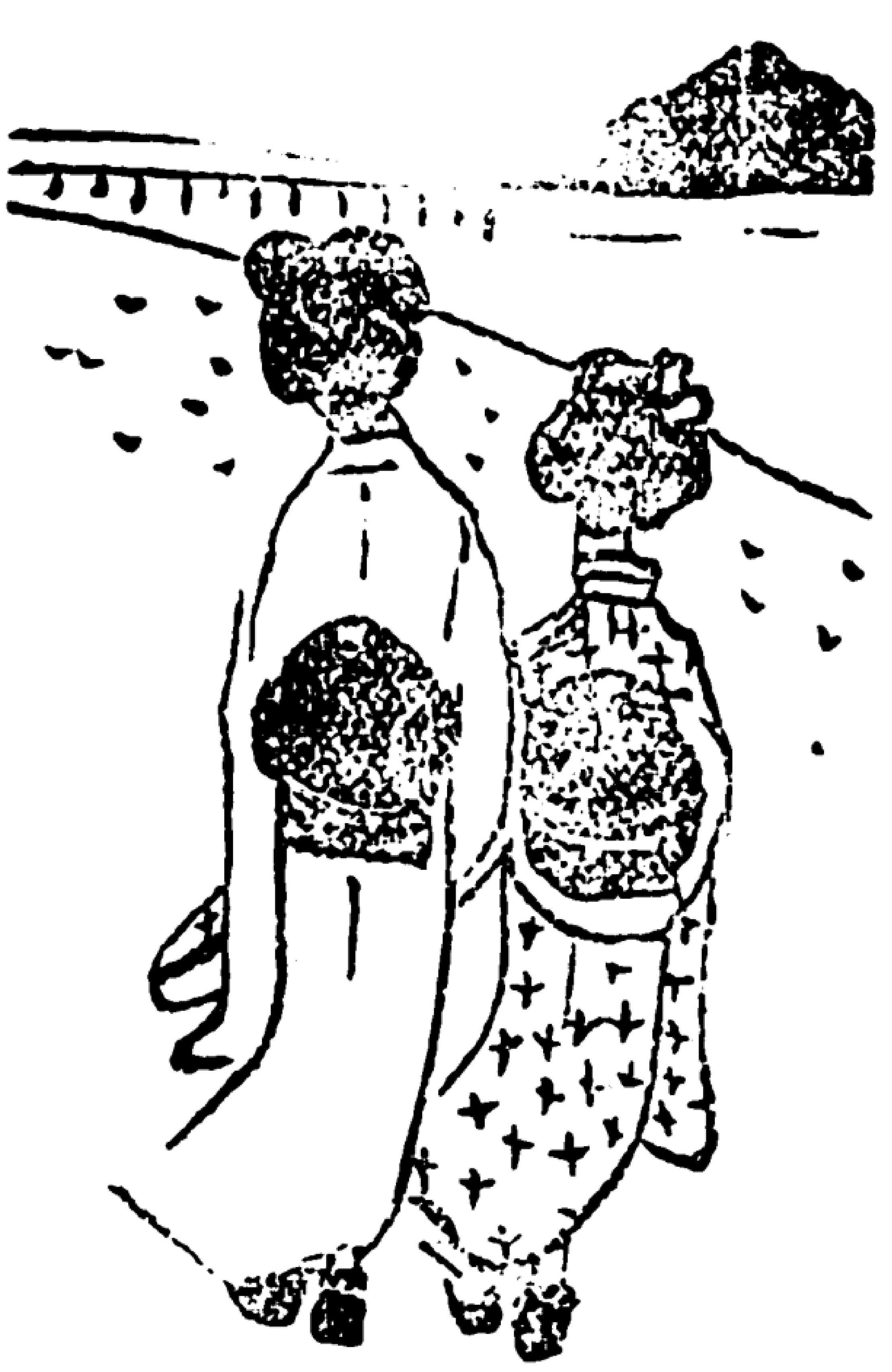
○芝生

丹波　難波愛の

春の日影は、柔かい芝生の上に、梢の影短う引いた眞晝頃、男の兒童が二三人其櫻樹の下に集つて無邪氣に遊んで居る。直ぐ、三四丁彼方に板廂低う附けた藁家の門前を、大聲に軍歌謠うて歩いて來る男兒が漸々皆の側まで來たとき、「正あちやん、お呉れだつたかい」と待ち兼たらしい聲がした。「いゝや」と、正司は、けろり樣子を變て、鼻聲を出し乍ら、皆の内へ割つて這入つて、腹這いになると、先に呼んだ清夫が「え、なぜ……どうして」と、頭だけを擡げて右を向。と丸い瞳と瞳がばつたり合つた。正司は、下頰をふくらませて「まだ赤くならないからつて……」「そう」とは云つたが、清夫が何か解せぬ顏をして居るので、「清ちやん、

をかしい顔をしてるじやないか」と左隣の富三が前へ乗り出して尋ねると、「あゝ」と輕く首肯いて、「ても不審じやないか、僕ん宅の苺は、最早皆々熟してるのに」「そりやね、清ちやん宅のは、温室で作つたるからさ」年層なだけに、事も無げに云ふ、富三の左から、「むろ？」と、口早く聞きとがめた松次といふ、顔の淺黒い子が「むろなら、内にだつてあるよ。苺なんかは作つてないけど」「そりや、温室じやないよ。温室つたら、種々な、木を植る所だもの」「そうだとも〳〵それに松ちやんはおかしいなあ」富三はじめ三人が聲を揃へると、「だつても〳〵……」と松三は幾度もどもつて、「だけど宅の人は皆むろだつて云つてるんだもの」「それじや温暖かい」「いゝえ冷たいの。何時でも叔父さんをいれて置くとこ」無心に云ひ放して、「やあ、富ちやんの帯に散花が止つた、これご覧……さくら散れ〳〵うす紅いろの……春野の雪をばふみ分けて」と直可愛く謡ひ出すと、皆も一時に聲はり上げて、同じく、謡う軍ごつこ

夕涼み　香高楠枝



……しばらくして、その一段が済むと「ね松ちやん」云つたのは富三て「叔父さんを、何故むろなんかゑ入れて置くの」問ひかけた。松次は、却つておかしな事を問う物だといふ顔付て目を圓にして、「そりや、叔父さんは、氣が狂つてるんだもの」入れなくつてさとまて云ひたげに猶脣をもぐ〳〵させて居る。すると勝氣な正司が「いくら、何だつても、大人しくしてゐるのに閉ぢ込めるたあ酷いや」と、云ふ尾について「本統にな、松ちやんとこは彼麼事して叔父さんを苛めるから餘計に氣が狂うんだよ」と清夫も一所になつて迫る「だつても、僕が知つた事じやないのだもの」と、松次が打つて變つて憐れつぽい音を吹くと「そりやさうだろうけれどさ」と富三は父の口吻を眞似て「いくら父さん達が入れたつても、君が出して上げりや良いじやないか。君がした事なら父さんだつて憤る筈がないから」「さうとも僕だつて、度々父さんにお庫へ入れられた事はあるけどいつても、母さんが直ぐに出して呉れる

よ、けれど父さんは、一寸も何とも云ないよ」と正司は自分の經驗談迄持ち出すと、松次は悲しさうに「そりや、正ちやんは、さうか知らないが、僕の父さんなんかそんなじやないんだもの。いつかも母さんと二人で叔父さんを、縛つたから、其後でそつと、ほどいて上げたんだ。そしたら父さんが……」いひ掛けるのを、急性の清夫が「ご褒美を呉れたかえ」と、俯向いた顏を覗き込む。松次は、うるみ聲で「父さんが不可ないんだもの。彼麽好い叔父さんを」「ほんとに、叔父さんは好いなあ。いつても僕さへ見ると、お菓子をくれるよ」と正司は莞爾する「僕だつて、度々貰らよ」「僕あお菓子は入らないがいつても繪本を下さるよ」と清夫も富三も同じ樣に喜ぶと、松次は、滿足さうに微笑んで「それに、叱るんだもの父さんが分らないや。母さんだつても……」「では、叔母さんは何してるの」正司が不審さうに云うと「叔母さんなんか有やしないよ」と、富三が、たんぽゝの笛を作り乍ら含み聲を出す「さう、なぜないんだろう」「お嫁さんを貰はないからさ」と今度は清夫が櫻の花辨を集め乍ら顏を上げる、「ではなぜ貰はないの」「其麽事は知らないや。正ちやんはよつぽど根堀り葉堀り……」との富三の言葉を皆まで聞さず「内の母さんがね、正ちやんの樣に、よく何でも尋ねると、菜種から油に成るまで問うつて五月蠅がるよ」すると、松次は、例の大聲で「菜種咲きたる堤は君よ。僕らは蕾の桃の影　一軍ごつこの歌が亦始まつた。其間を櫻がたえずはら〳〵と。

三人の子のおもひ〳〵の生ひ立ちが分る、話しぶりに見える、叔父さんなる人の身の上より、此子等の身の上を想像せしめる、おとなしやかなる、生意氣なる、無邪氣なる、櫻ひら〳〵とこぼるゝ下に此子等の行末を想ふも興が多い（選者評）

○親の身

下谷　橋本波子

「敵公、來やがるな」
「親無し野郎」
「貴樣は親が無から仲間外れだ」

各自に叫んで、溝板荒く踏み鳴らして、入つて來た。

此れでも東京の一部分かと思はれる、きたない〳〵拔露路、此所彼所に塵芥の固りや猫の死んだのが其儘置かれてある、これが土地の濕氣で腐敗して、黴菌ばかりが飛んで居さう。又仰向けば、軒下にも、廂の上にも、白いのは六尺程の木綿、紐のついた格子縞等が遠慮もなく乾してある。

右側の棟割長屋の三軒目、臺所の障子開け放して、折

しもお杉は茶碗を洗つて居る。
親なし――の聲が耳に入つたので、お杉は手を止めて、險のある双眸をあげた。
腕白盛りの小兒三人、後から萎れて從いて來る、小供を振り向いては、
「うわえ――馬鹿野郎」
哄と鬨を揚げて罵る。
お杉の双眸には暗涙が浮かんだ。
首はがつくりと下へ垂れる。
「あゝ可哀相に――彼子は敬ちやん、親がなければ彼樣も苛められるものか、可哀相に、病氣で亡つた人の子さへ彼樣にするんだもの、まして〳〵……私の……。」
涙の双眸は双其子の上に走つた。
三人は四五間行き過ぎて、立ち止つて後を向き、横柄な顔付、手を振つて、
「敬公、何故此の露路を通るんだ、手前の通る路は此處おやねえ、こゝは親のあるものが通る道だ」
丁度敬公は、臺所の前に來て、情なさゝうに、立止つて居る。

足尾銅山坑夫　居尾　倉澤佐以子



「やい後へ戻れ」
敬公は默つて萎れて立つて居る。
「歸れつたら畜生」
愈々猛つて一人はつか〳〵と敬公の傍へ來た。
「おい來な」
後を向いて二人を呼ぶ。
「遣つ付けちまへ」
「遣つけちまへ」
罵りながら馳け寄つた。
「やい地面へ手を着いてあやまれば通してやらう」
「さうだ、あやまれ……あやまれ」
相槌を打て、息捲く。
「通しておくれな……え」
半ば泣聲で　敬公は始めて口をきいた。
「そんなら何故謝らねえ」
「地面へ手を付け」「サアしねえか」
三人は愈々圖に乘つて奴鳴る。

敬公は何とも云はぬ、只涙を頬に傳はらせて居る。
「あやまらねえか」
一人は突然頬を打つた。彼はよろ〳〵とよろけた。
「やつつけろ」「遣つちまへ」
小さい腕は敬公の身躰に集つた、擲る、打つ。敬公は敵はない迄もと拳を固めて、低抗した。
「生意氣な」「間抜め」
低抗された反動に益々猛つて、亂打する。
突飛されたか、敬公は地面に倒れた。
「畜生」「畜生！」
三人は交り〳〵に蹴る。
「御免よ、御免よ」
敬公は泣聲たて〻謝つて居る。
お杉には其泣聲が針となつて、吾胸を刺すかのやう。堪へ兼ねて、堪へ兼ねて、眼をつぶつて袂を噛んだ。
「あ〻これを見ても、彼子は今どうしてるか……」
堰き來る涙を止め兼ねて、
「私は何と云ふ因果だらう、あの阿父さんのために……彼の子を彼樣な所へ遣つて了つて……會つても顔を反向けねばならない、敬ちやんのやうに苛められはすまいか、嘸私を恨んでるだらう、あ〻一層死んぢまいたい。」
涙ははら〳〵と流れて來る。
三人の子供は今、凱歌を上げて馳けて行つた。
空はどんよりと曇つて來て雨に成りさうである。
お杉は、泥まみれになつて、泣きながら歩行て行く敬公の見すぼらしい後姿を、凝乎と、涙の眼で見送つた。

父なし子を苛めると云ふ趣向は隨分見たし、今更珍しく思はない、よそながら同情して我子の上を想ひやるお杉を描いて、多少の色彩を添えた譯てあらうが未だ趣向として嘆服する程でもない、只餓鬼大將や貧民窟の樣子が好く表はれて居る（選者評）

○柚子の木

麹町　山下里子

私は今日故里の伯父の家に參りました。
夕暮になると、赤き青き紫の星が美しう並びます、壺の間のそゞろ歩きに、それを仰ぎ乍ら夕せまりゆく薄暗の中、晝の暑さにめげた心が更び甦つて、輝かなる光にあふかの心地、蓊鬱たる柚子の木の下からの歌聲をきゝました。
聲の主は知れませんが身を刺すやうな悲痛の歌、しかもはつきりと透き通る若い男の聲でした、それが如何にも哀れに節を附けて歌はれるので、例へば太古の山

中に失意の神の咒咀を聞くかとばかり、悲しくなります。涼風が颯と頸をなでゝ吹き渡つたので、團扇の手を休めると、又しても歌の調べ思はず眼を上る。

水の上飛ぶかげろうの――、

ぼんやり首を傾げると、

「御嬢様何して御出なさいますの」加代が私の肩をゆすつた。

「何！　いやよ加代は私びつくりしてよ」

「だつて御嬢様は一生懸命で考へて御出てすから、一寸言葉を掛けましたの、御氣に障りましたら御免遊ばせ」

「私怒つてやしないけれど、びつくりしたの、御前あの柚子の木の下で歌つて被居る御方、知つて居るの」

「知つて居りますとも、御隣の息子さんてす」

「毎日あんなに歌つていらつしやるの」

「人の話に此頃川越に新躰詩の朗吟とかの會が開かれるさうて其處へ、御出席なさるのに一生懸命で習つて御出のさうて御座います」

まあ大變大きく　萩市　小園敏子



やがて又耳をすますと

野守の鏡面さびて　形を落す雲もなし
歸ぬ人の一人にのみ　神は戀るをゆるせども――

聞えぬやうになつてつひにやんで了ひました。

あゝ其聲！忘れる事の出來ぬ其調子、只其人が無心て歌つて被居るのか、否彼の人が自分の心の苦悶より逃れる爲に、せめての心やりにあゝやつて歌ふのてはあるまいか――何にも知らない私てさへ知らず淚流るゝものを、歌つてる本人はまア如何てせう。神代の儘の故里の質朴な人情に浴してゐる人の中にも猶かく好んて、悲調になづさふ人があると、心の飢のあるのを覺えて其夜私は、就寢前に柚子の木の下に忍よりました。そしてかの悲しむ人に幸あれよ慰よと心ゆくばかり祈を致しました。柚子の木は之れがために永い〳〵紀念となりました。

何か意味を見出さうとして居るらしいが、これだけては餘り意味がない、悲觀すると云つても獨相撲の氣味があつて、對手を今少し小說中の人物としたい、或は此れだけの短篇には無理の注文かも知れない、書きぶりの清新な處は他に一頭地を抜く（選者評）

和歌

佐々木信綱先生選評

三等

花賣は昔めく笠くれなゐの紐して結ひぬ少女子なれば

若松　丹羽千代子

四等

さすらひのたそがれ悲し野の鐘は母います空に響くかと思ふ

美濃國關町愛鄕舍內　傍島敏子

五等

百合あまた大野に咲ける樣にして白き雲とぶ八月の朝

下野國足利郡三重村五十部　鈴木雪子

秀逸

◎ 豐前　神崎松代子

わがつきし鐘の響は夕暮の湖をながれて君すむ島へ

◎ 上總　紅雨女史

天の宮星の一つと身はあれどなほ涙しぬ少女子なれば

◎ 和歌山　すみ子

いたづきのみ足さすりて母君と芙蓉に夜半の雨をきくかな

◎ 常陸　酒葉花舟女

南の軒にかけたる鳥籠に小鳥來て鳴く山の晝かな

◎ 本所　田中久子

小つゞみに銀燭ゆらぎまろうどは酒のほてりに美き頰してゐぬ

◎ 下總　ゑい子

かゝる夜は故鄕なる母も夢成らぬ寂しさ居む村雨の降る

◎ 熊本縣　富野きた子

わが心われをはなれて野に遊ぶ日ぞと思ひぬ雲の一つに

◎ 小石川　山崎房子

一坪の畑の白百合咲きそめて朝風かをる川添ひの村

◎ 伊勢　岡本しげ

天童の金燭とりて馳するかと野に見て立ちぬ夏の夕雲

◎ うめ子

百合の香の高き小窓にうまいして天に上りし夢を見しかな

◎ 小石川　近藤愛香

駒とめてしばし水飼ふ撫子と野百合かつちる晝の野の川

◎ 佐世保　袖子

乘りつれて水かふ駒のたてがみに月かげ涼し夏の川水

◎ 石狩　大畠ふじよ

よき名書きて投げやる川の笹小舟浪よ搖り行け思ふ島まで

○　伊豆　杉山野菊
いそやかた君は小窓にわれは外に初日まつまを歌に興ずる

○　清國　柳川紅蘭女
白檀に香焚きすて、僧はあらず御堂しづかに紅蓮くづるゝ

○　讃岐　無名子
水雞なくあし原遠く月落ちてあさ靄ふかし川ぞひの村


木かげ　八王子　乙幡もん子

○　牛込　馬場不二子
高う低う秋の調をさゝやきて花にかくるゝ野の名なし水

○　東京市　遊蝶花
一しきり軒の櫻のふゞきしてとぼそは花に成にけるかな

○　靜岡　さだ子
夏川の白き花藻に文のせて君住む里へ流しても見む

○　芝　うめ子
白百合は世になき人の面かげをうつゝに見せてかをる夕べや

○　遠江　増田たけ子
藤若葉小雨もよひの水の家菖蒲をきると舟やる人よ

○　南總　原たき子
磯山の松の木かげに小手かざし遠き海見る朝晴にして

○　藤浪之里　小浪子
うまごやし白き花より靄たちぬ入江につゞくふるさとの道

○　山口縣　村田まつ子
綸絹のべて主はあらぬ窓の口庭の若葉を日のこぼれ來る

○　豊前　中村直子
山寺や讀經の聲のふとやみて眞晝靜かに牡丹くづるゝ

○　下總　武田たき子
つらかりしおそろしかりしうれしかりし夢ふと消えてもやにまかれぬ

○　群馬縣　吉田きみ子
わが撞きし鐘は野をこえ湖こえて君すむ丘へひゞきてゆくらむ

○　遠江　螢子
凛瑤の身を欄干にもたせつゝ夕べ寂しき秋の雲見る

○　山形　紅子
風きよき岸の松かげ柳かげいづれに舟をとめて涼まん

○　酒田　伊藤さき子
あはれなる聲ふり立てゝきりぎりす何をうれいて我がやどになく

○　筑前　芳賀しげる
風清し青葉の森に日は落ちて小草のひまに夏虫のなく

○　播磨　山本ふさえ女
大佛の手にいだかれし夢見して開く妻戸に鹿の音きこゆ

○　羽前　巻坂信子
手折らんかそれも惜しけり此まゝにして眺めんか姫百合の花

○玉くしげ明て二とせ月に日に榮えゆくこそ樂しかりける　赤坂　はる子

○花散りて青葉もみぢとかはれども我が待つ君はいまだきたらず　陸中　若生すみれ

○あか月の島の松原すが／＼し天つ少女の琴の音きこゆ　宇治　田舍娘

○如月や鶯來なく藪かげの家にはたおる少女可愛き　名古屋　西脇靜子

○さみだれのたえせぬ夜過さみしくも卯の花ちりてほとゝぎすきく　田邊　岡本寛子

○妹はうせむつみし友もあらぬ身に秋の夕のはつ雁の聲　豐前　たか子

○床のまにいけし三位が桔梗や水さしもだすふり袖の姫　福岡　ひさし子

○雨過ぎし庭の草葉の露しげみ虫の音淸くすむ夕月夜　土佐　五百籏初子

○誰人もこゝこそよきと思ふらん海の鳥居をくゞる涼しさ　靜岡　太田みつ子

○猿澤の綠の枝もくもりがちなり／＼宿す露の白玉　播磨　山本よし子

○夕風にたもと吹せてうらつたい進めばあそぶ舟も見えつゝ　筑紫　みどり

○旅路を紫衣の僧行くふる城の夕日の眺め我忘れ得ず　石見　石橋涙子

○ゑひ臥せし玉床の夏のよはふけて血しほしたゝる十字架のゆめ　神戸市　渡邊つたの

○繁り合ふ門田の稻の露散りて風心地よき朝ぼらけ哉　岡山縣　松岡岩江

○夕燒の空美しう眺むれば那須がふもとに白駒のゆく　下野　手塚妙月

○いそさきの松の木かげに來てみれば夏のはかなる風かよふなり　伊勢　本田文子

○室のうちは尙けづり氷をひさげどもゆふべ涼しき秋はきにけり　德島縣　上乃浦しげ子

○まど開き空眺めては友の身を思ふ哀れは秋の夜の月　豐後　岡南まさ子

○花すゝきまねくがまゝに立ちよれば玉なすつゆの袖にこぼるゝ　本鄕　山崎鮎子

○夕立のはや降り過ぎて山のはに涼しく出る夏の月かな　香川縣　粂利子

○夕立の霽れて澄みたる河の瀨に流れもやらぬ月の涼けさ　大分縣　梅子

○此の夕銀河長うしてまどの内空想にふける人うらわかき　埼玉縣　さわらび

○月さゑて虫の鳴く音を聞く宵は世になき君を思ふ頃かな　播磨　正井愛子

○山の端に一本優しう撫子の逝きにし友を偲ばする哉　呉市　春江

○美しき朝日のひかり帆にあびて瀨戸小舟の島がくれゆく　常陸　西野はる子

○三年振り友のみ墓に手向して在りの昔を偲ぶ今日哉　神田　玉川雅子

○春ふけて花なき里に鶯の鳴く音哀れに綾低うなる　石見　梅香子

○野ら人や日も暮もなし遠方に夕立つ雲の色を眺めて　大阪　柿本やす江

○今朝も又夏雲低う遠方の乳母居る國へ流れ行きけり　上野　鈴木邦子

○夏草に宿る白露あつめ來て殘しをかばや水莖のあと　西多摩　ふさ子

○あて人になり得し夢のふとさめて手まくらなでぬうつゝごころ　岐阜市　篠田登榮子

○

鐘の音もかぞへ盡して更くる夜を堪えずや振の此袖まくら　紀伊　ゆき子

○

靜かなる川風きよく身にしみてそぞろに思ふ故里の空　東京府　田邊よし子

○

古里の忘れがたきの山路も御代ながらに道はありけり　福島縣　若葉

○

小夜ふけてこゑあはれにも月かげに友まつ蟲のなきあかすらん　藤代町　よれ子女史

○

われを戀ひて沈みましけむ古池に夕顔花摘みてまゐらす　丹後　鹽見千代子

○

咲き滿てる菊の園生に愛らしう花かざしたる少女樂し　四多摩　森田なか子

○

玉琴の調べに通ふ松風の涼しきあたり月のさしたる　伊豫　すみれ子

○

都なる君にまゐらす土產は秋に孕む濱の涼風　京都　山口愛華

○

母死して孝女はゆきて淋しくも雨にくれゆく小萩ちる里　德島市　住友登京子

○

風もなく曇りがちなる夏の日は蟬の聲さへあつさそへぬる　大阪　僊文子

○

悲しさは別るゝ時に今ぞ知る忍ぶる心いやしのばれて　尾張　木村江月

○

沙遠く網ほす門の夕日かげ小鳥むつれて浪の音低き　鳥取　上山千重子

○

秋の宵谷に廟のわが窓に雁過ぎて故鄕思ひぬ　京橋　今泉磯千鳥

○

籠の蟲野の花こひて草月夜几帳の人にもの思はしむ　岡崎さき子

○

みだれ伏す野路の白菊ふみ分けて我なき友のみ慕たずねん　深川　澄子

○

賤の女の心あるかは知られども一鎌よけし野桔梗の花　豐後　君子

○

みぞるゝ日とほ見ゆ雲のうすあかり草が花もつ野の戀しけれ　讃岐　鎌村浪子

○

よき風を京の土產の小扇に秘めて歌して君にやろかな　茨城　酒葉良子

○

少女子が秋の山路にうちつれて紅葉手にして樂しげに行く　群馬縣　芳山房子

○

露の鳴く音をきけばなつかしながらなつとしもなし山中のみち　埼玉縣　齋藤度

○

しづけさの身に泌む湖の蘆の讃や藻かげの姫もいざ舞ひいでな　越前　古間波女

○

若菜つむ少女の影も見えぬなり一きは淋し春の夕暮　備前　黑住卯の花

○

淋しさや三更の鐘と諸共に遙かに聞ゆ犬の遠吠　熊本縣　富野美惠子

○

あな今朝もしぼみてけりな朝顏よ咲けりと告げむ術もなかりし　伊豫　登志子

○

夏の氣の身にせまりくる朝風に咲くやまがきの朝顏の花　靜岡縣　建部夏久子

○

夜もすがら蚊遣の煙りかほるなり夕べ作りし梨守が家　愛媛縣　鳴田さだ子

○

明け易き蚊帳のみどりにむせぶまてさめてわびしむ夢のふる鄕　備中　林ふみ子

○

垣内田の早稻の稻穗も色つきて豐に通ふ秋の夕風　京都　島田千代

○

葉櫻の並木に月のかげさして今宵さながら物思はるゝ　佐世保　たみ子

○

さらさらとすだれを渡る涼風に古書みるおきなしばしやすらふ　安藝　秀翠女

○

芙蓉さるわかき局のかた笑みに夕月さしぬよき夢のごと　和歌山　ふて子

○青簾にあまれる風は御方の髻の釉ゆりぬ少子女なれば　若松　千代子

○朝夕に飯とぐ背戸の溪川も流れの末は柿赤き里　四多摩　森田きよ子

○ふと逢ひて別れし人の何となくなつかしき哉初秋の朝　伊賀　山村すみれ

○露やどる軒のしのぶに蚊遣火の烟なゝめにそよ風の吹く　備中　大西好子

○暮れ行く一村雨に消へ失せて池の白百合只ほの白き　岐阜縣　高原久子

○月の夜に一人畔路に露ふみて我田見守る一つ家の主　長野縣　本多とし子

○丈高くなりましけりと眺めよる乳母が姿の老いにけるかな　常陸　山口菊子

○なく蟲も野を吹く風もゆく水もすべて淋しき秋の夕暮　群馬縣　飯塚翠子

○たへがたき胸抱きつゝ窓によれば眞萩亂れて秋の風吹く　千葉縣　水村勢津子

○御社の杉の雫に影薄う燈火洩れぬい杏の形に　尾張　溝口夏子

○ほがら〳〵東の野にみ光のさし出る見えて鷄のこゑ　伊勢　みどり子

○思ひ草紅に花咲く庭にして小島うたはせ君と住まばや　名古屋　原田琴子

○姉君と橋に身をよせ下見れば流るゝ花の行へこひしく　千葉縣　玉澤佐久子

○穗の宿る稻葉に宿る白玉の露に宿とれり十五夜の月　岡山縣　近藤文子

○あか〳〵と夕日きらめく玻璃の戸をへだてゝ咲けり白ばらの花　青森縣　佐々木ふたば

○月淡く螢とぶ夜に夏姫が蓮歩優しうぃてましぬかな　波島　白桃

○追分の一節遠く消え去りし村はしづかに暮れて行く哉　越後　河島しか

○庭のみゐまに蓮の花さきて葉ごとに通ふ風ぞすゞしき　埼玉縣　村上花月

○むかし我うゑにし松の木高きに鷺かれけりふるさとの庭　武藏　ひなぎく

○青柳のかろくうごきて酒匂ふ伊丹の町に春風吹くも　越後　松山けん子

○夕づゝの光たゞよふ棕梠の葉にさすらひの身をはゞたかれけり　京都市　孤舟

○草叢に夜を悲しくも蟲なきて夢結ばれぬ草の庵哉　美濃　古橋きせ

○丸髷に香油匂ふよき人の片頰に照りぬ夏の夜の月　秋田縣　三浦紅葉

○山百合や手折らんとしてまたしばし朝風涼し温泉の山　信濃　世良田ゆう子

○思ひ出る友人うつむきて涙ぬぐひぬ秋雨の宵　福岡縣　松永房子

○名月や大き模様の浴衣きて踊子過ぎぬ二群三むれ　德島縣　本庄よし子

○蟲の音に心まよひてなき友のすぎこしかたぞいとゞ戀しき　福岡縣　胡蝶

○吾妹子が住にし跡を訪ひ來れば尾花ぞ招く家はなくして　龍子

○明王の守りたまへる布引にうたるゝ人の影恐ろしき　若狹　山田緞葉

○眞盛どき白萩小萩皆散りて野末に動く霞の一むれ　茨城縣　小泉さか江

○さながらに畫繪の老と見渡しの野山にひゞくあけの鐘の音　土佐　深瀨ますこ

○　埼玉縣　長野よし子
入りかゝる月は白みて小山田の明方近く水鳥のなく

○　筑前　美津留子
うたゝねの夢を破りて夕立の雨こそかゝれ庭のばせをは

○　備後　竹葉顔
あやしくもないて來にける古郷のふる道戀ひし秋の夕ぐれ

○　山形縣　秋子
追想のそゞろあるきに白花えて眷老ゆらしのわび心地かな

○　岩代　瀧谷てる子
猪苗代湖夕日かゝりて波きらめく頭陀寺の鐘に漁舟岸につく

○　照子
鶯の鳴きし彌生は今いづこけふは深山に鹿ぞなくなり

○　鹿兒島　竹中たみ子
我がいほは小山田近ふ蛙鳴き卯の花白く時鳥なく

○　伊豫　後藤なお子
ふくろ夜に涼しき風のおとづれて川邊波立ち風鈴のなる

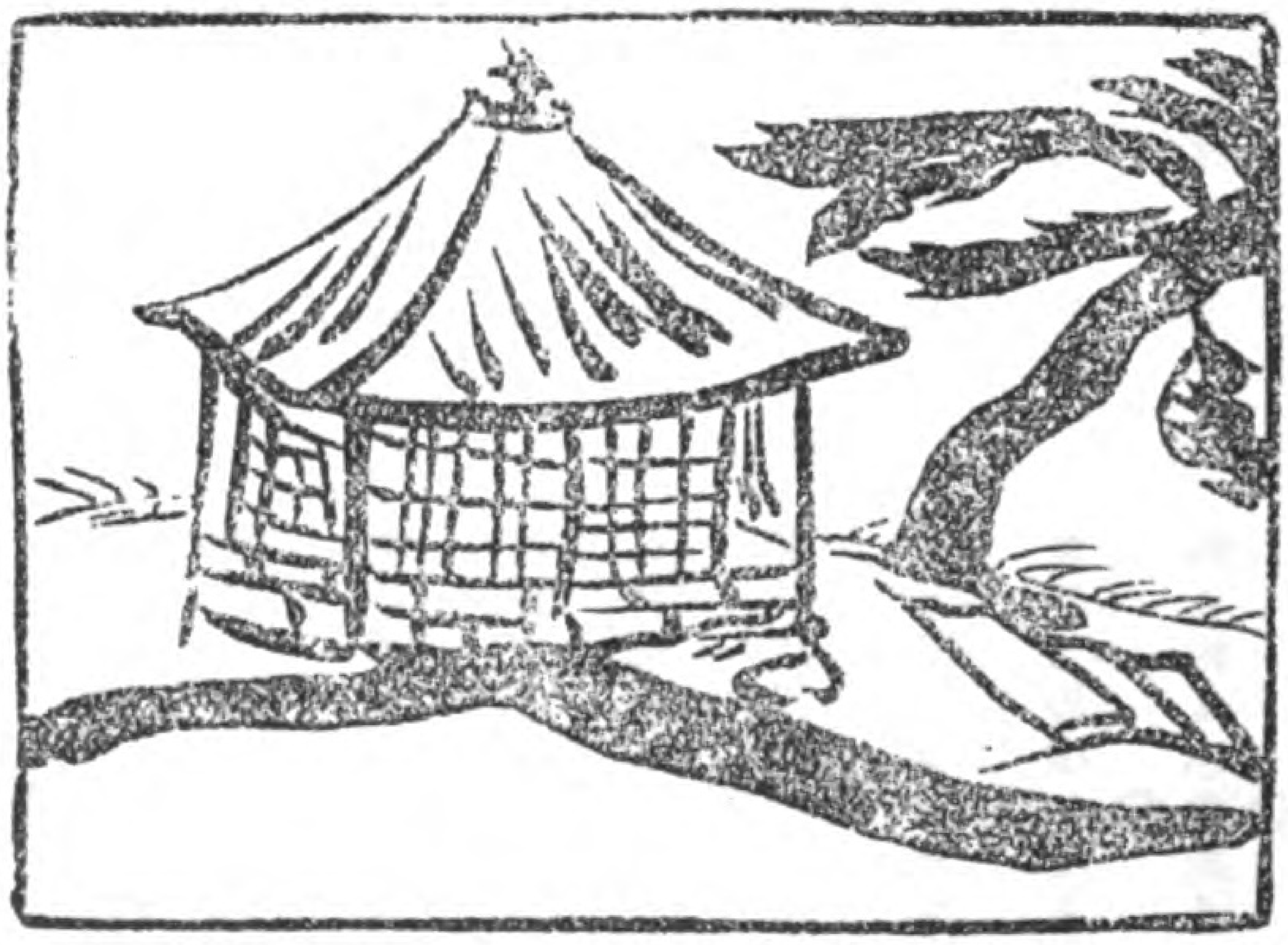
○　關　三輪槳津墓
み手とれば癒したゝるましみづのひびくとように賤の音高き

○　能登　張間花枝
涼しさや青葉がくれにせみなきて使ふうちはの風の身にしむ

○　備前　廣原はじめ
武夫の駒やいさむと思ふまで轡の蟲の嘀音すさまじ

○　大阪　副田みつ江
秋來ぬと松ふく風もおとづれてまくら涼しき朝ぼらけかな

庚申堂　丹後　睦の子



○　大津ひめゆり
ふるさとのたらちねいかに居ますらん都の空もしぐれそめけり

○　備中　藤原しげ子
大波にゆらる木切れの背に乘りて身をや清めん沖つ白鷗は

○　清國　紅蘭女
百合の扉に人待つ宵のつれ〴〵に白き鸚鵡に誰が名呼ばせし

○　津輕　安藤輔子
白蓮はあたら崩れぬ月の輪にうごく我影花瓣に離るか

○　横濱　黑田松衣子
斯くて世にこと終りぬと朝顔の凋みて落つる夕凉の庭

○　滋賀縣　美哉子
たり〳〵は水の上高く魚とびて月かげ淡し瀬田の川づら

○　大阪　大坂ひろ子
いかなればつれなき人のにくからで猶戀しさのいやまさるらむ

○　本郷　中村ふじ子
歸らなん若葉の國は葡萄棚の果の柱も芽をふくころよ

○　岡山縣　遠藤芳子
日ぐらしの聲する山の松蔭に岩間をくゞる水の凉しさ

○　周防　谷瑞子
いたづきの我身を窓にながむれば雲かゝらざる山山もなし

○　鹿兒島　實島よし子
金色の夕もや下だる彼の島に白百合咲かば詩人も住むらむ

○　長崎　平山きさ
さえ渡る月に調ぶる玉琴にたぐへてなくか鈴虫の聲

○　常陸　豐島秋子

なく蟬の聲はひとつにきこゆれど姉やありなむ妹もなむ
○神戸市　船戸ゆき子

伯母君と我れを呼ぶべき小さき人もの見て笑ふわざになれけり
○上総　とし子

山深く逃れ住みても榊葉の榮え行く世を祈りこそすれ
○信濃　すみれ子

君をおば待ちかぬる身は安らへて寢もやられんたゝく水鷄に
○羽前　樋口かれ子

朝露を踏分けて行く少女子の影かすかなる今朝のきりかな
○姫路　柳田白百合子

君おもふ萩の小窓にそとよれば月の影ちる鈴虫の聲
○高松　小笠原多毛子

洗髮してたく蚊遣火のうす煙ゆれて開きし夕顔の花
○讃岐　十河花翠子

二人さす小傘に薫る黑髮の油の香に細し夕顔小雨
○上総　新月女史

人心濁りがちなる世の中に清くも咲ける白蓮の花
○函館　藤本島羽子

夕立のまだはれやらぬ松が枝にしづくながらの月を見るかな
○羽前　琴和女史

亡き母を慕ふあまりに現にも夢路辿りて顔を見しかな
○越後　長淵なみだ

いと古き御堂のわきの一つ家にまさりて咲けり紅の花
○備中　愛の子

薄暗き行燈の影の枕邊にはべりてひとりみとり給を母く
○駿河　靜子

月をかされ今日を歸りの汽車の中うきよ話はそこゝにして
○石狩　大島ふじよ

天と地の星と花にも戀ありな見よ宵かはす露の情を
○出雲　白菊子

雨をあさる鳥も暑さをいとひてか木かげに蟬の鳴くを聞きつゝ
○筑後　永松みどり

夕立の名殘の雨にかゞやきて田の面を照らす月の涼しさ
○神戸　紫峰

沖の鳥白鳥むるゝ岩かげの入江の春ぞ潮あたゝかき
○和泉　天翔花

野の花のちさきに秘めし我戀の弱さおぼさば歎たまへ君
○下毛　國子女史

その際の天の香馨るそよ風に萩は綠の空高ふ濟む
○熊本市　六花

山はおぼろ人蹈みゆく野の三點白鵜とびこふ夏の朝晴
○安房　内代かく子

秋風のそよとも吹けば衣笠の岡邊に匂ふ藤ばかま哉
○陸奥　吉田安子

白萩の花咲く頃や牆の馬の踏出づる樣を見し月夜かな
○長門　伊東明星子

五月雨の晴れ間に富士の峯見れば銀光照りぬ綠りの松に
○堺市　武田くす子

瀬に雨は身のいたづきもさすらひてさすらひもちて失なはすらむ
○栃木縣　千葉夏子

とう〳〵とさながら瀧の如くにて夏も涼しき我が里の川
○神戸　三日月窓なみ子

夏やせの少しもとりし膝の上に赤き頸輪の小猫ねむれり
○横濱市　坂本婦美子

野も山も木の葉も草も紅葉して秋風ぞ吹く桃山の里
○安房　木村ひさし

うす氷くずを結ぶ朝川の蘆間にあらは家鴨よぶ聲
○大阪　鎌田春枝

ひともとの柳にかゝる月見れば涼風そゞろ袂ふくなり
○函館　乙羽

あさぎりのはるゝ彼方にかつを舟船うた高くかへり行く見ゆ
○紀伊　櫻本龍子

漁狩の海邊に焚く焔をあげて父のかへりを待つ海士の子等
○　丹波　愁月女史
月は白し跡なくはれて青空かけ名殘りの露は玉とかゞやく
○　紀伊　尾上子
小萩原つゆもさかりに少女子がわけ行く袖も花ずりにして
○　遠江　富田清子
夕榮の雲の一ひら地に落ちて咲きつと見たり雁來紅の花
○　神戸市　井崎なを子
秋は來ぬ杜の徑のうす霧に春を告めの神したはしき
○　新潟縣　摩華山女史
千鳥なく淡路島山右に見て行く舟早き朝月夜かな
○　信濃　桐原敏子
あれくちし壁が軒ばに色はへてよそめゆかしき夕顔の花
○　赤坂　中露子
鳴く蟬の聲の時雨ははら〳〵とこぼれておつる森の下露
○　神戸市　井崎なを子
あたらしき思ひは湧きぬ陸湖の森より出でゝ湖見むとき
○　水戸　海榮子
春風にかすかにもるゝ小雲のさくらにはゆるおぼろ夜の月
○　南越　原たき子
うつゝにはふせどねられず起かへり昨日の夢を何時か忘れん
○　千葉　丁子
亡き母の形見の衣とりいでゝありし昔を偲ぶかなしさ
○　横濱　山崎京子
藻鹽たく煙むら〳〵立ちにけり磯の七里に秋の風ふく
○　丹波　齋藤文女
卯の花の月さやかなり一聲の憐を添えし山時鳥
○　尾張　津金糸子
朝つゆのひろまも待たでしほれけり只ひとゝきの朝がほの花
○　筑前　吉田千代子
船頭の聞ゆる方に岩小島老松くろし片割の月
○　紀伊　西よれ
雷の音は消えゆき雨やみて吹く風涼し夏の夕暮
○　小石川　未虎女史
日影潜れ西の山端に雲出てぬ鳴神あれに乘りてゐまさん
○　信濃　野の花
そらだきの香もるゝ窓に灯影して鼓緒しむる人美しき
○　山形縣　山本ちよ子
吹く風にゆぼん涼しくそよぎけり小沼の岸に舟寄する時
○　陸前　丸山香花
くもの巣にかゝりし蟬のあはれさよ如何に心のそこぞあるらむ
○　鹿兒島　小牧岩江
いたつきの床にふしたる姉君の枕邊ちかく螢飛び入る
○　靜岡縣　佐野まさを
朝夕にうつす鏡の曇なき清きを人の心ともがな
○　千葉縣　松ヶ枝露子
寢ざめにもとりし扇をわするるや秋をおぼゆるはじめなるらむ
○　下毛　菊子
野分けの夜大野すぎゆく一人なる僧の小笠に月明りして
○　筑前　高松秀代
十六夜の月はかゝれり銀波うつ龍の宮居の松が枝にして
○　下總　川奈部榮子
白銀の鞍せし馬を乘りすてゝありぬ萩咲く伏が家の門
○　靜岡　貞子
月姫のてづから植ゑし白百合に清水そゝぎてわれつちかはん
○　三重縣　中村むめ子
秋ふく風にな泣きそ別れてはゆくにひとりの秋野路暮れぬ
○　遠江　蛟月
潮さびし杭に網干す故郷の甥を思ひぬ初夏の浦
○　中谷　近藤くら子
つり糸の細き手業にかろきみの世をうみわたるあまをぶれ哉
○　大分縣　江藤とく子

雨晴れて雲の梢風渡り入日涼しき夕蟬の聲

○　播磨　神吉美野

人知らぬみ山の奥も錦して谷間を縫へる赤萩の花

○　岐阜縣　大西粲子

卯の花に誰がすさびにや折々にやさしき箏の調べ洩れくる

○　京都　白百合

いたづらによはき吾身を悲しみて袂うるほすさみだれのまど

○　大阪府　中村いち子

悔ぞ多き來し方更に戀しと世をこゝにも暮れの寂寥を見る

○　長崎市　秋澤奐根子

たそがれて我世となりぬ夕顔の露に宿るゝ夏の月かげ

○　吉原綾子

高く遠く雲に入る鳥かけ消えて夕日うすづく紫の山

○　京都　大井順子

菊の香に秋の日晴れし奈良の京春日のあたり鹿むれ遊ぶ

○　石見　靜子

咲きそめし音に聞へて朝風も池のはちすの花の香ぞ知る

○　牛込　小路ふみ子

わが夢は狂ふ小鍛冶の槌のごと雨す嵐す寬のすむらしも

○　千葉縣　今井なほ

故道つゝ椽に坐りて物思ふともしびふけて小雨ふりだす

○　長崎市　出口ちず子

菜の花の咲けるが中に庵見へて朝日うら〳〵鷄の鳴く

○　神戸市　平林たつ子

初秋の風よ懇なる故郷の妣のみ墓に心して吹け

○　栃木　千葉夏子

小夜ふけて人もねしづむ庭のもにきぬつくろへとこほろぎのなく

○　常陸　橋本一舟

朝まだき讀經の聲に歩を進み小はぎにちるか露の冷めたさ

○　千葉縣　渡邊花子

富士の山見おろす雲の絶間よりわが故郷の見えかくれする

○　群馬縣　田舍少女

家々の蚊やりの烟たなびきて月もかすみて見ゆる頃かな

○　東京　濱子

月の夕綠すゞしき木の影に詩の神舞ふて郭公なく

○　和歌山　池見俊子

佳き風のさゆらぎ謎りて咲くかとし思ふ白蓮に朝月宿る

○　福岡　朝星女

いさり火の影も波間にあらはれて夕へ涼しき磯の松風

○　播磨　前田富子

夕立の晴れて梢に吹わたる風心地よき蟬の諸聲

○　長崎縣　春子

もゝ千年綠色濃き松陰に八千代ちぎりて遊ぶ友鶴

○　鳥取縣　靜枝

野をゆくにあまりまばゆし二人には薄雲かゝる月こそよけれ

○　伊豫　登久子

亡き人の形見の衣みるたびにはかなきうきよしのばるゝかな

○　信濃　桐原けんじ子

すみれ摘む野邊もあきたりいざ行きて又ゝ遊ばん桐原の宮に

○　長野縣　町田美枝

のどかさにまがきのかげのしらうめもにほひはなして花さきにけり

○　秋田縣　秋山七五三子

荒れし野の隅に菫の花咲けど見る人のなくあだに散るらん

○　小樽區　高橋春濤子

雲ひくき夏野三里は咲きみだる萩を戀しみ人を戀しむ

○　靜岡縣　濱崎てる子

文ならひ出にし友を思ふかなたもとわかちし青柳のもと

○　土佐　石川きよ子

瓜の花咲むらむ如き心地して七畝の畑をひとめぐりしぬ

○　下野　須藤翠陸

夕日影波を染めたる海の奥に鯨虹ふく舟岸に寄る

○　筑前　北澤ちせ子

約十人日傘遮られて草取りや稲田の面に波止場築きぬ
○ 相模 鎌田靜子

手折らんとすればほろ〱散る萩や小庭靜かに日は暮れんとす
○ 沼津 渡邊とよを

雨晴れて端山を出る月影の葉末の露に宿る涼しさ
○ 靜岡縣 岡村傳子

母上の顔にも似たる秋の月何をうれふる雲にかくれて
○ 千葉縣 渡邊汀子

馬草かる人もやあらん長柄野に雲一朶なく駒の嘶き
○ 上總 森嬉美子

なつかしき君の手植の千代見草色も變らず咲きにほふかな
○ 備後 中山八千代

火もみえぬ旅の山路にゆきくれてたゆたひをれば時鳥なく
○ 遠江 清子

送るさへうれしきものをなほさらに錦かざしてかへるその身は
○ 赤坂 高木あきつ子

聖僧が涅槃の御座かたと白く小草すりゆく露の胡草
○ 備中 千代子

泣く〱に別れし友は外つ國に病ひしときく五月雨のよひ
○ 神田 寺尾多喜

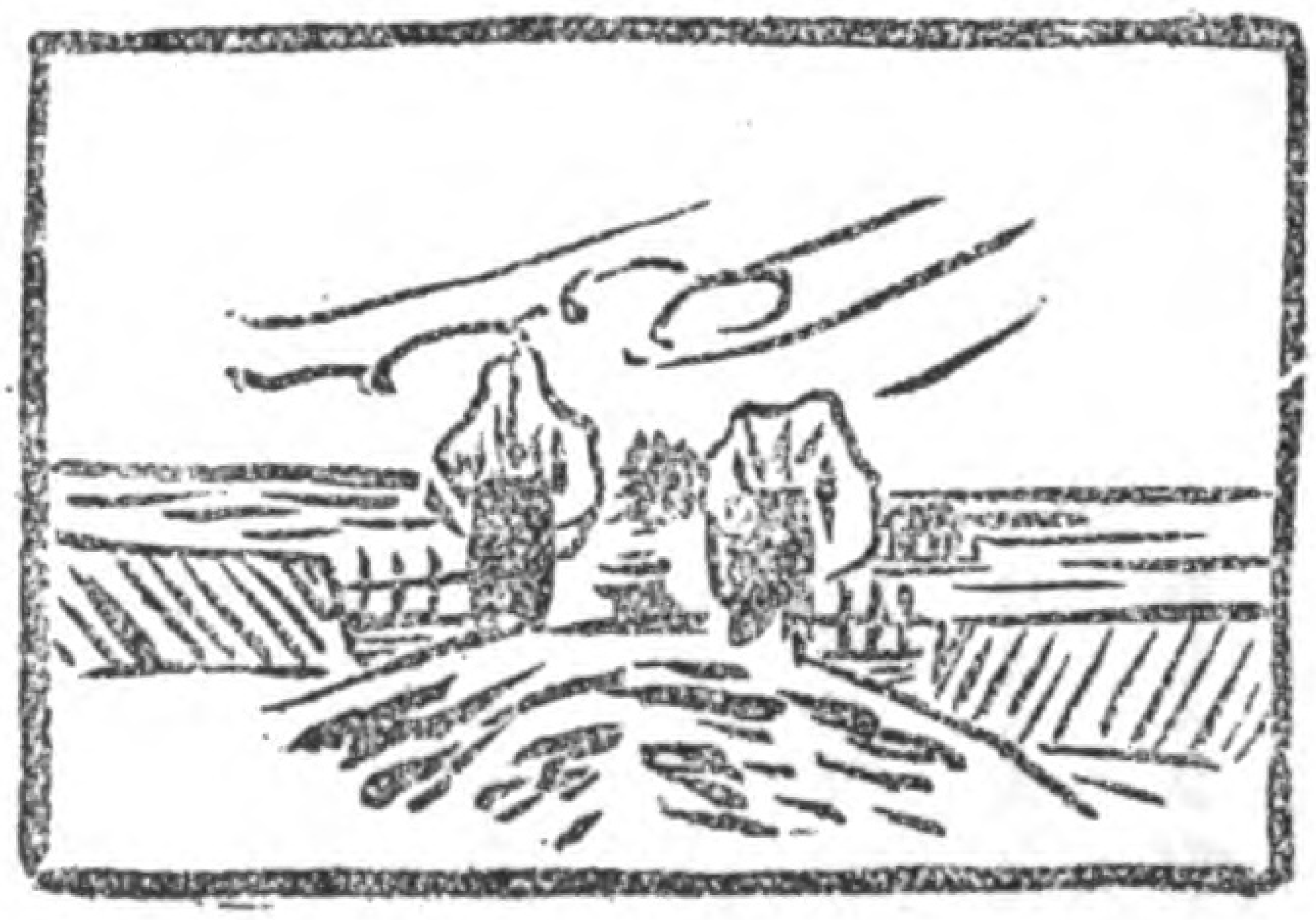
かゝる夜を語り合ふべき友あらば五月雨しげきこの夜半にして
○ 栃木縣 磯みい子

姉と呼び妹と呼ばれつむつみしも今は雲山へだてつるかな
○ 佐賀市 田中翠子

うら〱とのぼる朝日の光うけて露にきらめく緋牡丹の花
○ 伊勢坂 西野

月清う狼吠ゆる山寺に戀を捨てたる讀經の聲

種馬所　羽後　一葉女史



○ 羽前 杉葉女史
野の川に葦の葉船の流れ來て影うららかに水緩う行く
○ 茨城縣 仲田百合子
なつのゆふ風ゆるやかに蘆ふきて白帆ゆく見ゆ夏の久慈川
○ 埼玉 千野蝶
住みなれし深山の庵はうつせみのなく聲だにもゆかしとぞ聞く
○ 大阪市 富谷ひさ
ふるさとのいとし妹に送らんと造れる花に胡蝶とまりぬ
○ 赤坂 村松すみ子
吹きおくる風の姿も行く舟の帆にあらはれて涼しかりけり
○ 長野縣 金子ゆり枝
みづ色の絽蚊帳を透きて溫泉の宿の溪をへだゝ白き百合みる
○ 千葉縣 山木きかど子
宵ごとに螢すがりし草の葉にかはりて置きぬ露の白玉
○ 王子村 岡田まさ子
琴あれどその音を合はす君まさぬ月にとふまもあり明のそら
○ 千葉縣 今井なほ子
川越えて彼方の森の鐘の音や霞こめたる村にひびけり
○ 下谷 高田春洋子
初秋を黑髮香ふ丸窓に宵める女空見て泣きぬ
○ 常陸 なみ子
遠畑にいなゝく聲の細きかな柴木つけゆく翁がやせ馬
○ 上總 土屋發子
秋風の梢を渡る音冴へて遠く蟋蟀や聲も幽なり
○ 高崎 一少女
かきにこし子らがあそべるみずばちにやどるをくだく夏の夜の月
○ 相模 柏原美奈子
馬の背にゆられ〱て花野ゆく少女美しタ燒の空

○　米澤　夏月
暑さをばしのぶたよりに立ち寄れば袂涼しき松の下風
○　咲枝
蛙なく小田に少女の影たへて夕涼しく夕立のふる
○　奈良縣　霞女史
振袖につゝみし文筥はし見えて萩の道行く稚兒輪の少女
○　牛込　不二子
秋ぐさのみだれ模様の水干や今日をはれなる舞のよそほひ
○　上總　松ヶ枝
夕日さす秋の枯野の花すゝき誰まれくらん風にまかせて
○　廣島縣　堀江清
花賣りの行にしあとや蝶ひくゝたそがれ涼し村里の秋
○　豊前　流香女史
文まなぶ机の島の友千鳥翼ならべし昔し戀しも
○　廣島縣　影山すみを
賤が家は閉し勝にぞなりにける植る早苗の盛なるらし
○　名古屋　志水白子
あかときの百合の香清う野に映えて草に薫ずるうましはなの露
○　下谷　綠森
かやり火はほのかに見えて風涼しほたるとびとぶ夕まぐれかな
○　北豐島　小粂とき子
軒下にはせ入るたび個みのうへのはなしをはるや夕立ぞやむ
○　下野　中村つる子
夏の夜に蚊遣りなしつゝ涼み居りのきにながめぬあはき月かげ
○　常陸　大和田清子
夕顔の籬の影に足洗ふ少女美し夏の夕ぐれ
○　伊豆　上原きよし
小夜更けて月の光にほとゝぎす一聲高く地にぞ落ちける
○　若狹　津田汐汀
嵐の神が聲もあらゝに冬の野を走りさりたるあとの淋しさ
○　但馬　矢[illegible]子

木下蔭君によくにし面影を思へば人の美しきかな
○　紀伊　木下美笑子
賤が里夕霧こめて風たえて臼うた聞ゆとぎれ／＼に
○　岩手縣　紅百合子
たゞ一人くれゆく夏を野邊にしてなき友こひす入相のかれ
○　石狩　楓尾孤子
我宿の籬のもとの露草つゆも重げに咲きにけるかな
○　豊前　たまき
白萩のみだれ如何にと手燭して庭てらし見ぬ雨細きよひ
○　日向　右松春子
朝ぼらけ川の面に立霧の中にをぼろに見ゆる渡し場の舟
○　愛知　樋口琴子
初秋や涼しき風の心地さに咲きそめにける秋の七草
○　廣島市　兒島春枝
露しげき萩のほそ道水汲みて島の少女のかへりゆく朝
○　信濃　奈美子
熱病みて林檎ふくめば果樹おほき吾が家おもひ妹ねたましき
○　仙臺　河原榮子
夕闇に螢光りて谷川は柳五丈の風清きかな
○　三重縣　伊藤龍子
ゆくもあり歸るもありて山の端にたちもとまらぬ夏のむら雲
○　備前　萩露子
美しき島のひとむれ飛する如く湖をよぎる夕榮の雲
○　愛知縣　永田舞鶴子
田舍女の稻扱く田面を歸雁の一こゑ啼いて西へと行きぬ
○　麻布　池田きみ子
夕涼み月もさやかに舟うかべゆたかにゆるゝかげの涼しき
○　下野　菅谷とく子
せめてもの思やりにと琴とれば亡き友がきの影のみへきて
○　京都　登久子
學游き一人の姉のみ心を慰めかねる我身戀しも

○　山城　松田あや子
誰が宵每夢路に通ふ夏菊の秘め歌あらんに靜かなれ風

○　芝　眞崎織代
ほつれ髪桐に亂れて若妻窓邊に雲の行方見ん君

○　加賀　あけぼの
大波にめすかと見えしつはものはたてがみあらき白馬馭します

○　豐前　小草子
涼しさや入江のあしの葉かげより小魚浮びてぬ夏の夕ぐれ

○　大和　受田貫奘惠
この秋も塵に染まれば我が園に咲くか汀の白菊の花

夕すゞみ　呉市　井上さわ子

○　靜岡縣　石原時子
湯浴してそゞろ歩きの夏の夕早や秋虫の野べに鳴く哉

○　三田　鈴木しゆん
泉水に木立の月の影さして風のまに〳〵に鈴蟲の鳴く

○　信濃　都女
鶺鴒のひなはぐゝめる樣みえて青葉すゞしき川添ひの宿

○　千葉縣　福島くに子
追りきてにごれる我世我身をば洗ひて去れや大海原の浪

○　佐世保　赤司操子
長き日は山にかくれて夕ばえの雲居はるかにとぶとんぼ哉

○　名古屋　加藤薫子
亂れたる空のくも間に星一つあはれいとしの君がみ靈か

○　德島縣　白百合少女
苔むしてかづらもとらふおくつきにたれ捧げけん白百合の花

○　京都　田島薫
歌集抱いて傾聽てぞ泣く妹の涙ゆるしませ藥師寺の兄



○　筑前　青葉女史
老ませる母に別れの言葉なく只だ袖しぼる秋の夕暮

○　磐城　遠藤千代子
ほのぐらき欄にもたれて涙して盆燈籠のひかり見し子よ

○　愛知縣　近藤しげ
打ちなびく稲葉に秋の風見へて入日淋しき麓の山里

○　山形　紅子
傷を負ひて動かずなりし猫の背を埋めて白露のふる

○　姫路市　操子
里小川流るゝ水の心あらば言の葉つたへよ船の主へ

○　大分縣　平田つみ子
ちよろ〳〵と流る小川の水清しいさ來て洗へ少女衣服を

○　尾道市　秋雨
おもしろきこ笛吹きつゝ里わらべ家路にかへる月の夕ぐれ

○　長野縣　若草
白露の結びし蜘蛛の小網には朝日のさして虹の色立つ

○　青森縣　小野紫子
せめてものそのおとづれもたえにけりそらなくとりのこゑぞかなしき

○　上總　四之宮りやう子
夕暮を野良歸へる兄の歌はあれど唐黍高み姿見えなく

○　香川縣　三村笹夫子
君は右我は左の袖ぬらし夜道を急ぐ相合傘よ

○　廣島縣　すみれ
小鮎とぶ音もきこえて太田川清きながれぞ涼しかりける

○　德島縣　田舍娘
昔住みし其姫君のみ魂かも荒れたる庭に白百合の花

御後姿み母に似たり夢の野にすがらまほしき其人のかげ　土佐　高橋白ばら

○

何となくうせにし人の思はるゝ花散る間に傚なきく我　福岡縣　橋爪はる

○

見ぬ人を戀ふる心の血と涙たてぬきにして錦織りてん　石狩　河合菊子

○

雲間もるかげも涼しき夏の夜にふくると知らで月を見しかな　函館　中野荒月子

○

夕まりの音靜ずまりて庭の面柳長閑に五月雨の降る　南總　あやめ

○

天の川かりがれ渡る聲すなり地は草むらに鈴虫の鳴く　宮城　齋藤惠津子

○

歌成りて倚るに興ある夕まどの青葉が上に新星のかげ　香川縣　松永紫莚

○

木香咲くやぶれ垣よりのぞき見し隣りの庭の姫百合の花　周防　光子

○

戸によりて小琴奏ずる人見たり紫淡き月かげにして　大坂　西田邦枝

○

たのしげにほたる飛ぶなり二つ三つやみ路てらしていづちゆくらむ　岐阜縣　山田よね

○

わがせこが獵の歸のなどおそき雨の夜すごき猿の聲　備後　二子山

○

御堂の前桐にとまりし蟬の聲うつゝにきゝて暫まどろみぬ　福井縣　荒木君子

○

古郷の垣根戀しき朝顏や母の御聲に似し人もがな　熊本　桑原つり子

○

傘あまた並びてほせる筑紫野のはてにうかべり白雲の峰　高岡市　芳賀喜美代

○

靈壇に燈火さゝぐと登り行く階に月さし冷き夕よ　秋田縣　鮎川辰子

○

安藝　りよ

夜の露にしほれし面を擡り上げてほゝ笑む花の愛らしさかな　神奈川　宮川文子

○

月は今山にかくれて篝たく鵜舟三つ四つ川下りくる　羽後　佐藤夏子

○

我を淋しくみとる小夜更にいと堪え難き犬の遠吠　長野市　わかば

○

この朝げかりの一つらおとづれて庭の松風音かへにけり　淺草　赤倉とみ子

○

濱松の琴引きいづる月の夜をふし面白き初雁の聲　紀伊　すみれ女

○

母が魂なぐさめばやと奥津城にたゞずむ夕べこほろぎのなく　神戸　安達絹枝

○

須磨の浦波の白帆に日はおちて出たる星に千鳥啼なり　越後　日下きよの子

○

窓近う飛び交ふ夕の螢見て集めし人の昔偲ばる　伊豫　栗の花

○

白髮ぬきて母のみ顏をうかゞへばみ笑み豐に年波の立つ　常陸　朧月子

○

水かゞみたゝいてよする尺八の主はいづこぞ音のいと涼し　肥前　松井三重子

○

大方の秋とし云へば吾が袖も夜毎に露のおきまさるなり　佐賀縣　今川しげ子

○

夕立ちの過にしあとの山の端にすゞしく出る夏の月かげ　芝區　大芝まつ子

○

秋近に少さき螢の傷なきて病める妹の寂顏さびしき　下總　藤崎奈保子

○

嫁ぎ行く身の悲しさは耐ゆれども心にかゝる君が身の上　下總　市原春子

○

夕立の涼しく晴し常盤木の緑の中の蟬のこゑかな　岐阜縣　杉山喜子

○

須くは月こそよけれ須くは暗きもよけれ逍遙の園

○ 燕つばめ巢立ちせし日を弟がさびしと云ひぬ雨降りにして　關町 山田はぎ子

○ 花故にそよと吹くをもいといけめ今は葉かげに風を待ちけり　伊豫 湯月千代子

○ 夕霞む白き桃さく花の里入日靜かに山羊の聲する　三河 りき子

○ 緋薔薇の花かとばかり君が頰は誰に呼びたる御名にあれど　土佐 石川潔子

○ こゝに三年遠くはなれて古郷のたらちれ戀し秋の夕暮　群馬縣 飯塚美起子

○ 流れ行く庭のやり水音たへていよ〳〵さゆる夏の夜の月　神奈川 美花子

○ 山の氣の沈みて還へろ小村のはづれに立ちぬ朱の大鳥居　和歌山 前田喜代子

○ 水草の花うごかして魚躍ろ趣きふかき夏の夜の月　下毛 喜智子

○ 我里に同じ心の友なくて只獨りゆくしきしまの道　羽後 一葉女史

○ 緣なる松の木蔭の岩清水掬ぶ袂に秋ぞかよへる　美濃 青英女

○ 一つ二つ賤のともしび影消えてふけゆくやみに蛙なくなり　東京 とき子

○ 拙なくもきみに送りて見せんかな絹の小扇歌かきそめて　尾張 長司晢子

○ 暗き家にゆかしくもろゝ箏の音は月をたよりのしらべなるらん　京都府 松岡綾子



雨中水車　田島諦也

○ 風なきに池の蓮葉うごきぬと見ればひごひの浮き沈むなり　東京 しら萩

○ 幾度か小琴にかけて奏てけん戀しき君がたびし長歌　豐前 中村直子

○ ほとゝぎす三千年を生きられし聖者逝く夜を啼きしきりけり　高岡市 北本歌子

○ 泣きて嫁きしみ寺の庭の卯月花白き心と我れに見せけり　鹿兒島 竹中ため子

○ やまひ癒えてひさかたぶりの洗ひ髮むすぶ我が手の細りたる見ゆ　西宮 森井せい子

○ 池殿のかぜをすゞしみ夏の夜はわがみ一つのあきとこそしれ　群馬 みどり子

○ 此小道小川につきて小三丁藥師が家の灯ほの見ゆ　東京府 瀧澤夏子

○ 香絕へて人跡淋し堂の椽に小萩みだれて日昏黃れぬ　茨城 矢口はつ子

○ おが屑に氷蓄つて樂しみぬ幼な日思ふ水白き哉　丹波 難波愛能

○ かすかにもかなたに見ゆる燈火はいづらの里のしるしなるらん　滋賀縣 石野十子

○ 星ふる夜情にあつき女の神の涙は凝りぬ姫百合咲きぬ　函館 小野ゆき子

○ 蝶二つくるひ〳〵て紫陽花の花にたはむる日ざかりの頃　呉市 桑原清子

○ 桔槹夕日に照りて青き田の稻のうれ〳〵凉風渡る　但馬 孤園

文藝遊戲

讀書會（課題）

記者曰　本號の文藝遊戲「讀書會」にも諸孃が擧って出席されたのは誠に欣ばしいことで諸孃が如何に書物と云ふものに注意を拂ひ、且興味を持たる丶かと云ふ事は、此れを見ても明かであります。今讀者の便宜の爲め一つ一つ題を附けて左に發表します、載せ切れない分はお氣の毒ですが増刊までお待ち下さい。

一等　我が家の藏書

丹後　賤の子

私の家には隨分古いきたない御本がありますの、子のたまはくの大學や日本外史、國史略、十二史略、そうかと思ふと大星力彌がこれ〳〵寺岡早まるな、なんていふ淨瑠璃本が十四五册。これはまた母樣が小學時代にならはれたのでせう、世界國づくしもある、丁稚が習ひそうな商賣往來とかいふもあれば、ノアの洪水などのことが書いてある世界歷史の古いのもある、此の間の虫干に謠曲の本が澤山出ましたから、新體詩のやうに朗讀して居ましたら、まあいやな父樣が扇を斜にかまへて、これなるは東國に住む僧にて候とうたひなほされた、古い本はずゐぶん面白いものです。

二等　新舊論

尾張半田町萬屋方　小栗きと子

近頃新書のみ讀て古書など讀まずともよいとの説がありますが、昔も今も人の道に異變はありませぬ、却て昔の方がしつかりして居ますから、古書で道德心を養成し、新書で新智識を得る樣に、即古書によりて心の中を修め、新書によりて外を導くてそ、よろしいのですから、私は新書も讀み古書も併て讀む必要があると感じました。

三等　竹取物語

東京　とき子

書讀むばかり樂しきはなし、去る日青葉おひ繁れる窓のもとにて、太平記の讀みかけを繙き「落花の雪」に感じ再三くりかへし、次ぎに竹取物語を繙き初めしは夜はいたくふけ虫の音いと哀れに、石作皇子の「しら山にあへばひかりのうするかとはちをすて丶もたのまる丶かな」と讀み續くるや、油やいつか盡きにけん燈火は消えはて丶妾讀む文に月は松が梢をこえて照りぬ。

四等　作家のいろ〳〵

下谷區徒士町一丁目七番地　橋本　波子

掬汀が小説は菫咲ける野に於て讀むべし。小波が作は幼兒抱きて、天外は鏡臺の前にて、露伴は深山の寺院にて、水蔭は怒濤渡る汽船にて、蓼

洲は端午の日に、獨歩は庭園の四阿にて、蘆花は眺望宜なる海楼にて、秋聲は田舎にて、風葉は煩悶の日に鏡花は風雪の夜に、而して吾が柳浪は雑司ヶ谷邊の小雨の日に！

五等　古書新書

石狩國雨龍郡北龍村和　繪澤源子

白髪のお爺さんが今の小學校の讀本を見て「今の子供はこんな本を讀んで居るから、四年も學校へ行つても書面一本書けやしない、我々は寺子屋でも一年經てば四書五經を教わつた」と云ひますのを時々耳にすると妾は然樣思ひますよ、四書五經を讀んだなど丶云つても、地球の圓りが何里あるか、風の吹く理由も知らないのが多い、よくそんなことが言はれると。論語讀の論語知らず、古書が今の讀本よりやさしいのです。

秀逸

○四季をりく～

岩代　かすみ子

讀書はどうしても夜に限ります。晝は外界が騒がしいから注意の散逸を免かれませんが、夜は世界が靜てすから よく解ります。そして同じ夜でも、月影朧ろなる春の夜花散る欄干によむには文學的殊に美文がよく、若葉吹く風の涼しく螢の光消き夏の夜は俳的騷的趣味のがよく、四邊靜寂の秋の夜さやかな月に對する時は哲學倫理の書がよく、白雪靜かに降つて肌や丶ひや丶かな冬の夜は數學的のものがよいやうです。

○冥想

備中　菅森定子

妾は讀書は夜分に限ると思ひます、勿論朝とて悪くは有ませぬが、宵の雑閙がいつか絶えて四隣が漸やく靜かになりますと、今まで左程に無かつた蟲の鳴く音が俄かに高まつたやうに覺えて。何だかこう夢から醒めたとき何物なかもとめて得ず。樂しかつた幻想をうらやむやうに後の柱に凭つて目を瞑ります。すると今まで讀むだ肥耶が蜃氣樓の如く頭に浮んで興味津々としてつきませむ、かくして一番鶏に驚かされることがあります。

○偶語

栃木縣　磯みい子

私はいつも夜の十一時頃、貞操、沈着、虚榮、謙遜、决心、忍耐、節制、中和、賦質など皆さんを集めて讀書會を開くのです、第一會長が私で其餘興としては皆思ひく～の事を語るのです、そのにぎはしさと云つたらありません、それてついには虚榮さんと謙遜さんの口論など始まるので節制さんが一生懸命制するけれどもなかなかきゝません、そこで中和様と私がいつも列者となるのです。

○心の判断

岐阜縣　小山殘香

淋しい時には國文、胸に煩悶ある時には漢文、腹の立つた時には修身眠い時には 女子文壇とこう一々に定めて讀むのですだから友は私の讀む本によつて其時の心が判るつて申ます

○讀書の時間

下野　鈴木雪子

小學校を卒業へましてからは 毎日小說や雑誌許り讀み耽けつてゐましたが、この頃は 仕事致しますので、朝三十分、晝休み 二時間、夕三十分と定めました、あゝ一日 三時間これが妾しの修業時間てす、機織り工場の片隅て 書を讀む時の嬉しさは：：：高尚な趣味にあこがれてゐる妾しはどんなに三時間が樂しい時てしよう、晝休みに詩集など讀み始めますと二時間が三時間になりますので、姉さまにいつも笑はれますのてす。

○秋より冬

大阪　林信子

妾等の方ては 毎年秋の中旬から冬の終りになる迄讀書會を開きまして 學校で教つた事を充分復習した後は各々自分の 好きな本を讀て其中の面白そうな處をお話したり 朗讀したりするのです中には未だ 妾等の聞いた事もない外國の歴史や地誌の御話から 修身理科小說、おとぎ噺から一口話までもそれはく～座つて居て どんな事でも解ります。

○我地の圖書館

周防　嵐　子

我家より三町ばかり隔つた處にある圖書館は、元、縣知事で非常に公共事業には熱心な、武田氏の創立に依るものです。館内總て奇麗で大きく、男子婦人兒童と三の閲覧室に分れ、兒童閲覧室には、總の新聞雜誌お伽噺等あつて周圍の壁には古より烈婦と稱へられた人の像等がかゝげてあります。又男女閲覧室ともに、圖書目錄が備へられ、隨意にかられます故、日曜日等には、下駄箱へはいらない位です。子守も老人も幼年も青年も男女も皆來館して、閉館の鈴のなるのに驚ろいて、又來ん日を樂しんで、愉快に歸途につくのであります、

○病氣も癒る　埼玉　戸張登女子

今度は讀書會ですつてまあうれしい。私共等は未だ小學校時代ですから、女學校の御方とはちがつて書物の名等よく知りませんが當校では尋常小學校では、地理歴史讀本理科等で私の最もすきなのは歴史です、そして其の中では平治の亂、源平二氏の盛衰、藤原氏の擅權など一番好きです、そして右の樣な所を讀むと少し位の病氣もなほつて清々致します。

○漢詩　埼玉　秩父　少女

此の頃唐詩選を讀みましたら『君家住ニ何處一、妾住在ニ横塘一、停レ船暫借問、或恐是同郷』と云ふのがありました。此の詩に顯れた支那中世の婦人氣質は、現代の婦人に比して大膽であつたやうに思はれます。

同じ詩選中に『黃雲城邊烏欲レ棲、歸飛啞々枝上啼、機中織レ錦秦川女、碧紗如レ煙隔レ窓語、停レ梭悵然憶ニ遠人一、獨宿ニ空房一淚如レ雨、』と云ふ心を、鄰村詩鈔では『梭の音を、聞くべき人は今何處、心を糸により初めて、淚ににじむ木綿絲、破れし窓に身を投げて、暮れゆく空をながむれば、塒へ急ぐ村烏』と歌つてあります對照して見ると面白いです。

○聖書の徳　新潟　日下さよの子

私しは聖書が好きで暇さへあれば、否な、無くとも日課の樣に毎朝讀くのであります、中にも「汝は汝の敵を愛せ」と言ふ一句を不平の時には心の内で操り返し操り返して居ますと自然に不平が消えます、是れは慥かに聖書の徳かと思ひます。

○一葉の作　牛込　土居優子

文學方面では一葉女史の文が一番好です、全集の中でも濁り江丈くらべわれから等は、暗記する程讀みました、紅葉の樣に軟くも無く又露伴の樣に硬くもならず、文に氣品が有つて筆が雄健で流暢で女らしく、觀察が優れて居ること人情の機微に通じよく穿ち得て居ること、どんな俗社會を寫しても高い氣品がこもり詩味が溢れて居ます、全體に渉つて思想の健全なのは、とても今日家庭小說と立派に銘打つて失戀とか煩悶とか、女々しい泣き言を並べるものは比較が出來ません、そして題のとり方が上手です、私は女史の人格が人を拔いて居られたと思ひます、早く世を去られて明治文壇の爲に惜む許りで無く、私は其家庭を推してお氣の毒で同情に堪へません。

○修身と傳記　鹿兒島　智蒲子

私は修身談や古人の傳記等を讀むのが大好きです、一度讀み初めますと春夏の日長でも机をはなれる事は出來ません、秋冬の夜の長い節でもおぼえず父母に注意せられます。

○讀書論　奈良　中富よしみ

今やいかなる山間僻地の人と雖も、居ながらにして多くの智識と多くの慰藉とを求め得、以て社會の進步に後れざるは、偏に書籍の賜に外ならず。然れども近來都會の惡風地方特有の美風を追ひ拂ひて、各地至る所に吹き荒まんとしつゝあるは、實に書籍の先導に依るところ少なからず。あゝ心すべきは讀書にこそ。

○我家の愛讀書　横濱　清水千秋子

父は讀書と印のをした大學に四書五經を母と姉は每月發行の婦人世界と割烹手ほどきを兄は青年雜誌を私は本誌と女鑑を愛讀致しますそれで每週土曜と日曜の夜には父が皆をならべて大學などの講義をなして下さいます。

○讀書の工夫　兵庫　暉子

此度讀書會をお開きになりまして私も何かいゝ經驗談でもいたしたいと存じ色々考へて讀書致しましたが未だこれと云ふいゝ經驗はございません然し其中で先づいゝかと思ひますのは愛讀中一句々々注意して讀み後に復習をいたすのです其復習も始めの樣に讀みますと大層な時間と勞を費しますから概略だけ腦中で散步しつゝ復習するのですさすれば有益に時間を費す事が出來るだらうと存じます。

○文學史　花子

文學史の本をよんて居りますと 昔からの名高い書物、その批評なんか おもしろくつておもしろくつて、
そしてこんなに澤山の書物せめてこの十分一てもよんて みたらどんなに嬉しいかと途方もない望が頭の中に浮びますの、十分一はおろか百分一も千分一もよめる筈はないのに。

○國語　長野　小蝶

私は學課の內て 國語が一番好てすの、讀に無週其時間が待遠しくて／＼。されども 時々其國語お嫌て／＼一時間中ピク／＼して居る時があります、それは前の日に遊び過ぎて 下調べのして無い時………。

○西詩愛吟　京都　佞撫子

私は西詩愛吟を誦に好んて讀みます、散步 の時も旅行遠足の時も決して、放しません、詩は解し得られませんが、字の意味は どうにか解ります、淋しい折、悲しい時にも 直ぐ之を見ます、そうすれば、憂愁、苦のすべて をはなれ、ひとり天國に遊ぶ心地てす、私は 生涯これを友として樂しく幸多く送りたいと思ひます。

○新躰詩　陸中　山櫻花

わたしの愛讀して居る 女子文壇中て私新體詩は一番好きよあの高尙て 又どことなふおごそかなことれ私 いつても新體詩を一等さきに よみますわ。

○男性的　下野　里の子

讀書會、大發成、一躰私は讀書が大好きて本を見初めると食事を忘れる事が度々てす 學校の本ては英語國語幾何物理と來ては いつも得意の學科て裁縫手藝圖畵と來ては 話にもならない門外漢てす文の中て紀行文論文討論文が 最も好きてす故に私が雜誌を見るの 時劈頭第一目を付けるのが紀行文論文て次ぎに叙事文抒情文てす 新體詩や小說は面白いとは思ひません要するに 私は昔風のだら／＼した 文を讀むのは大きらいて今風のはき／＼した文が大好きてす 故に兄や姉からいつも男子のやうだと笑はれます。

雲の峯　南多摩郡　南島鏈子



○嵯峨野　仙臺　河原榮子

夕月落ちて鈴虫松虫の所々に啼き渡 る寂寥たる秋の夜に其趣向も同じ嵯峨の物語を 私は讀だ事があるのてすその時の感想と云つたらまるて嵯峨野の奥にても住居して居るやうな氣 が致しました。

○氣品を養ふ　佐賀縣　春夏　女史

私は高尙なる文學書が好きて私の家には多く之が集つて居ます殊に清新なものが趣味多く 教科書ては英文や漢文も面白いと思ひます月清 き秋の小窓に凉しき聲の虫と共に 私は毎夜讀書に耽けつて無上の樂みと 致します。佐々木先生の校註士佐日記等は私昔に歸へつた心地てした。 讀書を嗜々にするのは、 つまらぬ心配や、 いらぬ悪口をせない樣になつて心が氣高くなります。

○大學　横濱　しのぶ子

私は少さい時から二宮尊德先生のお話を聞くのを何よりの樂として居りました、 特に先生が少さな身をしながら山へ行にも御飯を炊くにも一册の大學を手にして 勉强された處がひどく氣に入つて如何かして自分も大學 を讀んて見たくてなりませんてした。 或る夏のこと本箱の虫干があつた時私は計らずも見出したので嬉しく思ひ大急ぎで開い て見ると一字も讀めないので全く失望してしまひました、 それから數年立つた今覺束なげ乍ら其を讀むやうになつた 自分は繙く每に當時を追想して思はず微笑むのであります。

○福岡縣　福岡縣　細川村雨

私しは女子文壇の始號からの愛讀者てすが、 每號何を一番に見るかといへば、 本の始めから終りまて福岡縣といふ三字を見出します、 して其の投稿者の文の善惡にかゝはらず必ず一讀致します、 一度も會つた事もなく、 名さへ知らなかつた人ても、 同縣人といへば戀しいよふな心が致して、 賞にても入つて居られる人があつたら本事に嬉しいてす。

○白菊の歌　關町　三輪葉津惠

故落合先生の「孝女白菊」程、妾の胸に印象を與

へた作はありませぬ。

「阿蘇の山里秋ふけて」と聲朗らかに教壇の上で講師が音讀せられたのが、しみ〴〵と思ひ出されます。

復習の時音讀すると、我知らず涙がこぼれます、そして亦何となく懐しい、嬉しい感慨がして幾何もなく暗誦しました。

○妹の讀みぶり　名古屋　西脇靜子

私の家で一週間に三日宛あつまつて讀書會をやります、其の時一番讀書のお上手なのが國子様その次ぎが常子様、そして其の中間入りをしたがるが妹の照子中間に入れて貰つて『文吉は親が有りません親の恩をわすれてはなりません……』と節面白く讀みますの私は其のたびに親の恩の有難いのを思ひます。

○雑感　川越　佐久間白菫女

私の好きな教科書は理科地理の二科です、理科中で植物鑛物の二科最も好き、地理では政治の組立、國民の性質、習慣産物等です、雑誌は男女の別なく種々愛讀して居りますが、何も男雑誌より女子雑誌の方が和歌には好いのが有る様ですが、俳句は男の方の作の方が好いのがあるかと思ひます、私は短文叙事文將論文などを好みます、只今まで澤山拜見いたしました、論說では安部磯雄先生の「理想の人」ほどよくわかる本はなかつたです、實によくてきて居ります、雑誌から得た好感は澤山でとても話つくせません私のために良師好友であるのです。

○歴史　南豊　藤の家瑠璃子

諸姉様あなた方は何書を讀むのが一番お好きですか、私は歴史書を繙き昔の有様を知るのが一番樂しくあります、神代の事から平家の盛な時、亡びたわけ、鎌倉の繁昌から北條氏の時に至るまで、承久の亂、皇室の衰微した事、地方の武士の有様、我が國の大事ともいふべき元寇の亂、建武中興南北朝の戰、室町盛世應仁の亂戰國時代、織田豐臣をへて、徳川に至るまでに如何なる事柄が有たか國運の盛衰時代の變遷を鑑みます。

○八犬傳　岐阜　波山薫子

私は小さい時から八犬傳が讀みたくて仕方がなかつたのです、そうして八犬傳！どんな本だらう小說であるとの話だが面白そうな本らしい、又大變大部な本であるとの事どうかして見たいものだ、まあこんな事を考へて居りましたがふと先日友だちから借りる事が出來て讀み始めました、さあ面白くて〳〵もう寢る事も忘れる程でしたが二三日前に漸く讀んでしまひました、さてかうして讀んでしまつて見ますと讀まない前に考へて居た事など思ひだして獨りをかしくなつて來ます。

○新古雑書　丹波　難波あいの

一寸讀んで感心したは八犬傳、經國美談、父上の愛讀なさつたのは太陽、都の花、日本人、元氣、文藝倶樂部、播磨の友等和裝の古いのは、千字文、太平記、論語、五輪書、國史略要、父上母上の教科書等、私が愛讀したのは幼年世界少年世界少女界少女世界で借りて讀んだのはムラサキ、日本の家庭、婦人世界、女學世界、少年界、少年、兒童教育、文章世界は一冊だけ。

○浪さん　芝　池田壽女

私は小說を讀みます内にも、一寸でも悲しい處がありますと、すぐ、涙が出ます、そして悲しい主人公の心を思ひますと、これが小說などゝ云ふ事は全く忘れて、例へばあの「不如歸」の内に浪さんが東京の實家から呼びよせられて、何にとも知らず我家について罪ない弟妹等の言葉扱ては次の間に並べられたたんす長持に、あゝ私は川島の家から去られたと思つた時の浪さんの心を思ひますと、涙は瀧の様にいつも手巾はびつしよりです。

○阿部野の露　岡山縣　守屋小萬龜

私れ歴史一等すきよ、あの吉野拾遺集阿部野の露なんかほんとにあはれよ、親房卿が顯家卿の阿部野の露と消えさせ給ひしを聞き「さきだちし心もよしやなか〳〵にうき世の事は思ひわすれて」と、ほむとに其時の父卿の心もおもひやられるわ、又母君は御ぐし下して山寺に住ませけるがある日阿部野を過させ給ひし時、こゝなん其の人の消えさせ給へる所と告げければ、草の上にだふれふし「なき人のかたみの野邊の草枕夢もむかしの袖の白露」とよみし心もなか〳〵ですわれ、私讀むたびに思はず一栞。

○不具な人間　和歌山縣　池見俊子

私は折ふし讀書によつて迚も人生で求めて得られないような興味を覺えることが御座います、若しも斯麼時にひるがへつて想を書物のない境に迎ばしめたら什麼でムいませう？又其無味乾燥も人生で辯められない位でせう、人一倍精神的に出來てゐる私共は如何して其寂寞を忍ぶことが出來ませうか私共は是なうて眞の愉快を認めない最後に讀書の樂を解せぬ人、それは謂に生涯オーシスに逢ふことの出來ない不具な人間だと斷言いたします。

抒情文

文學士沼波瓊音先生選評

三等

○てゝなし子

新潟縣佐渡郡小木町　塚原美代子

里さんはお小夜さんの子、お小夜さんは町内一の美人で踊も上手、歌も上手の藝子であつた。里さんは遺傳とやらか、四ッ足らずの頃から、片言まじりの流行節を歌つては、人を笑はして居る。「里さん母樣は」と聞くと、色の白い顏に、笑の波を作つて、鈴を張つた樣な目で、「母樣水のんで死だ」「父樣は」と聞くと、一寸不思議げに、「私父樣しらないわ」と平氣で答へるが常である、お小夜さんは里さんが三ッの秋、庭に泣く虫の聲も、細くとぎれとぎれにしんと更け行く頃、里さんに死水取らして歸らぬ人の數にはいつた。其れで「里さん母樣」ととへば、「水のんで死んだの」と答へるが、「父樣しらないわ」と、平氣で云ふのも道理、里さんの父と云ふのは、某汽船の機關士とやらで里さんが生れてからたえて消息がない。だから里さんの知らう筈がない、自分にはない物と思つて、少しも悲しまぬのも其れ故である。今は伯母樣に養はれて居る。聞けば行々は藝者にするつもり、との事である。「里さん何か踊りなさいな」「私厭や〳〵」とかむりを振る。「厭やなの里さん、菓子上げてよまあ、一寸御覽、と云と菓子に引かされて、立ち上がつて、ありやさ、こりややさ、と踊る「里さん誰に敎はつたの」「あのね他家の伯母樣に敎はつたのよ」「さう里さん藝子にならないの」「うつくしい衣きて……」罪ない里さんは何時も云ふ。美しい衣物、よい音のする三味線は、里さんの耳目に何とうつるであらう。今のみでは善も、惡も、美も醜も、罪ない里さんにはみな同一であらう、例へば花の如き里さんは、いたづらに、むだ花となつて、朽ちはせぬかと、妾はをり〳〵考へて庭を見て居る。

（評）哀れなりといはずして大に哀れなり、里さん躍如たり。

四等

○小説を讀みて

神田甲賀町内藤方　吉田たつ子

親の目を忍ぶといへばいづれ親の許さぬことをするからであらうそれならば矢張り不孝に

なるのだらうがさうださうだ不孝に違ひないそれじや妾も不孝して居るのだア、もうよさう決してすまい。今年の春非常にひどく目を病んでから夜は必ず本讀むなとあれ程仰しやつて居ながら何故そむいたらう其の罰は今朝が初めてゞはないが本統に今朝のひどいことまぶたははれてとても我慢が出來ない。オ、もう何時だらうオャ六時半!? 今に光やが起しに來るだらう其の時何と答へやうア、つらい……けれど自分が作つた罪だものどうすることも出來やしない本も敎科書のやうなのならよいけれど爲にもならない小說類それもいつもなら惜しい所をきりにしてやすむのに昨夜はもう直ぐ終りだとよくばつて彼の時計が二時うつ迄起きて居たのだもの……父樣や母樣に御挨拶する時御二人は何と仰つしやるだらう妾は此上罪を重ねなくつてはならないだらうかあから樣に云へばきつとお小言かくせば不孝ア、どちらにしたらよいだらう灯を暗くして置いたので見つからなかつたと昨夜は喜んだが今となつては恨みである何故暗くしたらうカン／＼つけて置いて誰かに見つかればよかつたのにア、今更云つても仕方はないそれはさうとてんな顏して居ればきつとどうなさつたえとやさしい御言だらう今朝は却つてそれがおそろしいア、何とお答へしたらよいのだらう妾はもう自分で自分が別りかねて身をもだえて居る一刹那、廊下に光やの足音がして、

お孃樣お目ざめでございますか、と妾はいよ／＼!!と思ふと心はあやしう亂れて返事も滿足には出來なかつた……もう決して致しませぬお許下さいませ、とお詫する時父樣母樣は不孝の子よ!!とおつしやるだらうと聞かぬうちから身をふるはした。

（評）小心なる所女らしくて宜し、殊に『見つかればよかつた』の邊愚に似て自然なり。

五等

○人間の力

麻布區霞町廿一　赤崎あい子

昨年までは、丁度夏時分になると、稻の靑葉を渡つて來る凉風に、まるで暑さを知らなかつた弁田甫も、見渡す限り新築の長屋が一つぱい建てられた、今は賑かな町に化してしまつた。蛙の鳴聲の代りには何やら、流行歌が聞え、螢の光りの代りには、まばゆい電氣燈が輝く。

あゝ是は皆人間の力!……自然を征して行く人間の力なのである。やがては自然といふものゝ存在を疑はしむる樣になるかも知れぬ。妾は何となく悲しくなつ

た。自づと涙が浮ぶのである。そして人間は之に向つて多大の勞力を費してゐると共に、又彼等は彼等自身で、烈しい生存競走を盛んに行つてるのである。思へば多忙の動物だ。自然と言ふ外敵を前にして恐しい友喰をやつてるのだ……猶よりも獅子よりも恐ろしきその友喰によつて、彼等は少しでも弱い者を見出す時は、直ちに之を、滅亡さしてしまはねば止まぬ。

妾も今此の友喰の中に加はらねばならぬ。老いたる母といふ重荷を脊負つて、此の生存競走の競走者となる身だ。あゝ弱い女の身で、よく打ち克つ事が出來やうか、否、妾は無理にも克たねばならぬ。それでないと、母と共に亡びる運命に立ち至るのである。と、いつて、學校出身の立派な男子までが、窮してる今、妾はよく生活の道を得る事が出來るかしら。

（評）辞田甫の景より徐に述懐に移る所面白し。

畫　友　　佐賀縣　春夏子



秀逸

○待つ人

丹波　難波愛能

今日は阿母樣がお不在なので、何と無く心細く未だ明るい中から雨戸を閉ぢて、爲る事もなく薄黑い部屋の内に坐つた。外には猶面白さうな兒供の聲が聞えてゐるが、茲は陰氣に夕べの幕がひし／＼と迫つて、わんわんと喚いて寄せ來る蚊の群が、一息一息多くなる。未だ御用が濟まないのだらうか。」私は思はず呟いた。いつもちやん／＼と、仕事を片付けなさるお母さんの事だから――それに今朝あれ程「早くから」と頼んで置いたのだから、いくら遲くとも、今頃は來て下さらぬ筈は無いんだが。おかしい。本統におかしい。一たいどうなすつたんだらう……あゝ若しかひよつとしたら、亦いつかの樣に、六さんがお酒に醉つて、無理を云つてるのじやないかしら。それだと私は今夜獨りで此麼、がらんつとした家に寢なく

つちやならない。どうしようかしら。餘り氣に掛るから、いつそ――と、立ち上りかけたが、さうすれば家は丸開け、猫の子一つ居らないんだもの。彼程阿母さんに、よくよくお留守居を頼まれておいてそれも出來ない。

折りから門を大聲上げて、

　内の阿母さんは意氣地なし。
　六十のお正月どこでした、
　一人の子にさへ不自由させ
それでもあなたは親だつか
　　トコトットー――

と、お酒機嫌の亂調子で、ラッパ節謠うて通るのはまぎれ無い六さんだ。あんな風なら六さんは家に歸る筈はないから、やつぱりお母さんはご用があるんだらう。それさへ濟めば屹度來て下さる。彼麼物がたい方だもの。――と安心して、淋しかつた思が消えると、今度は亦お母さんのお氣の毒なことが、順々と胸に湧いて、私は思はずほろりとした。

六さんは今年三十一。阿母さんから村一番のよく働く手を貰い乍ら、出來るお金は右から左へと、――福知山のある女郎屋とかへ持つて行つて歸つて來ると直にお酒で彼の通り、彼麼事を平氣で謠つて、手の付けやうも無い。

「才氣があるらしい」と、思つて無理に貰つた子の事ですから……――とお母さんはいつだつて、不平がましい事を仰つた事はないが、あゝ彼のお笑ひなさる時のお腹の内は什麼だらう。それで居て、子に喚かれ、叱られては、親の身が詫びて、なだめて、其擧句には、六十の腕で稼がれたおあしが、皆、お酒に成つて了ふ。

「酒にしようと思つて憤るんだが……」とは眞面目で居ての六さんの言葉……あゝ此麼事思つてる間に眞つ暗になつて了つた。どれ……早やう灯を付けませう……。

それにしてもお母さんはどうなすつたのかしら。

（評）小說に似たり。

○坊さま

徳島市　住友登喜子

私が浮世の苦も悲しみも忘れて、心から育つる坊樣、今年は可愛い三つ……。

お父樣やお母樣が情け深い方だけに、坊樣のお顏にも何ともいへないやさしい情がこもつてゐます……。目の涼しい眉の雄々しいところはお父樣にいきうつし、口元の愛らしいのは奥樣にそつくり……ほんとに可愛い坊樣です。

妾がお乳をさし上げますと、紅葉の樣な小さい手で乳房をなぶりながら、ふくやかな頰に笑みを見せて、妾の顏をみつめるのです、あまり可愛さにその櫻色の頰

に接吻しますと……大そう喜んで、聲を立てゝ笑ふのです……その聲の愛らしいことゝ云ひましたら……。

むつかる時は靜に寢させて、添乳しながら、美しい花をかざして見せますと、その香に醉うた樣に、無邪氣にすや／＼と眠るのです……その罪ない子の夢は、どんなに淸いでせう……と私も見ほれて、思はずその淸い夢路にさそはるゝことも度々です。

世の常の人の子なれば、寢醒の時は、泣きむつかるけれども、坊樣にかぎつて決してその樣な事はなく、御機嫌のよい事は、實に乳母の私も不思議に思ふのです……なぜ、かう迄可愛い坊樣でせう。

種々のおもちやをなぶつて、餘念なう遊んでゐる時でも、お母樣の聲をきくと耳を倚て、姿を見ますと、何もかも打ちやつて、可笑な程、あわてふためき這うて行くのです……小さい手の運び……もとらぬ足の運び、可愛げに……又危う思ひます……しかし疵などしないのは、妾にとつては此上もない喜びです。

私は昔の悲しい、苦しい儚ない半生の歷史をくりかへして泣かぬのも、全く此可愛い坊樣のお蔭で……私は坊樣を、惠みふかい神樣とも慕ひ、又、我子の樣に可愛うてならぬのです。

どうぞ、坊樣が、浮世のあらい波風に漂はされず、立派に成人なさる樣にと、朝夕神かけて祈つてゐます。

又、成人後は、どの樣に言ひ分のない立派なお人になりなさるだらうか……どうかして見たいものと、それを日毎に樂んで、妾の身の安全をも神樣に祈つてゐるのです。

あゝ可愛うて／＼ならぬのは坊樣です。

（評）溢るゝ如き愛。

◎鈴を拾ひぬ

長崎縣　溢江皎月

鈍色御衣つけて立たせ給ふ神將の如く、大鉾杉は屹として高く虛空を突けり。眞白羽の神鳩、梢に飛び交ひて、秋の社の淸らなるかな。我は今八千草の露に裾をぬらして、古殿への小道を進み行くなり。木立盡きぬ。正面に壯嚴なる拜殿は、折からの朝日をうけて、さながらの錦繪、あまりの神々しさに、つと馳せよらんとする刹那、足もとの草にちりゝと音ありて、まろび出しは錆あをき鈴なりけり。鈴の緒に願事こめて曳けん人のこゝろ／＼を語らまほしき鈴口や、そも幾年を拜殿の軒に鳴りしか、はた幾年を錆に眠りしや、音の寂び果てゝ、昔の美き聲を聞かむに由なし。さはれ鈴よ、昔の事は云はざれな、錆びて落ちて、遂に我手に入る、これも宿命にこそ。

（評）新體詩のやうな文。

○奥床しきもの　備前　廣江英甫女史

○幾間をか隔てゝ奥の間に、琴の音の聞ゆるや、其奏づる人の艶容花を欺く處女にもせよ、兩鬢霜を戴く老媼にもせよ、そは問はずもあれ。其音色の優しき恰かも、春の濱邊に漣寄するが如く、又は秋の千草に虫の咽ぶが如く、實に聞く者をして浮世を忘れしむ、奥床しき限りなり。

○夏の朝、秋の夕、吹き來る風に伴れて、奥の間に書讀む聲の聞ゆる、其聲の急なる時は古人の我が行ひを責むるが如く、其聲の緩かなる時は今人の妾が心を慰むるが如くに思はれて、床しとも床しきや。

○茶の間と言はず、書院と言はず、何處よりともなく吹き來る風に、名香の薫り鼻を撲ち、亦其間に行きて釜の湯の沸れる音、床に達磨の軸など掛りて、其下に隱逸なる花の菊などが投げ込みに挿されたるげに床しく、夜更けて遠く遙かに聞ゆる笛の聲、また床しからずや。

（評）讀書の聲の形容珍し。

○寂　紀伊　愛須すて子

周圍の土堤から刈萱が一面に掩ひかゝつた鎭守の森の古池に、氣味の惡るい樣な蒼黒い水が滿々と湛へて、その面へ一ぱいにはびこつた萍の葉に、木の間を洩る幾程の夕日がいくつとなく落ちて、其間に大の字形に手足を踏みのばした背の黒い蛙が、十も二十も氣拔のした樣に浮かんで、それをねらうて此方の土堤に生へた萱の穗を傳うて、首に黄色い輪の入つた小さな蛇がのたつて行く。

恰度其時、何處からか小さい蚊の樣な虫がぶん〳〵なきながら、水際近う飛んで來たので、ゆたかにおよいで居た大きな緋鯉が水を切つてはね上つた、すると其勢に驚いて一樣に浮いて居た蛙は、水底深う沈んで終うて、此方にそれをねらつて居た蛇は、茅の穗が其重みに堪へかねて輪の樣に曲つたので、其儘水の中へ眞逆倒！。

池の面へ影を落しながら白い小鳥が木の間の中へ飛んで行くと赤い蜻蛉が池の樋にとまつて、森々とした木立の間からは哀れつぽい聲で蜩が落ち行く夕日を悲しげに鳴く。

池の面は極めて寂!!!

（評）共進會的なるを瑕とす、されど筆に巧みあり。

○花響　藤浪の里　小浪子

尼住めばこそさも云ふめれ。村人はお寺と呼びなせど、粗末なる松の木造りの、ましてさゝやかに結ばれ

たれば、知らぬ人は大方世の常の農家にも數へ込むべき樣なり。庵主の居と云ふは、五六ばかりの年頃にて、品定めすべきならねど、美しくぞ見ゆる。親しく語らひしことあらねば、その素性知るべくもあらねど、八年程前より此の村に留まり住みて持戒堅固とぞ聞えし。庵主に一人の女兒ありて、こは八つばかりなり。いづれ由あらんと思へど、はしたなく問ふべきにあらず。そゞろありきにお寺のあたりに佇めば、彼の女兒は馴染の子守等と、なべての子等がすなるまゝ事して在りけるが、籬に殘りし朝顔の花しぼみたるを取りて、簪の心かや、さゝんと氣を揉めるらしき。庵主の折柄見えられけるが、我に目禮して急ぎ面を反け給へり。

（評）數多く書きて筆をならし給へ。

○妾の境遇

千葉縣　橘川松子

午後の五時!! 噫々私しは此の五時が何より樂しみなのです私しは京橋の某炭坑會社に通勤して居ります女子事務員なのであります去る三月始め當地に派出看護婦をして居ります姉を便りに胸に多大な希望を抱いて上京したのですが悲しい哉學費無く學淺き私しのながく希望通りの道に入る事が出來ませんので餘儀なく姉と相談の結果自炊いたしまして前申た會社へ入りまして夜學に通ふ樣に致しました昔は互に學びの道をいそしまんと誓ひし友の誰彼は各々志す學校に通つて居りますのに私し一人は此の樣な恥かしい境遇になつてしまひました然し此も皆運命とあきらめませう自分は自分の道に滿足して行けば又それだけ樂しみもありますもの會社が八時の出勤時刻退刻が午後の五時なのです、ですから每日此五時の時計を聞くのが一番嬉しいのですからいつも五時が打ちますともう／＼嬉しいので皆さんに挨拶もそこ／＼歸宅致しますの姉が家に居ります時は私の歸りを待ちわびて居て下さいます夕食がすむと仕度をして七時から八時まで夜學校へ行ます此の樣にして私しは日々少しの暇もなく過しては居りまするが又實に云ふに云はれぬ樂しさもあります私しも最初こそ自分程



そばや　芝　増田ひて子

薄命な者はあるまいと何事も悲觀しましたが只今の私しは此の樣な事に煩悶などしませんの到底出來無い事を苦しむより今の境遇に滿足してたとひおそくとも學の道をたどつて行つたなら成功しない事もありますまいと私しは何時もさう思ひますの。

（評）斯く思ひ得られしは幸なるかな。

○白萩　　岡山縣　菫子

秋の夜ながの、つれづれなるまゝに、宿立ち出てゝ庭のあたりをさまよへば、雁行一列北よりとび明月中空に輝けり。あれたる庭いたづらに、秋深うして、千草にすだく虫の音も何となう、物淋しう聞え、やつれはてし、垣根の白萩いとあはれに、咲きみだれぬ。妾はあまりの愛らしさにそがかたはらにたゞずみぬ。

嗚呼、おもへば、早や三年の昔し、いかに、浮世の、運命とは、云ひながら、つれなき風にさそはれて、散り果て、給ひし、久子の君の、いたく愛で給ひし、萩にこそあれ。

その、昔にかはらぬ、なよやかなる姿に、咲きにほへるぞ、なかなかに涙の種ぞかし。

折しも遠寺の鐘かすかにひゞきわたりて月は益々冴えぬ。嗚呼久子の君この世にいまししゝ頃は共に手とりかはし喜憂交々わかち露ふかき野路を踏みわけつゝ招く尾花にすがる萩あな面白の秋野の樣やと愛でにし昔はいつの夢いまはいづこにさまよひ給ふらんあはれげに我が忘れがたみとするは此萩にこそ、扨ても果敢なの浮世や夢か現かまぼろしか君が姿は目のあたりにさまよひて偲ぶに得堪へてすゞろ涙に衣をぬらしぬ。虫の音止みて月影うすしあはれ雲にさへぎられしかおつる涙にくもりしか。

○葡萄棚　　名古屋　志水白魚

東雲の明方に雨と成つて、庭に墜ち散らばつた、梁葉の大葉は、舟の如くに簷滴の潴水を推し流すに泛び去る梧桐の婆娑たる音、芭蕉の戰ぐ影綠に簾を染める朝、幻ながらに雨を聽くも幻の間で、疾や、一天拭くが如く――。

晃々たる新旭は、世界の凡べての不淨を洗ひ盡くせる大雨の綠滴る、庭の茂りの樹の葉を、斜に射つて、綠も光り、紺も光り、萠黄も光り、紅の葵、紫の杜若、金盞花、鳳仙花、皆、光々として居る。旭は靜々と昇つて、其の金銀の光線を矢にして扶桑の弓を滿圓に張り詰め、偖て、我が庭の葡萄棚の、竿と繩とに滴る大小幾拾の露をば、射り始めた。射られた露は墜ちて消える。新しい露は代つて滴る。こゝに落ちてかしこに滴る。金の矢で射られたは、金の球と成つて地に落ちる。銀の矢をもて貫かれたは、銀の球と成つて墜ち消える。五色の球は、五色の矢に射られたか。珠玉の球、

瑠璃の球、瑪瑙の球、七寶の球、水精の球、珊瑚の球、あらゆる寶玉の光は、一架の葡萄棚の竿と縄とから、垂れ滴る。此の如き美しい光りは、如何なる寶玉とても、放ち得ぬのであらう。神の光は、却て、此の如きを見るのである。且つ葡萄の花も蔓も、皆、此の寶玉を、千顆萬顆、惜げもなく光の矢に射られて、其の儘我が庭に落さしめた。

* * * * *

風なき靜かなる朝の、我が家の華嚴は、神の賜によつて、浮世に再び見る事の出來ない寶玉の光を以て飾られた。私此に對して、始めて自然の美、人工の寶玉と倶に比すべくもあらざるを悟つた。

○俊さんのお墓

藤浪の里　小浪子

墓！墓と云ふ言葉を聴く時、妾は何とも云へぬ寂しさと、恐ろしさとを覺えぬ事はありませぬ。あゝ妾の好きな好きな、俊さんは何ぜ此のお墓の下へ入つたのでせう。あゝ何故俊さんは死んだでせう、あんなに丈夫相に肥えて居たのに、なぜ死んだでせう。妾は俊さんよりは躰は強いとは云へませんでしたのに、未だ生きて居ます。俊さん、なぜあの恐ろしいお墓の下へ行たんでせう、人は夢の様なと云ふ事をよく申します。まことに夢より果敢ない者はありますまい。俊さんが、あの丈夫な俊さんが、唯の三日、病の名も祿々判からぬ内に、ころりと死くなつたとは、ほんとに夢としか思はれません。此頃では俊さんの亡くなつた事が眞實であると思つて居ますけれど、その當時、お月樣のよく冴へた晩など、直ぐ向の家には、俊さんが居る樣に思はれてなりませんで、呼んだなら、あの聲で、よく耳に殘つて居ます美くしい明晰した聲で、答へる樣に思はれてなりませんでした。俊さんは死んで居ますもの、呼で見たとて…。人の寢沈まつた靜かな夜などは、竊つと起き出て、不意と胸に浮かんで來るのは俊さん、呼んで見たらと思つて、聲が喉をかすれて出た事もあります。人が聞いたなら氣狂じみた擧動、本氣の沙汰とは思はれますまい。あゝ俊さんは到底も此の世の人ではありません。亡くなつた日から、早や一年程經ちます。一年經とうが、五年たとうが、俊さんは矢張り妾の仲好しのお友達であります。お友達、あゝ俊さん!!。この心持は妾を俊さんのお墓へ度々誘ひます。妾は月に一度、俊さんのお墓へ參らぬ事はありませせぬ。いゝえ一度と云ふ限りはありませぬが、面白い事、悲しい事、何につけ彼につけ俊さんのお墓へ參つてお噺を致します。



陰陽師　芝白非こな子

俊さんの返事はありませぬが、必ず俊さんは、仲よしのお友達、妾の噺をよく聽いて居る樣に思はれます。今日は俊さんのお墓へ、今年の早栗を山で拾つて歸りましたから、御馳走しやうと持つて參りました。石碑の前へ參りますと、あゝ前に進ぜてあつた桔梗の花が、未だ色はあせても形が殘つて居ます。奇麗に掃除をしてありましたお墓の傍は、一面落葉が散り敷いてあります。供へてあつた菓子の二つ三つが殘つて居るのは、大方鳥が喰つてしまつたのでしやう。

妾は墓と云ふ言葉を聞くさへ、何んだか嫌てあります、恐ろしいのでありますが、唯だ俊さんのお墓へ參るだけは、一人でも淋しくも恐ろしくもありませぬ、いゝえ却つて戀しい樣な、なつかしい樣な氣がします。お墓の前へ蹲踞まりまして、私は矢張り生きた人に向つた樣、決して合掌などして拜むのではありませぬ而して唯だ心の中で噺して居る積りでは、氣がたりないのでありますから、餘り大さくない聲で致します。そして折々、ひよいと四邊を振り返つて見まする。誰か？そつと聞いて居はしまいかと思ひますので、こんな噺は俊さんの外、他の者には妙に聞かれたくないのであります。お噺がやがて濟みましたら、靜かに立ち上つて、妾は俊さんへ倚り懸りました、いゝえ俊さんの石碑てあります。妾は俊さんの生きて居る内に縺れ合つて居る樣てあります。あゝ此の冷たい事、秋も暮れ、寒い筈です。山の中に滅多にお日樣の光を受けない處ですもの、妾は腋の下から、双腕の痺れる樣に感じました。こんな時、つひ起つてならぬのは、何故あの俊さんが恁麼冷たい石になつたかと云ふ事、霎時妾は目を閉じて耳を澄ませました。あゝ此の境の寂びしくも靜かであります事。お墓の脇で、虫の音がしまする、この儘で十分間もじつとして居るのであります。折々こぼれ落ちる木の葉の音が、實にさびた音で、ばさり、がさ／＼聞えます。あゝもう今日はこれでお別れにして歸りませう。倚りかゝつて居た躰を起して、觸つて見まするると、溫味を持つて居ります。妾の血の溫味が傳つたのでしやう。俊さんは、こんな時にこそ屹度々々妾の心持ちを感じてくれるだろうと思ひます。妾は出來るだけ冷たくならない樣にと心に祈つて、再び石碑を撫でました。未だ溫味があります。あゝ一思ひに歸りましやう。左樣なら。また俊さん!!

俳句
嚴谷小波先生選評

二等

白萩の庭に風呂あり宵の月　東京府下西多摩郡福生村　森田なか子

（評）寂みありて而も優しき句なり、誦返して飽かず。

三等

瓜のつる引けば虫とぶ月夜かな　備中國上房郡高梁町字石火矢町　菅森定子

（評）俳味詩味共に深し。

四等

涼しさや船を數ふる丘の人　大阪市　辻廣子

（評）大なる句、心地好き句。

五等

朱印船印度に着くや雲の峯　岐阜縣山縣郡葛原村百瀬　大西英子

（評）豪壯。

秀逸

海峡をめぐる小船や雲の峯　北總　酒井花袖子

戀ならで戀歌かきし扇かな　茨城縣　酒葉つね子

行き過ぎて君顧る日傘かな　北總　勇子女

大いなる月生れけり芒原　八王子町　大野ふさ子

藻の花に鯉はね上る月夜かな　駿河　松永ふみ子

木ある方へ道のかたよる夏野かな　岡山縣　森　子

名月や田守野守の俳句會　磐城　鈴木勝子

初雷や爼上の魚はねかへる　長崎市　山口春聲子

越の地に呉人水乞ふ旱りかな　横濱　阿久澤雨村

懸崖や高さを覗く百合の花　上毛　關口初子

石龜の重なる堀や紅葉散る　紀伊　榎本龍子

功成りて身を焼かれたる案山子かな　常陸　矢口みつ子

月明り大竹藪をくゞりけり　神戸市　船戸ゆき子

狂女笑む月に淋しき尾花かな　徳島市　住友登喜子

朝月や竹の皮散るさゝ流れ　千葉縣　酒井はな子

朝の鐘萩の雫をこぼしけり　常陸　川並はな子

萩咲くや鄙の茶屋にも京の客　美濃　宇野文子

蟲干や五車の反古を古机　福岡　朝疊り女

佳き人の小さき扇や風薫る　伊賀　山村野菊子

沛然と鐵橋よぎる夕立かな　美濃　碓井房枝

小鼓の稽古戻りや朧月　深川　野村としを

雨祈る社に蟬の時雨哉　栃木縣　青木たか子

順禮に淸水問はるゝ坂路哉　大分　豐後海子

蚊の出づる西片町の下宿哉　尾張　長司哲子

四百年蟬鳴く松の殘りけり　丹後　高柴花袖女

田植ころ欠員多き役場かな　美濃　傍島みゆき

菊薫る閨を星屑こぼれけり　霞湖畔　白菊女史

蚊遣火の側に夕餉の夫婦かな　美濃　白井宮子

せみなくや三百年の大欅　青森縣　木村春子

山深く斧のひゞきや閑古鳥　越後　松山けん子

拜殿に杖忘れけり蟬時雨　名古屋　志賀世俊文子
天の河をかり十文字に渡りけり　三河　近田みつ子
雨蛙宵より雨となりにけり　美濃　みどり子
閑の花よき硯並ぶる白書院　越後　藤原花子
夕立や霽れて道者の高笑ひ　小石川　未成女史
緑葉の一つゆるがぬ暑さかな　丹後　高橋豐子
瀧に下る行者が眉や風薫る　中野町　小川鱗子
夕顔や疲れて戻る牛一つ　下谷　橋本波子
紙燭して軍書閲すやほとゝぎす　北總　錦江女史
乳吞子のひとり這ひ出るひるねかな　下總　市原はる子
船頭は裸に笠や雲の峰　上總　遠川さと子
白蓮や名香薫る大廣間　德島縣　中川伴鷗
草刈の蛇打殺す夏野かな　土佐　中山その子
薄月や瓜ぬすむ人の頰冠り　八王子　大野ふさ子
蟲の音に琵琶の悲曲の崩れけり　大坂　石原かよ子
瀧茶屋のしぶきにおろす簾かな　紀伊　貞操嬉女
夏の月雀吹く人をなつかしむ　石見　石橋浪子
洛から舟人招く團扇哉　山口縣　與附村　かづ子
青嵐富士も筑波も吹かれけり　高岡市　久野多歌美
武藏野や横に流るゝ天の川　山形　幸子
船竿の雫散るなり夏の月　紀伊　室井白薺
押せばあく柴折戸叩く水雞哉　石見　靜子
道嵯峨に入れば小萩の多きかな　大坂　四田くに枝
蚤に子に起されて夜の明けやすき　熊本市　石坂せつ
瀧壺に硯を洗ふ法師哉　南總　原たき子
蚊柱のくづれて月の上りけり　岐阜縣　桂蓮女史
湯上りの庭下駄輕き納凉かな　常陸　酒葉花舟女
ねむたさに鬼灯ならす女かな　新潟縣　藤原みよ子
故ありて刈らぬ草なり蟲の聲　千葉　植美
稻妻や比叡の腹に跡として　神戸市　井崎なを子
車井の音から／＼と朝寒し　新潟縣　高梨しづはる

檜笠白衣の人や夏木立　下野　栗原くに子
長き夜の背戸は梨吹く嵐かな　越前　殿水女史
獨り寢の枕に近し蟲の聲　岡山縣　近藤文子
箱庭のお山流しぬ夜の雨　大坂　俵文子
炎天や田へ引く音の水車　豐後　君子
十六の妓女侍んべるや夏の月　美濃　みどり子
浮彫の天女も舞ふや風薫る　津市　川村なほ子
下京や紅屋の軒の青簾　秋田縣　三浦紅葉
夕立や蓑の中なる渡舟　福井縣　野田ちの子
行水に釣瓶重たき病後かな　長崎市　葉蘭女史
夕顔や宿れる蟲にやどる月　神田　玉川雅子
打水や月東山を出てんとす　上總　山田沖子
秋の川人の居ぬ船流れけり　下總　岩井しろこ
さら／＼と淸水に松の古葉散　下總　山崎鐵子
蜻蛉や網干す浦の夕榮す　三保子
中仙道松に蚊遣の伏屋かな　岐阜縣　大西英子
凉しさや海をうづめて家の立つ　三重縣　森永露子
夕顔や華燭の宵の遲々として　大阪　石原かよ子
丸窓を月さし込むや青疊　宮城縣　蟬子女
蹁躚て蕣の花ゆらぐ夕かな　秋田縣　佐々木園子
短夜をくゞり閉けたる小家かな　豐前　花のや
小さい兒の握る手を遁ふ螢哉　龍野　敬子
蓮の風絽蚊帳涼しく香りけり　和歌山　坂口久子
笛のきほひ見せけり宵の雨　高崎市　湯淺せん子
蓮咲いて曉の雲流れけり　磐城　まつ子
夕顔や簾に端居の琴の主　京都府　安田千代
夕顔や女主人の柴折戸　信濃　山浦みどり子
夏の川雲間の月を渡りけり　京都市　北田紫翠
夕顔やおとのふ君の眉やさし　水戸市　島田君子
ラムネ賣る峠の茶屋や若楓　高知市　高橋龜齡子
蛙なく小田をよこぎる夜汽車かな　駿河　淸水露紅子

書簡文

文學士沼波瓊音先生選評

四等

○途中より兄樣へ

豐後姫島燈臺官舍二號內　鈴木さち子

午後五時頃無事に着きました。御安心下さい。豫定の見物は氣がすゝまぬ故よして明日直ぐこんどは汽車で往く積りです。

さて兄さん。妾は今日の船中で。端りなく二度と會ふまいと思つて居た方に他所ながら御目にかゝり、胸が一杯でまだ湯にも入らず食事もしませんの。

船が岩國に着く前でした。何處からか「好い凪！」と云ふ若い低い聲が妾の耳に霹靂のやうに響いたので。慌だしく見廻はしますと四五間先の上等室の甲板に……忘れもせぬ五年前まで何時も夕刻一緒に濱へ出ては。よく斯う仰有つた、懷かしいやうな恨めしい。其時の聲其儘……丸髷に結つた澄子樣が。海の彼方を眺めて立つて入らつしやるぢやありませんか。妾甚麼に意外でしたらう。そして妙な厭アな氣がして身がすくむやうでしたの。其處へ洋服と切髪と。御良人と姑樣でせうお出たのを振向く途端。澄子樣の視線と妾の視線とがハタと逢うて。彼方で啞アと驚くとき妾は眼を他に反らして。素知らぬ態しましたが——でも何故か他の乘客のさゞめきよりも見ぬ彼方の模樣がありありと妾の腦裡に映るのです。何事かは知らず澄子樣をお兩人が誘つたり譴つたりして居る樣子でしたが。突然「復た始めたか」と低いけれど強い聲に。思はず其方を見ますと澄子樣が。多分泣いてゞせう俯向して入らつしやるんです。白狀しますが此時妾は何となく小氣味の好いやうな心地で暫く見てゐましたら。他の氣はいを覗ふやう密つと上げた澄子樣の潤んだ眼と妾の眼とが再び相逢うて。お辭儀する如に詫ぶる如に。澄子樣の又項垂れなさる時。妾は急いで其處を立去りました。

怨は多き澄子樣——飽まで知らぬ人の態で過ごし。やがて下船の際。もう見まいと思ひながらつひ艀から見上げますと。直ぐ上の甲板に。手欄に凭れて澄子樣が絹布もて涙を抑へ

て入らつしやるのです。不圖其手に美しい寶石入のそれと並んで。色の褪せた妙な配合の指輪を認めた時。ア、其時!! 妾は何とも云ひ知らぬ懐かしさと悲しさとを覺えて。涙が俄かに。込上げて——兄さん。あなたも御記憶でせう。澄子樣の處でお引越しになる前月。三人で鎭守の祭りに出掛けて。兄さんが何處よりか金色した指輪を一個購めて來て眞物だと云うて澄子樣に遣り。四五日して其が露現して。澄子樣が唯笑つて妾が兄さんへさん〴〵不足云うたことがありましたのを——それです。其指輪を今に澄子樣が嵌めて入らつしやるのですもの……隣同志の朝夕往き來しては姉さん姉さんと云つた其頃の坐ろ懐かしくて。妾は思切つて牀の上から『姉さん!』と呼んで見やうとしましたが——其まゝお別れして仕まひました——。

兄さん。妾はもう〳〵おうらみ申しますまい。澄子樣は甚麼につらい日を送つて入らつしやるのでせう。兄さんもお可哀相と思つてやつて下さいませんか。ア、お傷はしい。おやつれなすつた丸髷姿が未だ眼に殘つて居ます。

床の白百合の花香も無う頽れてほとゝぎすの一聲高く。朧の夜が更けても宮島の夏の。妾には苦しう感ぜられてなりませぬ。

(評) よく書いてあれど少し書簡文らしく書かれたし、これではたゞの叙事なり。

秀逸

○避暑地より友へ

小石川　近藤愛香

都の暑さを此地に避け候ひしより夢の二十日は音もなく過ぎ去り申候、朝夕海水に入りて鍛へ候ふ身の日にやけて鐵より黑くなり申し候ひしは、天晴海國女子の面影ありと昨日はこの姿を寫眞にとり候ひぬ、潮と戰ひて千里も一里と泳ぎ候ふことテニスの競技とは事かはりて恐ろしくも勇ましく疾風に向ひて櫓をあやつる我腕には黑金の條入れるかとばかり、われながら末頼もしう覺え申し候、月明き夕磯の香よする眞砂路に波を追ひ波に追はれて月影くだく面白さ、かゝる夜は都のことゞもひしと胸に迫りて脆くも落す涙の雫に、沖遠く聞ゆる舟唄や耳近き濤聲など一しほ、哀れに覺え候、何一つ送り參らすものもなき土地ながら、さすが海の物は絕ゆるといふことなく生魚も貝類も最早食べあきて候、都よりも何か賴りあらばとそれのみ待たれ候ふ程に、昨日は兄君裏の山にて初茸あまた得させ候今朝は汁の實に秋茄子の味ありと思はれ候、哀れ驚か

れぬる秋風の音にて候ふ哉。のこるは早や五日、芙蓉の花の咲く頃を都にかへるしるべともなし給へ。あなかしこ。

（評）男ましき中に女らしきやさしさも交りて宜し。

○不在中尋ねこし友に

京都市　松風女史

麻布　赤崎あい子

平常よく他出を好まざる身の昨日はやむを得ざる要用出來候ため一寸親類へ參り居候不在中に折惡しくも御遠路わざ〳〵御尋下され候由歸宅後承りまことに殘念に存候此方よりこそ一度みけしか伺ひまつるべき筈なるにつひ〳〵其日其日の用に取まぎれさりとて文參らさむいとまのなきにも候はねど例の筆不性ものとて心に懸りながら御遠々しく打過ぎまことに御恥しう存候何卒廣き御心に御許給はり度候また其節には何よりも結構なる御短冊いと澤山に御惠與下され有難くあつく御禮申上候御丹精をこめさせられし事とていづれにまさり劣りは御座なく候へどもことに時節柄にや瀧の畫など拜見致し候へばいと涼しく夏を忘るゝ心地致候今更ならねどあなた樣の萬づに發明なるにはほと〳〵感じ入候まことに凡人にてはおはせずなどやかたども御うはさ致居候こなた人並に年計り重ね候も何一つ出來侍らずまことに御恥しう存候只今東京の親人より女學生日記送りおこせ候まゝ一冊持たせさし上候また此露ざし不出來にて御恥しうはさふらへども御目にかけ參らせ候まゝ御常用にもなし下さらばいとうれしかるべく候いづれ近きにまかりいて萬づ御禮申上べく候先日來承り候講義錄四五六と持たせさし上候間ゆる〳〵と御覽下され度先は取あへず御挨拶までにと走り書してかしこ。



（評）さら〳〵として。

○都の友へ

越後　河島しか子

軒の玉水音絶えて螢飛ばずなりてより俄に暑さ堪へがたく相成候處御かはりもなくいらせられ候哉過ぎし春の頃歸郷の際も是非一度御目にかゝり度存じながら失禮いたし其後も申遲れて今日迄疎ましう過ぐしつる罪何卒御ゆるし下され度候山の翠露の花園夏の天地のいづれか爽ならざるなき中にも蓮にやどる露白き朝漣にゆらめく藻

の花ほのかに月明けき夕などは殊に捨てがたく覺え候はずや此頃の玉什何か御洩らし被下度願上候。去年は瀰波ヶ湉の晴漣に吟じ給ひし君この夏は何處に吟杖を曳き給ふらむゆかしう偲ばれ申候病める我身は心弱くて朝顔の萎みやすく消えゆく露の脆きにもうち泣かれ申候愚かしき身の愚かしき病ひ持てるを憐み給はれ君海の景色を好み給はずや岩に碎くる荒波の亂れて霧の如く散り島陰に隱見する眞帆片帆の海鳥と紛ふもおもしろく仁王の如き海人の姿もまたおかしきものに御座候かしこ。

（評）弱々しき所に趣あり。

○出先の母様に

駿河　香浦道江

阿母樣、雪子さんの御婚禮は滯りなくおすみに成たてせう、此手紙の着く時分はまだ何やかや、ごた〳〵して居ませう、とは思ひますが、何分にも困るのは吉ちやんてす、餘念もなく遊んて居ても、直に思出して阿母さん〳〵と泣出します、平生氣に入の爺やもすつかり嫌はれて了ひましたの、始めの中は私がおぶつて停車塲まで出て行つて、汽車へ乘つて來るからつて、欺してましたが、其も最早覺えられて了ひました。平常困つたなぞと被仰つた事のない阿父樣も、奈何も吉坊には困るのうと顋を撫てゝ被居います。細かい用が有ますかも知れませんが、又出直すとして早く歸つて下さい。もし伯母さんが止めましたら、逃げて被入い、眞實にお願です、さよなら。

（評）實況。

○菊の花を乞ふ文

四谷　さくら子

今日しも兄の命日にて候へば、生前好みつる白菊の花など手向けて、心ばかりの弔らひ事いたし度と存じ候て、裏庭をあさり申候ところ、御存じの如く、私春よりのいたつきに、誰とて培かふ者もなく、去年の秋花咲き候まゝに、打すておき候故か、白の大輪などは、みるよしもなくて、わづかに黄なる小さきが、まがりくねりたる枝に、二つ三つ咲き出でたるばかりにて外にはこれぞといふ花もなく、市に遠き田舍住ひの不自由さ、身にしみてほと〳〵困じ果候、ついては、近頃まことにぶしつけなる御ねがひながら、おん花壇の白菊、なき兄の爲に、一枝御手折り下さるまじくや、御きゝとゞけ下さらば、亡き人もさこそはよろこび申さんと存じ候。かしこ

（評）菊の如き文。

○妙子樣に

但馬　すみれ子

花染衣ぬぎ更へし、初袷の袖の輕さも、いつしかに時鳥待るゝ初夏の候と相成りました。

暫らく御伺ひも致しませんが其後は如何お暮らし遊ばしてか……。

昨夏お別れ致してから此方、東の空がこひしうて、一度でいゝから、御一處に學舍に通ひ度と思ふたり。夕方門に立つて、いつも變らぬ明星の影を、胸にうつして、知らず〳〵涙が、頬に流れる事が有ますが、毎日賃機に追れる果敢ない身の上で、機械の樣に忙しく動いて居るので考へる暇も想ふ間も有ません。

其も馴れまして、今では一日二反の木綿が、樂に織れる樣に成ました、けれども、幸福な妙さんの御身の上を、羨ましいと思ふ時も有ますが、東都の空で、父の無い弟が憐れな姿して、學舍に居るのを思ひ浮べますと、只彼が身を思ふて、苦しい、馴れない、機織りも辛いとは思ひません、半て絶たれた自分の望も、決して口惜しいとも思ひません。

今日は餘り、梭が落ちたので、若しや妙樣か、弟かの上に變つた事でも有はせぬかと、夜業仕舞つて急ぎねむい眼をこすりながら、お二人にお伺ひをと、是だけ書きました。

[illegible] 神戸市 若松芳子

（評）末段情深し。



○東京の姉に　山城 白梅子

姉樣其後は誠に御無沙汰しました御變もありませんか英雄さんはさぞ可愛らしくおなりでせうね、宅にもみんな達者です、此頃のあつさはどうです、私なんか一日中汗をふくのが仕事よ、中兄さんは一昨日かへられました今度は御土産があつてよ珍らしいでせう、兄さんてば憎らしいのよ、きのふもね突然私の部屋へ自分の机を持つて入らつしやるのよ、どうなさるのでたづねたらね、私の部屋と換て貰ふのだつて、私いやよつていつたらね、かう仰言るのよ「おまへは年中宅にゐるけれども私はいつも學校で腦をつかつてそして休暇には靜養しにかへつてくるのだから涼しい部屋でないと腦がやしなへない」つて、そしてね否應云はせずに自分で机や本箱をみなあちらへ運でしまひなさるのですもの、仕樣がありやしないわ…　兄さんの室つたら一番あつい處でせ

う私ほんとに醱酵作用で麴になりさうよ、先日久々で美根子樣がいらしつてよおひるすぎから日のくれるまでいろ／＼おもしろいおはなしがありました、それから姉樣のお噂も出ました、丁度其時よ、美根子樣のおかへりになつたあとで、もうちよいとで出來上るから仕上て仕舞はうと思つて私の間へ入つたのそしたらどうです机の前には光ちやんが座つて人の手間を入れてこしらへかけた肱付をブツ／＼と皆といてしまつてもう形もないやうになつてゐるのですものそして折角苦心していれたミットは、そこら中にまきちらしてあるのですもの私腹が立つて／＼、しかもね一番大切にしてあつた、それいつか姉樣に送つて頂いたでせう、あの小豆色の絹糸ね、あれでしたの、もう編みなほす勇氣も出やしなくてよ…あの姉樣この封書はね美根子樣が序に送つてくれて仰言つたの自分で送る筈ですけれどお處が分らないからつて、まあ姉樣だとおもつて下らぬことをむやみに亂筆で書きちらして許して下さいよ、憚ながら兄さんによろしく仰言て下さい末ながら時候御いとひ遊ばせ、さよなら。

（評）情ある人。

○東京の兄に　麴町　淺井千鳥子

兄上樣！此頃のあつさ如何に凌がせ給ふにや砂埃多き都と承り居り候程に眞夏の暑さお察し申上候。田舍の桃の赤くなる時節には歸宅すると仰せられ候が、最早鳥が目付候て困る位眞赤に熟し候いつぞや兄上樣と拵らへ候ひし鳥おどしを用ひ候ところ中々鳥も此頃は學問を致したのか悧巧にて効目うすく相成申候。又折々月夜の晩などには鳥ならぬ人間の盜人參り候て實に厭になり候、例の村の六助にて大笊を持つて居るには驚き入申候、義姉上樣も非常な御待ち兼にて候まゝ桃の鈴成りのうちにお歸省遊され度偏に御願申上候、

草々。

（評）勸める意味をも少し書かれたし。

○職工の兄樣に　丹後　賤の子

今日此頃のむしあつさ、私等でもたへがたい程でございますのに、兄樣は厚い重い小倉服を着て朝から晩まで工場に働らいてお出でなさる、さぞおつらい事だらうと母樣共々お噂して居ます。

お母樣は兄樣の御手紙が來る度に、あゝ昜はよく働いておくれだまだ十八といへば生意氣ざかり、職工などになつて肩身がせまいであらう、お父樣がもすこし生きてお出でなら、無理をしてゞも中等敎育を仕込んでやるのに、この妾が腑甲斐ないばつかりで人並のこともできませんと口癖のやうに云はれます。しかし兄樣は下宿の二階で夜いつも熱心に勉强なさるでせう、なまじ親達から學資を貰つて遊んでばかり居る學生よりか、二十倍も三十倍もよく勉強が出來ますわねえ。

兄様此頃脚氣は起りは致しませんか、家内中皆弱いものばかりて兄様を杖柱とも頼んて居るのてすから、身體を充分御大切に、悪い友達に誘れてつまらぬ遊びをなさらぬやう、組長や伍長にいじめられて死にたい程つらい事がありませうとも、やけを起して下さいますな、そんな時には五十里はなれた西の國の母妹にお手紙下さいませ、二人て兄様のみ胸の内をお察しゝて、共に憂を分ちませう、おなれなさらない下宿屋暮しの其上に、知人とては一人もない土地、兄様淋しうございませう、けれども遠くはなれた此家から母子のものゝ魂は、あなたの影身にそうて守つて居ます。決して淋しいことはございませぬ、御安心遊ばせ兄様。

今宵はよい月夜でございます、さやかな光りをあびて立つ山の彼方の兄様のことが、何となう偲ばれてなつかしさのあまり思ひのまゝをかきました、さらば兄様。



新作　豊橋　加藤よし子

○入營中の兄に　京都　堤　登久子

酷暑堪へ難き昨日の日中、私事止み難き用事にて寺門通を通行の際勇ましきラッパの音に足なみ美う揃へ手には重げなる鐵砲捧げ外套の巻きたる背嚢を負ひ給ひて瀧と流るゝ汗を拭くよしもなく歩み來ます一隊の兵士に出會致し候、若しも御兄上様も在せずやと暫しイみて眺め居り候ひしが御姿は見當らず候ひし哀れ私の如き薄き着物に傘さして陸歩む身さへ斯くも暑苦しきに、日の照る中を姿正して進行します御方々如何に御切なき事にて在し候はん、よしや御國の爲めの御修業とは申し候へよくも御身の續き行く者よと、私等の身に引き競べて餘りの勿躰なさに汗ならぬハンカチを泪に絞り申候。

嘸な御兄上にも斯かる御旅行は度度在す事と存じ候、御身も人並勝れし御丈夫の御身とは申されじと存じ申候何卒々々御身御大切に遊ばされ度只今母上様に右の次第を物語り候へば、呉々も身を厭ふ様にと申され候、身の健康は護國の基にて候ふとや申し候、一昨日の日曜は御歸宅の今か〳〵と遂に一日を待ち暮候ひしが御歸りもなく候へば一同若しや御身に恙などのあらずやと心配致し居り候、何卒次の日曜には是非御歸宅遊ばされ度皆々待ち居り候へば、かしこ。

○東都の高師にある友へ

あけぼの

加賀

都の御樣子いかに、此方平和なる田舍には夕散歩の畔のかたはら早麥は黄ばみ候。ましてくれすぐる頃よりかのやさしき螢の三つ四つとび交ふ樣のいかに樂しく候よ。こは到底都人の夢想だも及ばざる處と存ぜられ候。憶へば去年の夏は共に手を握り小舞子にと海水浴試み、あやうき事も候ひしか、しかも今年の今は君は都の學び舍に己は田舍に愛らしき幼兒らに師とあふがれんとは、さあれ君は實に幸深く在し候されど妾は君を羨ましとは存じ申さず候、負け惜みと笑ひ給ふまじ、ゆるさせたまへ。いかに申さんか、君の如きは前途の光明いまだ永遠につきずことし三月までなれし寄宿生活を四月より又樂しく續け給ひて好み給ふ繪畫に筆走らせらるゝ向上心ある靑春の人々には實に羨望のきはみに候。されど妾も又幸多き者に候はずや、君と共に三月なつかしき母校を出てゝ此平和なる田舍に參り候ふてより早四ヶ月、其間何等斯道に爲せし事なきも、只無心神の如き、やさし花の如き愛らしの幼兒らに朝校門まで待ち遠しと出迎はれ、かへるさには明日また逢ふを樂みてふりかへりゆく愛の化身らと、何思ふ事なく嬉々としてすごす事の愉快さ、こも又到底君の如き高尙なる校に在す人々の想ひもつかざる事と存じ候。されば夕業終へて家にかへりやさしき宿の人々が心盡しの食一としほ味よく、いぬれば夢に稚兒と遊ぶ。人生如何に樂しき事よ、妾は樂とより外言之なく候。人生最も快樂なる時は如何なる時ときかれ候はんか、妾は現在と申すべく候。而し何事にもさかしき君よ、妾は此稚兒らと日每嬉々として遊ぶと申し候へ共敎授は遊ばず力の限り熱心に致し居り候へばこは御安心下され度候。あ退校の鈴鳴り候、餘は御目もじの上にて、かしこ。

◎都の姉に

千葉縣　今井なほ子

この頃のやうな假暑さにも困りますねえ、さぞ都も暑いでせう、それでも姉樣は田舍に、おいでの時から無病でしたから、別に御障りもございませんでせうね家でも皆壯健ですよ、たゞ私がこの間あんまり眞桑瓜を食たものですから、少々お腹を痛めたばかりですけれども、最う、なほりましたよ。姉樣は何時お歸りなさるの？早く歸つて頂戴な。結婚！このことをお聞きになつたら、姉樣のお顏は屹度、赤くなるでせう、さうして心の内では、さぞ嬉しいでせうね、私早く姉樣のお顏を見たいのよ、お父樣はね、五十の阪を、お越しなさつたので、先が見えると仰有つてね、今度、姉樣のお歸り早々、お婿を貰つてね、可笑しいこと、ほゝゝゝ早く孫の顏を見たいと仰有つてよ、嬉しいでせう、私姉樣のお歸りが、待遠しくていけないわ、早く歸つて頂戴な、左樣なら。



新歌謠

編輯局選評

二等

鹿兒島縣川邊郡川邊村　貴島よし子

ちぎれちぎれに飛ぶ柔雲は天の宮居の鳩の毛か

和歌の想より來る

三等

栃木縣小山町三〇三　栗原くに子

可愛い兎は月見て踊る娘お小夜は何見て踊る

「る」の韻を踏めり

四等

丹波氷上郡和田村　難波あいの

なんの鋏がなうても百合は締めて切れます絹糸て

反覆法の妙

五等

豊前長洲町坂元下松原方　小草子

今宵滿月住吉樣は潮ひたひた浮御殿

月光潮光、天地輝く、俗謠にも威嚴あり

秀逸

○奈良縣　中富よしみ

月は戻らず野末に落ちて尾花あれほど招くのに

○土佐　高橋白ばら

せがれ十六松魚釣る船て八潮八百波わけてゆく

○備後　二子山

花も咲きます實もなりまする妾の畑の一つぼに

○駿河　月見草

姉が來るかと迎火たけば姉は來ずして虫の聲

○下總　三橋げん子

琴はあれども我君まさぬ秋をひとりて月に彈く

○麹町　淺井ゆき子

うたの扇を海べに流し返歌うけたや乙姫に

○桑名　しげ子

姫の舞ふ夜かみ空は星のイルミチーションつけたよな

○埼玉縣　淺見なみ子

筏さす子にもらふた花を髪にかざした多摩少女

○秋田縣　佐々木千代子

蟬のなく音に木の葉はゆらぐ夏はまだある羽後の國

○仙臺　蝶子

わしの御家は竹やぶかこみ雀の御宿とまぎれさう

○陸中　若生すみれ

わしの家には時計はないが汽車のゆきゝで時を知る

○羽前　杉葉女

胡蝶眠った菖蒲の花をそつと書きませう寫生帖

○
病める夫にと土産の根百合蟲につけたる野良歸り
佐賀　甃花女

○
本も讀みたし裁縫もしたし好きな交際休められぬ
茨城縣　杉山芳子

○
風に靡かぬ木槿の花が今朝は胡蝶に蜜吸はす
京都市　山口愛翠

○
伊豫の小富士や四十が島に潮の滿干の千鳥なく
伊豫　後藤なお子

○
天の川原て翼をあらひ一度翔けたや月世界
福岡市　井上とき子

○
山の端まで畠を開きひらく畠に桑植へる
紀伊　尾上子

○
夢にリボンの胡蝶となりてもつれもつれて草花に
長野縣　藤波子

○
松葉紅葉葉黃色や赤て織りて見たいや木の葉衣
京都　辻あい子

○
田植終れば早苗ぼりします踊り見ろうか諸聞こか
筑前　青葉女史

○
そよと柳をなでてくる風に灯消されし夕凉み
常陸　大和田清子

○
森の御殿や松樹のうてな榮華つくせど朝の露
下總　神田みち子

○
里の少女の蝙蝠傘は人に逢ふたび横にさす
湖北　利根邊女史

○
あんな無禮もよく物云ふになぜに我子は口きかぬ
信濃　世良田せきる

○
山と山とて取巻くなかに明暮はたらく身がつらい
上毛　關口むめ子

○
野邊にひらいたあの七草を染めて見たいよ裾模様に
奈良縣　園垣鈴子

○
私の國には名物ないが濱は名高い九十九里
千葉　木村野津子

○
雨ふる朝も風吹夕も私しや野山に草かりに
岐阜縣　早川けん子

○
踊りおそけりや早や心配て橋のきは迄出迎える
越後　松山けん子

○
春の晴衣は手織の木綿米の二才も皆私が
日向　濱砂まさよ子

○
私しや峠の一けん茶屋て通る旅人に氷やる
麻布　松崎みどり

○
里の少女の謠ふをきけば秋の夕燒緣を刹げ
德島縣　吉田菜花

○
砂さへやける眞晝の中を曉ヶ女子の潮をくむ
靜岡縣　岡村博子

○
百合のかをりを慕ふて行けば野末淋しく草の家
但馬　孤蘭

○
折らてながめよ槿の花はたつた一と日の命ぞや
大阪　倭文子

○
本も讀みたや寫生もしたや長い休暇の其中に
東京　とき子

○
嫁がせッせッと植ゑたる苗の上をわたりて青嵐
下總　武田たき

○
補習學校が出來たと云ふて村の委員が得意がる
伊豫　菜の花

○
あつい／＼と云ふのも僅か盆が終ると寒くなる
越後　日下きよの子

○
誌友諸孃や記者さんに見せてあげたや饌場を
北海道　三宅みめ子

○
雨は降つて來る漸はぬれる可愛兒は泣く日は暮れる
總島　笠原松子

○
佐渡と越後の境の櫻花は越後て根は佐渡じや
德島縣　田舍娘

評論文

文學士沼波瓊音先生選評

三等

○我を救ふ者は我れなり

紀伊　貞操賤女

食物は能く吾等の生命を保たしむと雖も、吾に之を消化するの力なくんば、何ぞよく吾の生命を保つことを得ん。父母は吾を愛すと雖も病める吾の苦しみを分ち忍ぶこと能はず。佛は慈悲深しと雖も吾等の作りし罪業の報ひを代りて受け吾等をして無罪ならしむること能はず。又如何なる良教師と雖も吾の覺ゆる力より以上を教ふることは不可能なり。斯くの如く奈何なる者も吾を救ふこと能はず、唯吾を救ふは吾あるのみ。吾はよく吾を愛しよく救ふ。

若し吾自ら吾を救ふの力なくんば何者かよく吾を救はん。而して吾が肉躰を持續せんと欲せば之れが養分を食物より吸收せよ。我が精神を修養せむと欲せば宗教文學より之れが養分を吸收せよ。左れど吸收は己が力にて爲すべし。

（評）この論旨に隨はゞ恨なく悲なけむ。

秀逸

○忠

小石川　未成女史

人はすべからく忠實なるべし、職業は千態萬狀なり、境遇は千變萬化なり、然りと雖も何れの所何れの時何れの職何れの人そは論外のことのみ。苟くも忠實なる精神を忘れざる以上、時に當つて誤らず、事に處して悖らず、あらゆる希望と目的とを遂ぐる上に於て蓋し道に近からんか。

正成が絕世の忠臣たるも、忠なるが故なり、ワットが蒸氣機關の發明も、レセップがスエズ運河の開鑿も皆事に忠なるによるにあらずや。惰者とは忠ならざる人の云ひなり、惰者と雖も生來然るにあらず、事に忠ならざるが故にかく稱せらるゝなり。同じく人となりし以

上、惰者として世に生るゝ人もあるまじくはたまた不成功なる人として生れ出でし人もなき筈なり、岐るる所はやがて忠の一字によるのみなるを。

あゝ余や、忠の偉大なる勢力を甚だ些々たる一事實に認めにき。這般一教育者の授業を見て、その人のいたく不巧みなる教授振りなるに拘はらず、よく滿足の効果を収めつゝあるに感じき、世の教育者の多くは教授の方法のみに拘泥して、その巧拙をのみ之れ云爲す、啻も亦甚だしと謂ひつべきなり。教授の方法元より緊要なるに相違なし、然れどもより肝腎なるは、職に忠なることと是れなり、前の教育者が意外の成功をなせるは、只其人が事に忠なるに由つてなり。惟ふにては獨り教育のことにのみ然るにあらず、萬般の事敢て異なることあらんや。

吾人社會の一員たる以上、その究竟の目的を達せんには、亟々の間も念頭を離すべからざるは、忠の一字なる哉。

（評）御尤の論。

○風景の感化力　丹後　賤の子

我に一人の従妹あり、うす紅の頬美しく鈴なりの目もいと愛らし。されど只一つの疵はお轉婆なり。

彼の生地は怒濤逆まく玄海のほとりの一僻村、目に見るものはあれにあれたる大浪や、神の斧にて削りなしけん巖きりたつ後ろの山、遙に望む九州の諸山の外には、眺むるものは何一つなき離れ小島なりき。

我が十二才の時彼れは夏期休業を幸に我が家にと來りつ、年上の我を度々泣かせぬ。

驚きしは彼があまりに海を見るの大膽なるにてありき、はじめ海につれゆきし時、お國訛りのある口にて姉さん大きな池だねえといふ（我が舞鶴の海は灣入せり）われ親切に説明の勞をとりしに、やう〳〵うちうなづき、それよりは日毎日毎に水泳なせば、我はあきれて茫となり只々河童の御親類とのみ思ひぬ。

それのみならで驚きしは叔母と添寢せる彼れの寢物語なり、曰く母さん私はこゝの姉さん大嫌ひよ、意久地がなくてぐづ〳〵で、たつた半丁も泳げないとさ、まるで猫のやうにおとなしいねと、又曰く私處の島の山はこつ〳〵した形で面白いのがあるが、此處の山は坊主頭のやうに丸くて眠つてるよ、海といへばお池のやうだし、それだから此處の人はおとなしいのよ、こんな箱庭のやうな所に居るからねえ母樣と。

今思へば中々に面白き議論なり。風景の感化力の偉大なる、我が國が美術國なるも宜なる哉。

（評）又曰くの條は作り物らし。

○ひとり言　横濱　しのぶ子

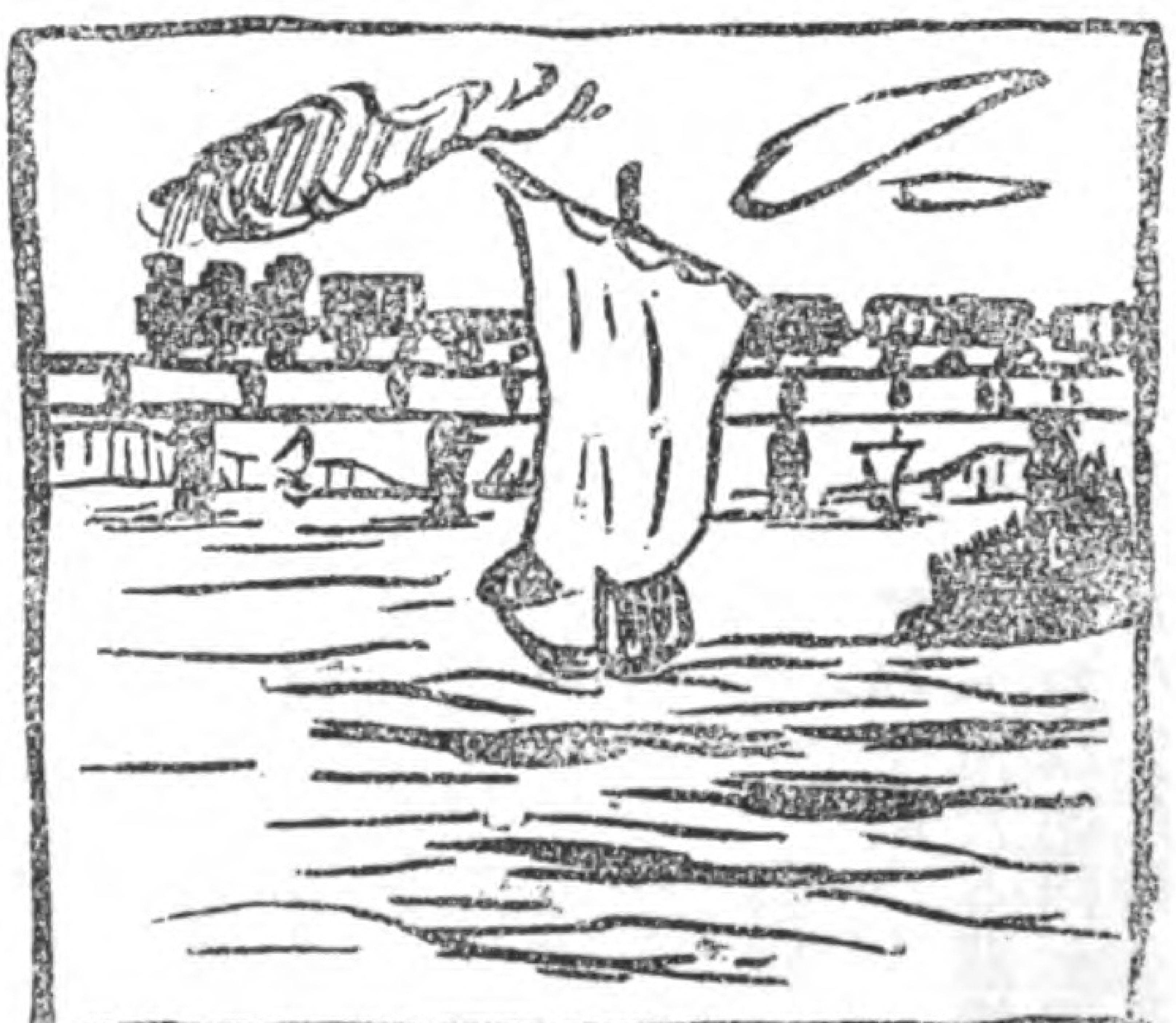
世の人は運命に逆らつて事を成した人を成功者と云ひ勝利者と稱ふ、之等の人は勿論大なる忍耐と勇氣とを持つて居なければ出來ない、然し自分は思ふ、運命に逆ふよりも之に從うて淋しき笑、榮なき生涯に甘じ得るの人は更に更に大なる勇者である場合が多いではあるまいかと。

日當りの能い場所に生じた草花は、溫い日光と適當な濕ひとを受けて益々勢よく美しい花を咲かせたが隅の方に生じたのは其成長も覺束ない有樣で花など持ちさうもない、まご〳〵して居るうちに其季節も過ぎてしまつて遂に一度も顯はれる事が出來ないで終つてしまふのかあゝ。

婦女を評して弱い者と云はれる男子は必ず内外によらず其等を保助するだけの資格を有するからであらう、けれ共停車場の改札口などて其弱い婦女子を押し除けて我先登第一とプラットホームに拔け出て悠然シガーをくゆらして居るのは强者と自ら驕る男子ではないか彼等は其を强者の行爲と心得て居るのかしら、其樣な心なら弱者と云はれる私達が反つて彼等を哀れまざるを得ない。

（評）終りの氣焰はちと姫御前の。

鐵橋　盛岡市　白井津奈子



○文明的の婦人　日本橋　坂里輪子

貴賤貧富の差を問はず苟も婦女と生を受けたるものは最も女子の美德とし世人の尊敬を受くるものは何ぞ云はずもがな誰しも其柔順なるを以てす、さなり柔順なる美德ありてこそいよゝ女子の美なる天性を發揮するなれ、古へより女子の天職は家齊内治にありとして其他の外事にあづかるを要なきものとしたりされど尙先進的の當世にてはさあらず强ち此の舊訓を墨守すべきにあらずされぼとて若し女子が其分を轉倒して外事に活動したらむには固より常理に戻るものとして大に責むべしと雖もさあらずして家齊内治に專ら意を注ぎ内顧の憂なからしめ其餘力を以て胸力のあらん限り外界に及ぼすはこれ天職を全うして以て公益を計るなり但し稚兒多く家事煩はしくて暇なきものあるべく又才智愚にして事の内外の區別をだに知らざるものもあるべけれどそは是非もなしさりとて要なき雑談に時を費

し少しも外事に關する暇なしとて省みざるは何ぞや廿世紀の盛代に遇ひて高等なる敎育を修むべき今後の婦人がかゝる淺薄なる思慮を棄てゝ大に社會的觀念を養ひ自ら其任に當ると共に家を治め子を敎養する實用の新智識を發揮せざるべからず天下の諸孃よ廿世紀に於て社會の惡風を改新し以て獨立獨步の精神を養ひ躬行實踐を旨とせざるべからず。

噫眼を閉ぢて靜に考ふれば學校と社會とは決して別天地にあらざるなり社會は所謂學校にて修めし學理智識の應用となるべきもの最も多ければ此二つは必ず離るべからざるものなり文明的世の婦人よあらん限りの腦力をふるひ學業の暇には其身と共に社會的觀念を養ひ貧富貴賤の懸隔を去り公衆のため益を計らんことを企つべし是に於て學理的進步も物質的進步も始めて兩立し我國婦人の價値をいよゝ顯し以て國勢を輝さしむる所以なり。

（評）今少し刺戟的に書かれたし。

○德

岡山縣　遠藤芳子

萬物の靈長として世に尊敬せらるゝもの若し德なかりせば人として幾何の價値かある寧ろ禽獸の禮あり孝あるもの却て其行爲の貴きを見るに足らん

そもそも女子にして最も尊ぶべく最も重ずべきは女德なり是れ神州女子の特色にして歐米の婦女子の遠く及ばざる所なり然るに近來百事歐風を模倣し我國固有の美德を忘れ動もすれば彼が長所を擇ばずして却て其弊風たる不遜をまねびみだりに急進せんとして跌く者少なからず甚だしきは一般の國風を法律の奴隷たらしめ男女同權を主張し一夫一婦の制を建議し將婦姑別居論を稱ふるが如き實に我國の女德を紊亂するものにして終には我國體をも損傷するの恐なしとせず慨くに堪ふべけんや。

時に或は無道なるものありて常に婦を困め終始一家の風波絕へざるの例ありとするも是其舅姑の猛省すべき點にして婦の罪にはあらざるなり何ぞ之れに關せんただ之を忍ぶは婦の道なり婦の德なり即ち我神州女子獨特の長所なり此長所を發達せしめ此美德を涵養して以て我國女子の美風を永遠に保守せんことを期すべし。

○戰ひ

小石川　山崎房子

戰ひ！戰ひ！

ア、何たる悲慘の語ぞ。

一たび砲門を開かんか、秋水一たび鞘間を脫せんか、罪なき有爲の靑年をして、空しく原頭一片の煙と化せしむ。

ア、國のため君の爲め、倒れし人の名譽や永く史上に燦爛たりと雖も、遺りし父や、母や、妻や、愛兒や、兄妹の心の中のかなしみや奈何に深からん、よし遺りし人の悲みや又慰むることを得るとするも、倒れし人

の勞力に依りて生活しつゝありし遺族の今や肝腎の大黒柱に放れて、憐れ路頭に迷ふの逆境に陷りし時の心の中や如何に憐れ深き！

ア、戰ひ！戰ひ！

聞きてだに慄然毛髮の立つぞや。

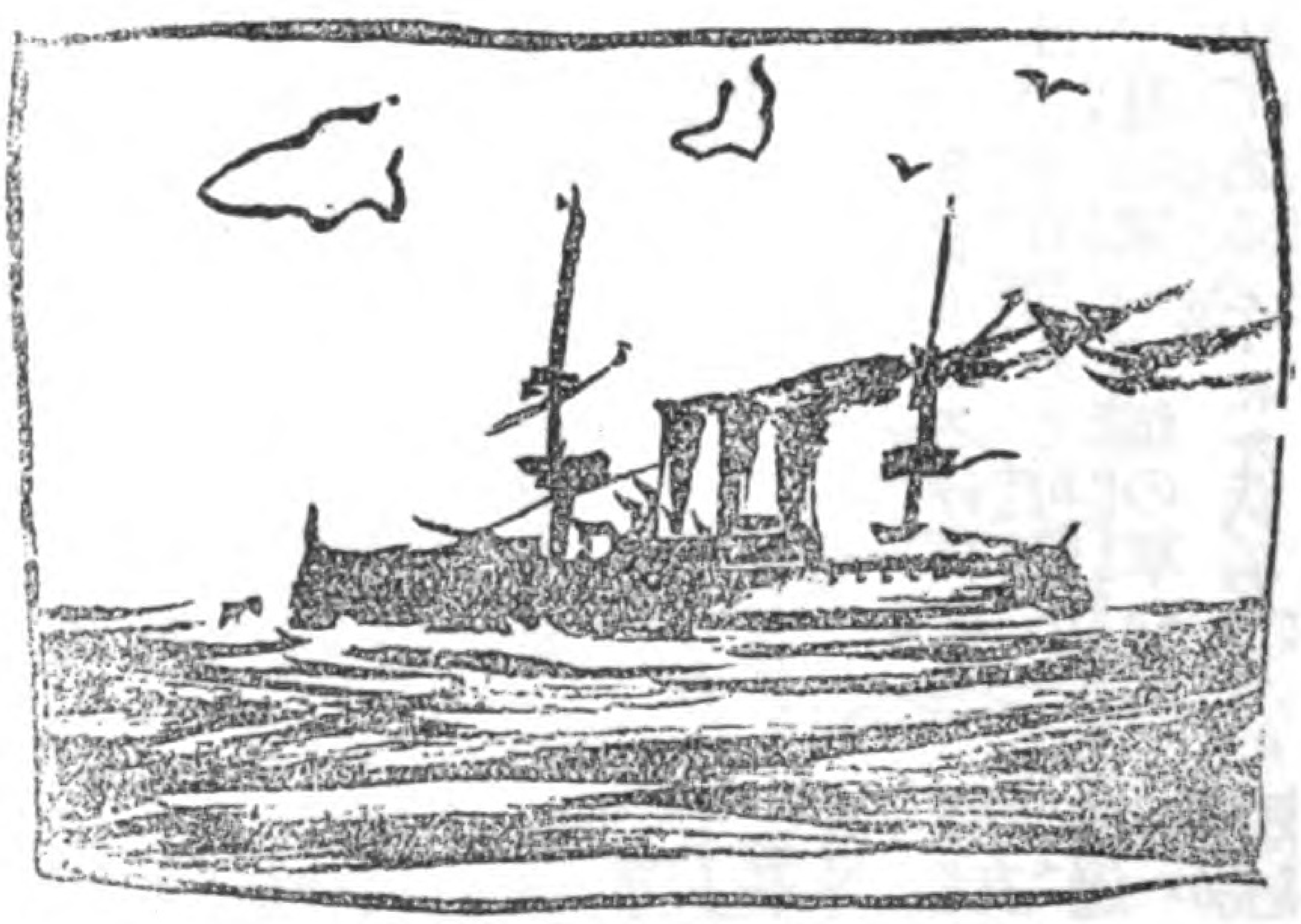
飜て思ふ、日露戰後の東亞の天地は妖雲未だ全く掃盪せられず、陰に雲を起し雨を降らさんとするの形勢ひそむ、ア、此恐るべき戰ひは何時の世に全く東亞の天地を放れて、暖かき平和の光に浴することを得べき？

◎善

函館　中野荒月子

凡ての人は果して惡と云ふ事を見または聞きて快とせざるべし而して其の反對なる善は何人も欲する所なり譬へば吾等常に苦心して己が道德を鍊磨するは何のためぞ他なし人の人たる道を學ぶがためなり人の人たる道の基は何なりや其の基とする甚だ多かるべきも一言にて之を謂へば善を行へば足れり然れば善とは何なりや余等はまだ深く其の意義を解する能はず故はまた高尙なる學理上より之を分解して說き得ざるなり然れども余は信ず善は吾人の良心をして全くせしむるものて例を上ぐれば己が一事一行にして尙

軍艦　神戸　鈴木董園



吾人の精神を爽快ならしむるものなりされば如何なる惡人とても常識あり且良心を存する者の限りは惡をなして快とする物なし之實に人間の人間たる所以にして吾人の行をなすに付き良心に照すは最も正當とすべき理由なり而して善には種々ありて其最下等なるものは僞善よりして慈善なるものもあり慈善はあたかも人類の尙ぶべき德行なりとし社會の日進月歩致せるは此の種の德行の盛になりしに原因せるは明なり又僞善とても善の一部なれば決して惡と同一視すべからざるは論なき所なり然れども此等の善を行ふよりむしろ眞正の善を行ふべき心掛は吾人に取り最も必要なるべし今や各種の道德益々高尙に趣むくに際し吾人の良心も時世に伴ひて進歩せざるべからず昔日の善又以て惡となるも計られずされば吾人は時世に從ひて新空氣を呼吸する必要最もなりされどまた如何なる變化ありとも善惡の境界等の變更さるはなかるべければ當人は少しく心を安ずる事を得るなり。

短文

編輯局選評

二等　○花風呂

和歌山市附近岡崎村字寺内岡崎楠太郎方　さき子

山梔の花は打傷に、枇杷の葉は皮膚病に、冬蔦の實は乳房の痛に、秋の草花は頭痛と腰いたに、みな功能があると妾の地方では一般に信じて居ますの、それで家内で誰か病氣ないと布袋から陰干の花やら葉やらを取出て花風呂をたいて溫まるのです、氣の所爲かすぐ恢復なります。

東京の菖蒲湯、柚子湯はいざ知らず、此の花風呂は必ず効驗あらむ

三等　○新婚

芳子

妻が羞かしがるからと、きまりわるげに茶をもらひに來た八公は、今日初めて可愛い新妻を一里の村から、私の家へ、畑の草むしりにとつれて來たのである、午になつた、家へ來て喰べるのはいやと云ふ、そこで親切な八公は畑の木陰て樂しい一時の家庭を造ろうと云ふのです。

それでも花聟花嫁

四等　○とき衣

丹波氷上郡和田村　難波あいの

不思議も、古皮籠の中からさがし出した私の幼な着地はメリンスて黒地に紅不入のあつさりした友染てす。それをけふ晝寐の間に崩して後身と衿とて前掛を拵え、片衽で襷を拵えました。そして猶殘りの布には今少しの白茶メリンスを入れて、お机の前にしく坐ぶとんを拵へませう。

惜しいことを

五等　○五文珠へ祈禱

羽前　杉葉女史

誌友のかた〳〵に戴きましたうち、豐後の浦邊と、大和の安部と、甲斐の市川と、それから丹後の切戸の、お文珠樣の繪葉書を、妾は一つの額にしまして、當地龜岡の文珠樣に捧げて、記者樣諸姉樣のお達者を祈りました。

斯くてこそ繪葉書交換にも意味はあれ

秀選

○銀杏の蔭　駿河　天野もと子

村はづれに一本の銀杏がある。餘程の古い年月を經たのだらう、枝が四方に伸び廣がつて、其の下にある二軒の家の屋根へ、一ぱい影を落して居る。一軒は米や醬油を賣つて居る、隣は、だがし店てある、秋風がさつと吹いて金色の葉ははらはらと散つた。

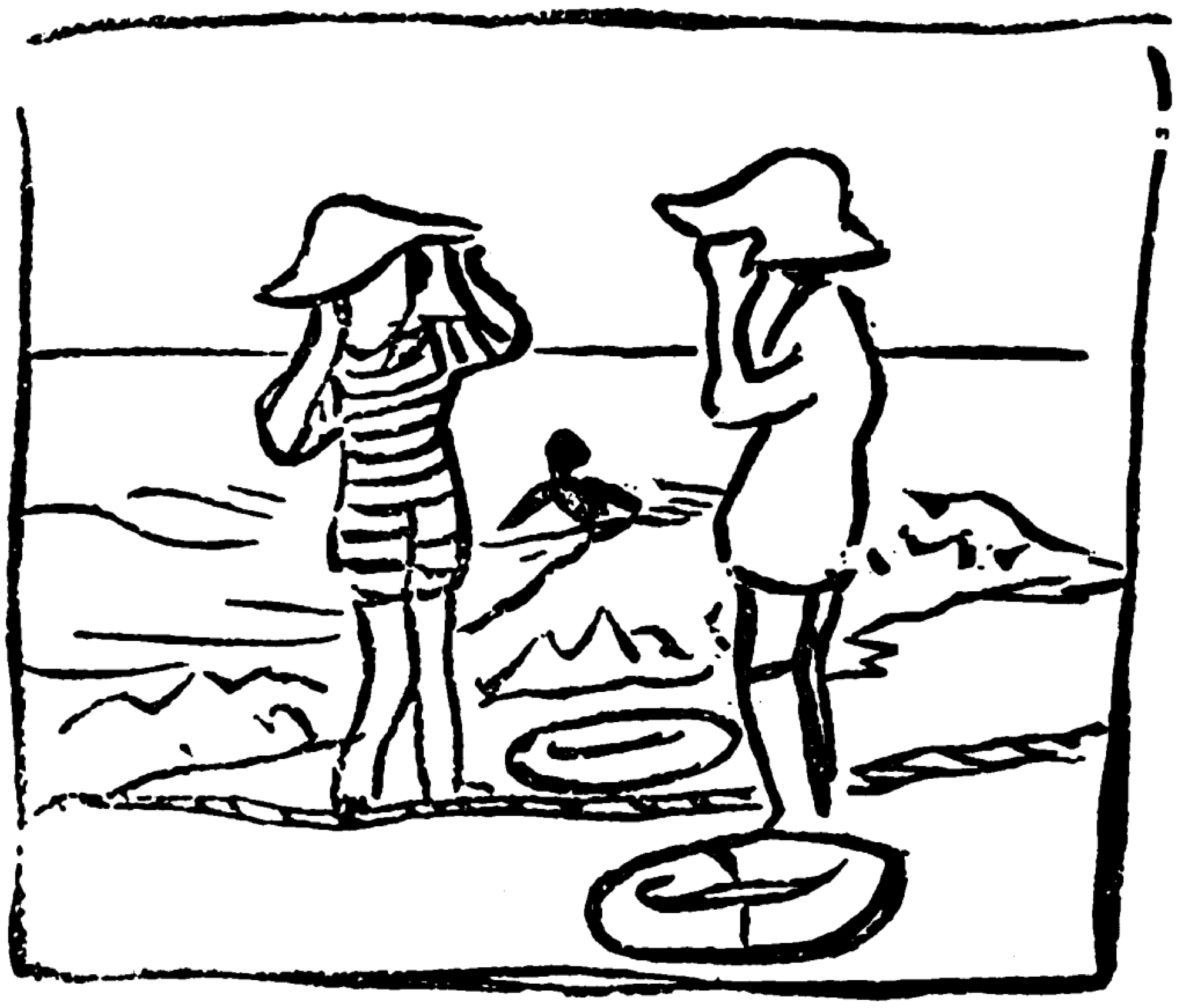
木目一つに幾星霜

○よね爺　長野縣　山田夢殿守

今年て丁度十年勉めた米と云ふ、私の家の作男の爺さん、十年勉め上た報しゆうの中ばを裂いて、小さな墓を買ました。生かぢりの宗教や哲學を知らぬ代には、米はもうそれが未來の天國とも喜んで安心して永眠る事が出來るのてせうが……あゝ私はいつ安心な墓を得られませう。

悟脱と懷疑

海水浴　大阪　俊文子



○縞帖展覽會　鹿兒島縣　犬飼たき子

裁縫室の臺上、縞帖展覽會が開會れました。縦縞、横縞、果ては、ごばん縞、日頃の丹精が此の一室に集つたのてす。旭先生が審査長、五色に織り分けある矢飛白の、木綿地、一等賞の、赤符、名前はと、見れば、嬉しや、墨色濃く、犬飼たき子、笑靨を、そと、袖に隱しました。

願はくば三越に陳列せむ

○髪洗ひ　岩代　根本松江

人は午睡の夢路を辿る午下り、私は、綠の蔭て髪を洗ひました。涼しい風を浴びながら、冷い水で洗ひ上げて、一しほ黒くなつたかと思はるゝ濡髪を、白いリボンで結びた時、男子には分るまいとおもふ感想がしました。

二分刈の坊主頭を掘拔の水で洗ふ味は女に分るまい

○涼しさう　横濱　しのぶ子

此間姉様に戴いたレース糸で可愛らしいハンモックを

造らへて、箱庭の木立の間に掛け、其上に豆人形を乘せてやりました、小さな森からそよ〳〵風が吹いて來るとハンモックは右に左に靜かに搖れて中の人形さんはさも涼しさう。

詩集や讀む

○枯花　本郷　朝井松子

紅の薔薇の花一輪封じて姉樣に、忘れな草は片時も君を忘れぬ印として秀子樣へ、濃紫のつぼ菫は詩人氣取の薫子樣へ、とお机へ並べて置いたお花が學校から歸つて見ると一つも有りませんのでお三に尋ね升と、「枯れ花なら皆捨て仕舞ましたよ」

おさん、趣味を解せず

○火星　高岡市　北本歌子

毎夜東の方、郵便局の屋根に當つて、少し赤味を加へ他の星よりも稍々大きく、煌々と輝く星、之が地文で教はつた火星とか、聞けば近々中に此の星と二年間程の別れとなる由、おゝ火星よ、汝がまた現はるゝ時は、果して妾は今の樣な少女てあらうか。

文學と科學の調和

○黑潮　紀伊　前田かをる子

黑潮鑑あり、黑潮鑑あり、東西兩半球を貫通して永遠の生命を流動せしむ、風よ、雨よ、霰よ、雪よ、東より西より、北より南より、此の大なる靈に憧がれよ。

詩の如し

○北海道の特色　北海道　藤本鳥羽子

私は四年前に夫と共に北海道へ渡りました、北海道は内地と變た點がいろ〳〵あります、先畑の作り方から家の建方、庭園の造樣など丸て西洋化してゐます、又野菜や草花の種類も西洋物が澤山あります、そして田舍の荒地へ行く程物價が高くて物質は至て麁末です

知らず、夫婿の愛情は？

○畜生　土佐　深瀨ます子

さる夕暮非常に混雜して居る街を自分は急いで通りぬけ樣とした所が、お孃樣お安くお召しなさい歸りて御座いますと、車夫が煩くくつ附て來るから「よござんすよ」といつて、さつさと歩くと猶も「いかゞ樣」とすり寄て來る「いゝよ」といへば遂に「畜生」といつて引返した。

あはれむべき江月子

○下駄の色々　南町　かね子

桃山形とかいふ新流行の物に、細いあつさりした緒を立てたのは、いきな向で、細形の表つきの物に、是も細い鼠か何かの、緒を立たのは、奥樣向又高い駒下駄

に、緋朱珍の緒を立てたのは、十二三の令嬢向叉近頃は空氣ぞうりが、奥様令嬢間などにはやります。

流行界にも短文の作者あり

○生れ故郷　讃岐　眞佐子

それは小さい淋しい一孤島ですが名ばかりは大島といひます、どちらを見ても海ばかり、人家は只三軒の百姓家と五軒の海士の家とばかり、此様な離れ小島でもやつぱり生れた所は戀しいのよ。

さうですとも

○農夫の樂しみ　讃岐　きくの

春は麥俵を納屋に積だ時、夏は大豆がみのつた時、秋は米をくらに納めた時、冬は甘藷を畑にうめた時、されど此の樂しみがある前には、かならず勞働と云ふ苦しい間を通りぬけねばなりません。

農家の福音

○覺めたる蝶　筑前　露子

朝早く御庭を歩いて居ますと、葡萄の葉末々々に置ける露に、朝日が照りそふて、きら〳〵と輝いて居る樣のあまりに美くしいので、思はず近よると、昨夕假寐を結んで居たのでもあらうか、葉裏から、蝶が一双ひらひらとまひ上つた……と紫にかゞやいてゐた露がぽたりぽたり。

紫玉綠玉

○お祝ひ　美濃　臼井宮子

お祖父樣が八十八、お祖母樣が七十七て、おふたり揃つた目出度いお祝ひ、昔し氣質のお祖父樣は無駄な冗費は止してくれと、仰つて白米五俵を村の貧民へ、金貳拾圓を育兒院へ寄附なすつたのでありました。

活ける附と銘

○朝風　京都府　箕浦梅子

天地未だ、眠りから覺めない時、一人起き出て白銀の樣な雲の、かぶさつてゐる九重の方を拜し、さて朝風清き、嵐山の前なる渡月橋を、わたる時の心は恰ど、神樣が詩人にでもなつたようでございます。

誰ぞ妾の御國に跨りて

○どぜう賣　門司　隆子

日は天に中して午睡夢たけなはなり。どぜう賣は廚のかたに呼びこまれてわづかに汗をぬぐふ。右手に庖刀を取り、左手につかみいだして骨を拔きつゝ、身の浮沈、魚の豐凶など語る。身をおほふ一枚の竹の子笠、この下にてこそ一家三口の生命はおほはるゝならめ。

枡にはかりて買ふ人は賣る人よりもあはれなりけり（芭蕉）

○秋の女神
奈良縣　園垣鈴子

曙の裾摸樣の如き紅葉、縫へる金絲の如き黄いな葛の蔓、錦の衣、たなびける白雲の帶をしめて、龍田姫は現はれた。彼女の薫ずる息は金風てある、女神一度琴を彈ずれば草露秋の聲を放ち、み神一ふり御手を振へば千山も忽ち凋落する、あゝ、山姫の神秘！

まさしく龍田姫

○姫島物語
豊後　鈴木さち子

昔豊後內山の長者の娘に玉代姫と云ふ絶世の美人がございまして不隠した事より黛麗はしき都の公達と相思ひ遂に不義の廉にて此島へ流され後に姫は其戀人のやんごとなき方と悟り賤しき血を交へしを深く悔い或朝早く海に投じて死んだのが島の名の起因だと申します

好逆向鍈

○待つ心
伊豫　すみれ子

夕まぐれ隣家の義ちやんはお祖父さんの會社より歸るを待ち向家の德子さんは夫の工塲より歸るを待ち佗び其隣の婆やは爺やの沖より歸るを待ちみな表先に出て居ます妾は人目恥かしそうに格子の內に誰を待て居るてしよう！

くものふるまひ

○絲瓜棚
和歌山　伏見八千子

二十本の青竹と三尋の棕梠繩とを用ひお父樣のお手傳てやつと出來上つた六坪計の絲瓜棚今に蔓が此棚一面に絡つて鼠の尻尾の樣な小い絲瓜が何個となくぶら下る頃は妾は歸省した仲のよいお友達と凉臺を此下に出して葉の透間もる天の河を見ながら冷素麵でも食ませう。

由來あり、希望あり

○船幽靈
神戸　佐々木翠子

面を壓して起る峻嶺の頂から惡魔が密んだような黒雲が出てサツト月を呑んだ、脚下の巖窟に嘯く狂濤の響が妙に心臓を貫く折しも遙か沖合の沈沒船から、蒼白い光がスーツと揚る、途端に魂消る女の悲鳴大粒の雨が瀧のように降り出した。

怨靈退散、南無阿彌陀佛

○田舎のお盆
麹町　椿友子

朝飯が終へると、從兄のお嫁さんや奉公人は皆うれしそうに、そわ〳〵と衣服を着かへるやら、荷物を作るやら大騒ぎして、伯父樣に挨拶して出かける、祖母樣は、「私も昔はあんな風によろこんだものだつけと」仰しやいました。

二人の子は行李に入れて

○霞浦の畔
茨城縣　石川ひさ子

妾の住家は霞が浦の邊りてす、皆さんも御承知てしやう霞が浦て種々の魚の取れるのは、妾の家てはその漁つて來るのを買ひ集めて色々と煮て賣り出すのてすそれて妾は毎日その魚を煮る役てす

鰕の濱燒、鮒の甘露煮

○反物　京都　松岡綾子

私は反物を裁つ時はいつも亡き母の仰た事を思ひ出します。其は斯うてす「七度つもつて一度裁て」ていつも。もう好いと思つても又も一度考へ直します。

女子座右銘

○ある夜　東京　しら萩

「柴の折戸の賤が家に！」と私は一生懸命に歌つて居る母樣はお醫者さまに入らしつてお留守、先刻ねかしつけておいた妹が突然泣き出したので今背にのせておもてに出た所である、空には星が一ぱい、其中にたつた一つ强いつよい光を、おゝあれこそ明星樣てあらう。

坊やは好い子だ寝んねしな

○まき　土佐　大和田靜子

昨日も雨、今日も雨とゆふ五月雨の頃には、集めて置ひた眞木も、しめつて來る、それを焚き付ける程、困難な事はありませむ。て今年はお早くから、松葉を澤山、集めて置きました、あゝしめつぽひ朝、能く乾いた枝に火を付けたなら、何の位、心よひてしよふ。



月見　常陸　梨子

炎の夏、籬にからまる

○法師　愛知縣　近藤しげ

私は妹と夕方野良道を散歩しました折から向ふより來る一人の旅僧に出會ました妹はくつ〳〵笑つて百人一首の喜撰法師に似た人だと申しました

家は都のたつみ

○螽斯　大坂　米子

天神樣のお祭りに妹が買つて來た螽斯、毎日良く鳴くので樂しみにしてましたが、一昨日からまた一匹、どこからか飛んて來て庭のくさむらて鳴いて居ります。螽斯、は土用の明きに逃してやると良いつて聞いてましたが、折角お友達がむかいに來てるのに可愛そうてすから、ソツト籠を開けて逃してやりました。

知って逃げず庭に鳴く

○蟀　芝　鈴木しゆん

人には對話の時に種々の癖がある、此村では先づ村長さんが口鬚を捻ねる癖、お寺の坊さん手を振る癖、お父さんは手を組むのが癖、向ひのお嫁さん手で口を押さへる癖、後の老父さんは頭を撫てる癖、内のお梅どん手を揉む癖、我家の三太は言葉と言葉との間へ「エヘン」が一ツづゝ。

還有の齋

○切手屏風　　小　草　子

六年前から弟と二人であつめた切手類、外國切手が四十三、内地のが千七百三十六、これだけ出來ましたから先日屏風をこしらへました。そしたら諸方から御厖に繪葉書をもらひました、此度繪葉書ふすまをつくるつもりです。

○灯の虫　　牛込　小路ふみ子

あれ又來ましたよ、水色の薄羽の小さな可愛らしい懇知つた虫が灯をとりに來ました、「灯をとつてくれば嫁をやる」と言はれたのでしよう、けれど虫は琥璃のような灯の色を浴びて逝きました。

○御天氣草　　相模　土　筆　子

旭が東山に輝くと、約一坪のお天氣草が、パツト咲く、緋黄色、肉色、純色、樺、とりどりに、日に映えてそれは樂しそう。鉢のを椽に並べて居ると、足音が止まつて「姉ちやん」「あい」　振り返ると、お花は「秋黄色の好き！」、貞ちやんは秋を、前齒に噛んで居る。

○出　産　　四多摩　森田なか子

醫者よ產婆よと騷ぎ立つて居た私の家もおぎやあと云ふ赤兒の初聲に、一時は誰も喜びの音より外知らないやうでありました、そして來る人毎にお目出度と挨拶すれば、例も笑ふと目が無くなるやうな乳母やが目を丸くして「しかもお坊ちやまでー」と横やりを入れるのです。

○箱入リボン　　兵庫縣　花　籐　子

大阪にある、姉君より、いつぞや賜はりし絹リボンあまりの美事さ立派さに眺めつゝ箱に入れてより丁度半年いづこへも出ぬ妾はいつ挿せば好か田や畑へ行く時には、何だかー

○投書紀元　　福岡縣　村　雨

我れ文壇に投書を始めしより滿一週年、出しても沒書出しても沒書、規則の誤かと記者様に問へば「是で善し」と、さては文の惡きやと月に日に作り絶えず投書せし甲斐ありて、目出度き今月の紀念月に於て始めて賞に上りぬ、「精神一到何事か成らざん」とは實なりと今信ぜり。

○我境界　　奈良縣　中富よしみ

太古の様な此の山奥で、桃葉の製造と、一反歩足らずの野良作りとを天職とし、怪しげな茅屋に起伏して、樂しき月日を送つて居るのは妾です。

○我家の笑顏　　鹿兒島　大津喜和子

父様の笑顏は滑稽的で、母様のは優しく、始終笑顏を見せぬ兄様のは嬉しく、すぐ笑ひこける姉様のは腹立たしく、節ちやんのは愛らしく、下女のは愛嬌があります、そこで私のは繪に書いたお福の様です。

○停車場　　久留米市　永　野　房　子

いよいよ見なれた森が近づいて來ると何やら汽車の速力がのろくなつた様な氣持がする、立つたり腰掛けたりして見たがどうしてもおちつかぬ電信柱ばかりむやみに走る立ちくたびれて手も足らなへた時ようようく停車した、プラツトホームには母様や妹や弟やの顏。

○歌いろいろ　　駿河　白　藻

日の暮に私がお掃除をし乍ら、低聲に新體詩を口ずさむと、最早お湯から上つた父様は謡を始める、お兄さんは門口で薩摩琵琶を謡ひ出す、お母様と妹は喜代ちやんを對手にして唱歌を歌へて敵居る、只一人おばあさんはにこにこして、皆の聲を聞て居るのです。

○わかれ　　四　谷　八　重　子

川一つ越ゆれば、武蔵野を離れるのである。平な田に低い林の間をうねつてゐる。清き多摩川も愈々今日見納めなので、そぞろ懷しき里に戀る

涙を流すのであつた。――今は山里深き甲峡の樵婦である。

○遷宮　紀伊　夕葉女

夜の氣破りて、許馬の嘶き。蹇々と轟き車の、馬上の神官が、白き髭にかかれる。何神宮と染出されたる幕、打めぐらして、白衣の人が、敬々しうも、捧げ奉れるみ神の、いと神々しきに、おのづと、頭垂るゝをおぼえぬ。

○毎朝　麹町　淺井ゆき子

今年は輪番の代りに裏畑に澤山の植物を植えて自分で丹精して培養しました。朝はやく畑を見廻りますと艶のよい茄子と、水々した胡瓜と可愛い白瓜とお鈴成りに出來て居りました、嬉しくて大笊に山盛り厨へ運び母様に賞められました。

○天地の戀　下谷　橋本波子

渺々として紺青深ふ海、渺々として紫紺湛ゝる空、而も水天髣髴なる處、色を一にして相和せり、空や海！海や空!!。此處に天の美地の麗は相抱擁し相接吻し、以て天體と地球との戀は圓滿に成立す。

○笛上手唄上手　芝　鈴木久世

月見草が竹垣根の低さな咲いて居る、夕顔が咲げられる樣に行水の大盥を覗きこむ、夕闇の椎の梢にほのぼのと月が眷の樣なら伺ひ、隣同士、同じ頃から行水が初まれば何更に誓い、行水の大盥と大盥、垣を隔てゝ空を仰いて、隣の喜ちやんは笛上手、家の美ちやんは唄上手。

○眞菰刈　埼玉　淺見なみ子

暑いあつい日盛を、母と二人で、眞菰かりをして居ますと、後の雜木林の方で誰やらが伸びりした聲で、『潮來出島のまこもの中で、菖蒲さくとはしをらしい』と歌ふたのです。鎌の手を休めて妾は自分が厭みました。

○名物　土佐　高橋白ばら

ふと翻亂る香に誘はれてたづねよつたあぢさいがき根邦なとは知りつゝも一すすき見ればこは又美しい濃化粧の少女が耳なれない邸謠小唄に餘念なく糸をとつてゐるのでした。あとにてきけば彼女は村名物の一つに數へられてゐるお鈴さんであつたとやら。

○たのしみ　むさし　小室まつ子

毎月も女子文壇へ載てくる投書家諸嬢の新歌謠を讀む度に種々の節を附て唄うのが大好なの、ア、明日からは廣々した武藏野の桑園へ出て摘桑しながら新歌謠を唄うのが又何よりの樂しみ。

○糸ひき　下總　藤崎美奈子

お前が居て呉れゝば、萬事行屆いて結構だけれど、今までの事を思へば、不自由な事も無いから、實家で來いと云ふなら行つて來いと、有難い姑の仰せに、妾はなつかしい實家へ來て、今年始めての妹に。糸ひく業を敎へて居ります。

○腹の立つもの　東京　ときこ

歌など考へて居る側で騷がるゝ時と、折角の原稿の書き損じたると、眠むい時に起されたるときと、わかつた事の蒸し立。

○女子文壇　土浦　雨具ひさし

其昔、天津網が優美な女子の文章を表したいと思つて種々と御苦心なされた爲にみ體に汗がしみ出ました、その汗が雫となつて武藏野の露しげき草花の上に天降つて床しく薫た、これが四方に香て床しい女子文壇となつた、されば每號九重の雲の上にあがります。

○一日の勤　北豐島　小柴とき子

朝早くから起き深呼吸をしてお庭の掃除をなし一時間餘り學問の諫習に晝のおさらひから茶の混生花のお稽古に裁縫を母樣に敎へて戴くのとおさんどんの御料理の手傳ひ夕方は妹と野外散步して草花の露を押し分ながら和歌二三首作るのが私には此上ない樂みであります。

○二俵のお米　石狩　横尾浪子

此度郡長さんがお催しになつた敎育展覧會へ兄さんはお得意の繪畫、妾は作文、妹は筆蹟、を出しましたが、お父つさんは、三人の内で、最も優等賞を受けたものへ、今秋收穫するお米を二俵下さる約束です。

○職工　神奈川縣　木村はる

私の家の前を青服着て船越横須賀の造船所へ通ふ幾多の職工が通ります。四年前までは五六人しか通りませんでしたが此頃では職工々々ともてはやされて十五才になると皆職工に成つてしまひます。近頃では女工さへ交へて通る樣になりました。

○繪はがき　大坂市　西田邦枝

妾は昨年の暮からお友達に進められて女子文壇を讀むやうになりました、そして誌友倶樂部を見て諸嬢樣と繪はがきの交換をはじめ今では丁度百枚程になりました、妾は何か悲しい事があると直き之を見て慰さめております。

○雨の宮の濱　攝津　森井せい子

「まア西の宮の濱の變つた事」ッてたいていの方はそう云ふてですわ、だつて變つたのですもの淋しい靜かな人ひとり居なかつた濱へ、別莊が建てられお茶屋が出來るやら海の上には海水帽があちらにもこちらにも見えるのですもの、皆さんちらといらつしやいな。

○山繭　近江　清子

私には一人の愛らしき弟があります十日許り前どこからか山繭をもつてきてうらの楊桃の木にとまらせておきました今朝みたらにげたと思ひの外見ごとなまゆ五つ。弟はてがらがほに大そうよろこび姉さん蝶はいつ出るのといつてたのしんでをります。

○海士の娘　佐賀縣　濱の一少女

油繪の樣な、海を沖遠く小舟に浮して、一日を樂しく潮中の人となりつゝ行くのは、私の務です髮のびて銅色の、父が手傳をするのです。

○蚊　上總　森婦美子

お夕飯を戴いて涼しい風を正面に女子文壇を讀まうとすると、待つて居たと云はぬばかりに彼方からも此方からも、蚊がぶん／＼來て、私ほんとうに困つちまいます、私の手で出來ることなら世界の片隅に追ひ込んで其處から出て來られないやうにしたいと思ひます

○筑波山　栃木縣　磯みい子

私は朝五時に起きて臥戸さらりと開くれば、紫の霞ほんのりと身にまとふて眞面に見ゆるは常陸の筑波山。あゝなつかしい故郷の山。今頃父樣や母樣は何をして居られるだらう。思へば二年前の今頃御孃樣と呼ばれたのも今は夢―

○我が家　京都　田島薫

滴る樣な南禪寺の松原を、琵琶湖の水が生きて活動するインクラインの方向に辿ると右手の農家の間に見える新らしい二階建、それがわが家なのです。北の窓を明けると遙かに聳ゆる叡山から吹き下す涼風が清い白川の里を吹いて軒の風鈴を弄ぶのです。

○母の教　德島縣　白百合少女

母樣が農仕事をするとからだが強くなると申しますから私馬鈴薯を植えつけて毎日學校へ行く迄に手入をしてゐましたら大きなのが出來ましたので母樣に煮て差上げましたら旨さうに召上つて私を非常に賞て下さいました嬉い事にはからだも強くなりました。

○今年こそ　廣島市　大西芳香

想い廻せば四年の昔には暴風の爲可惜家を潰されて翌歳には一番の兄さんが戰死なされ續てゝ加へて二ヶ年の凶作漸く皆樣の御陰で凌ぎましたが今年こそは五十四部の豐年踊がして見たいとお父さんが仰しやられました。

○朝の鎌倉　備後　田邊竹葉子

今朝は風が涼しく濱が靜かである、前は相模灘の青海原で大島諸島が遙かに浮んで描いた樣に見え、葉山邊の緑がゝつた木立の間からは白塗りの西洋館がちらほら見える、今飯島岬の横手から漕ぎ出てた小舟を眺めて居ると、後ろで馬子が突然鑑にならぬは浮世か金かホー／＼……

○朝顔　横濱　山崎京子

海水浴から歸つて來て、久しく問はなかつた、庭の花壇を見た、ダイヤモンドフラワーやシヤクリスが、美しく咲いて居る、其側の垣根に葉ののびた朝顔がある。

○或時に　和歌山縣　池見澄香

私は元來の一人娘ではありませんが續きつゞいた兄姉の夭死に涙ながら

斯麼身の上となつたのです、夕暮れなんか淋しい時にお母樣は私を抱きしめなすつてお前は池見の礎だよと仰しやいます、て私は三人分の孝行を心にかけて半生を送らうと思ひます。

○見合　下野　栗原くに子

私は明日見合に行くのだと母樣に言渡されてから心配で寐つかれませむてした、翌朝は暗い内から起き出して顏をふく、白粉をつける、着物を着ける、髮は昨日結ばせて置たから出掛にちよいとなでつけて媒酌人に連れられて行く。

○池さらひ　神田　大江春柳

今日は日曜だから池の水を換へようと云ふので車夫の藤八を呼び寄せお酒を呑み得る丈呑ませ其勢を以て池をか換へさせた處「フナ、コヒ」が澤山獲れるので面白がつて見に出て來る先生はじめ、奧樣、御孃樣、下男、下女。

○或る夜　遠江　すへ子

清い月に涼しい風、雲のないのは今夜の幸福です。麓の寺の僧の學ぶ燈火も、たま〳〵に見へてる。習い初めの笛の音が妙に聞こへた。老の人の集まつて御念佛を唱へる聲がいと悲しく、心が靜まつてきました。

○萩の露　淺草　渡邊とよ子

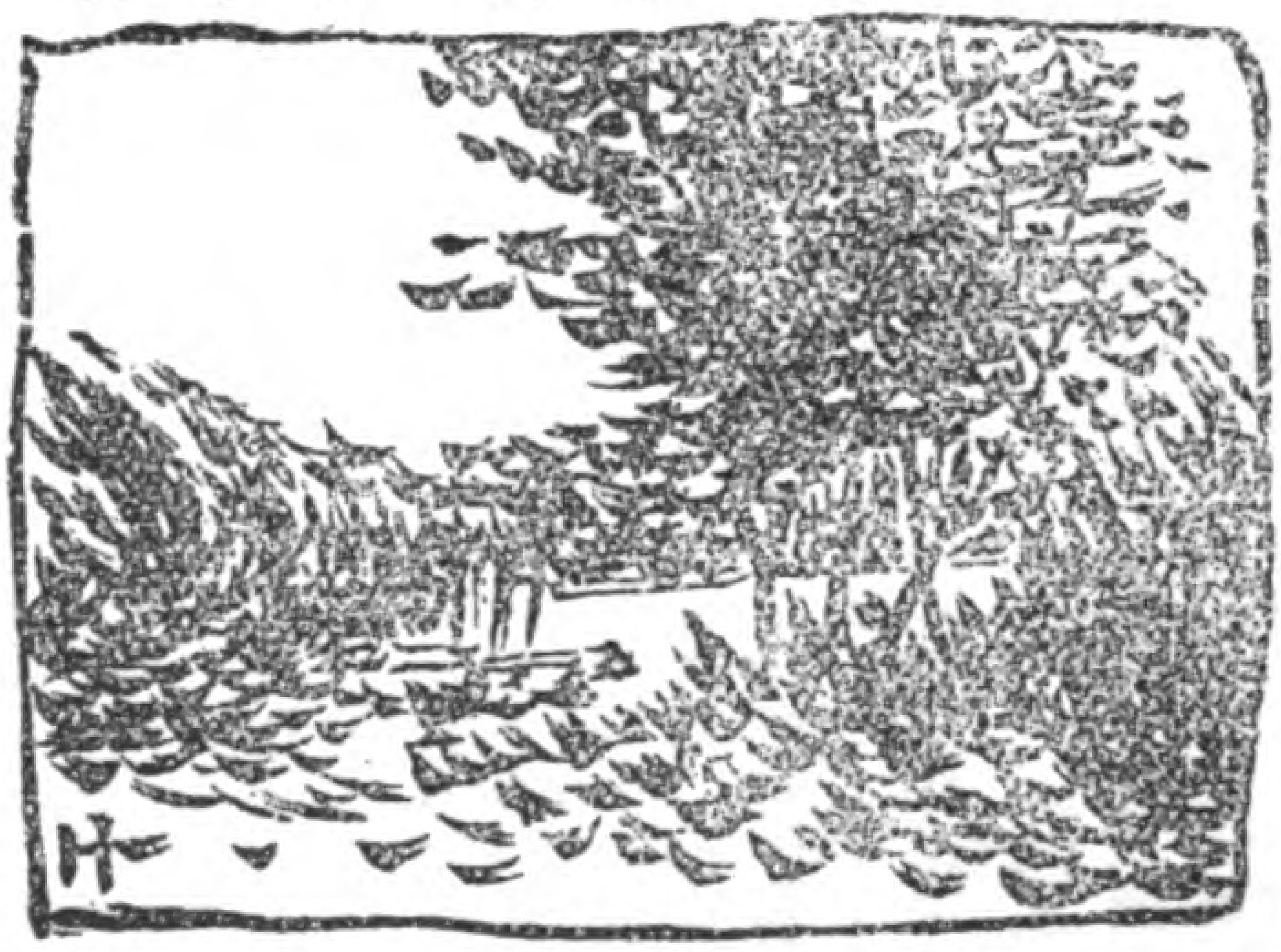
月の出た萩徑を辿つて行くと、四邊は悉く露で飾られてある、白いの、紅いの、背いのが皆月を宿して、風が一しきり渡つて、おゝこぼるゝ玉の美しい事。

○避暑休み　熊本縣　岡本琴

避暑休業なので兄さんは臺灣から次の兄んさは東京の女子高等師範から妾は神戶の女學校から皆々樂しい故郷に揃ひ瑞々しい庭園の景色を眺めつゝ御兩親樣のお膝元で各地のお土產話し。

○通ひ路　伯耆　HY

毎日々々桑摘みに通ふ山松並木涼しい風は彼方日本海から吹き上げてサラサラサッとこゝ通ふ私は何時も文壇をひらいて居る果實園に通ふ節子さんは後れて一心で見て居る私の眉をトッとピックリした私は本をかごへ入れて居た。


はやし　下野　日下田

○夏の夕　大阪市　柿本やす江

太陽がつい今西山の彼方に落ちたばかりだのに最早田の面森家などは薄りとなつて河の向ふ岸の藪の間からちら〳〵と燈火の影が見え出した折から空を烏の二つ三つが樂しげに羽音も靜かに涼しい風に送られて彼方の森に小さく消えて行く。

○私の親友　丹後　鹽見千代子

文才に秀でゝ愛情の深い春子樣三百里の遙かなる所に、傳導し給へる光子樣しつかりとして優しい重子樣、寂樓の好きな千勢子樣、年は皆、お揃ひの二十一なの。

○夕立　秋田縣　白百合樓

東風吹いてあやしき雲、例へなば羊群の走るに似たり。村人の雨乞の甲斐ありて雨降り出す、折しも電閃一斜、太鼓亂打、急雨窓を破る、弟隱れぬ、猫飛びぬ、祖母の念佛亂調、香烟一縷父笑ひぬ。

○花の姿　大阪市　夏萩

凉風じみな縞絽に古代紫の袴胸高く紐しむるは高尙優雅に、海老茶袴を裾長くはき流して白絣に時色の袖口ちらと見するもげに花の心地す、又越後上布の紺絣に紅の帶出して葡萄鼠の袴丈長く垂らしたるは女神のごとし。

○我が家　藤代町　よね子女史

我が家は筑波の下、朝夕舟唄も聞える、父は町長、母は、裁縫の師匠、兄は小學校長、私は二三の會の會長です、毎週土曜と日曜は、四人が役員となつて、町内の女子供を集め、お伽會や音樂會を催します、將來は此の會を擴張して、縣下の風俗を改良する覺悟です。

○土用干　廣島市　百代子

おゝ好いお天氣、土用干をしませうと衣類や書物を一々取り出して居るとふと本箱の底から出た一枚の寫眞。見れば母さんが妾を膝にのせて寫しなさつた時のです。あゝおなつかしい母様はなぜ生きて居ては下さらぬだらうかと思はず袖をぬらしました。

◎初　秋　　靜岡縣　佐野まさを

ある夕でした姉と二人で涼み臺に上つて瑠璃色に晴れた空を仰いで居りますと何處からともなく涼しい風が吹いて來てあちこちから立ち昇る飼の烟を卷き隣の桐をそよがせました。

◎妾の村　　下毛　菊　子

妾の村はたゞの九戸ですが、今年赤さんが五人生まれました。御嫁に行つた人が二人、來た人が三人、其れに今年は米が大當りで、それは〳〵自分ながら羨ましい程、平和です。

◎持合ひ　　中谷　近藤くら子

早稲田の大波小波は、見渡す限り黄金色で、山根に馬の嘶く聲聞え、空は空高く飛んでゐる、今日この野遊に、五人の持合つたものは、初茸の五目・栗飯お萩洋菱海苔巻であつた、先づ食べてから、投票すべく約束して、詩歌に銘々に思々の想を凝らした。

◎紙　灑　　岐阜縣　大西繁子

君子様は夏休みで、東京からお歸りなさいました、紫の袴に赤い編み上げの靴、夫れに眼鏡さへお掛けなすつて‥‥あゝ妾若しお目に懸つたらどうしよう？　いやしい紙灑姿、別に恥かしいとは思はないんですけれど。

◎水車番　　羽後　石井豊子

彼處に避暑旅行此處へ海水浴富士登山と思ひ〳〵の浮世はなれた遊ばさるゝ御令孃様達には御存じもありますまい水車番の樂しみ、ガタンドタと水煙の立毎に眞白なお米が出來る。

◎鳩の魂　　東京　梅　子

私の可愛いゝ鳩のお墓に一所に埋めてやつた豆がだんだん延びて白い花がさきました。てるとどこからか白い蝶々がひら〳〵飛んで來て毎日遊んで居ますこれは蝶の魂ではないでせうか。

◎雨乞祭　　岩代　雪　子

日照りに餓死なしとは古人の言葉乍ら今年は分けて暑氣が强い先月の初からは雨一滴降らず今十日も此天氣が續いたなら田畑の物は皆涸死するだろうと毎夜々々村中て鎭守さまへ集まつて雨乞を祈つて居る太鼓の音ドコドン〳〵。

◎活　動　　岩代　瀧谷てる子

朝顔の一朝の美、櫻花三日の榮、蟬の一日の活動、人生五十年の活動、何れも日月の短長に關せず其目的を遂し得て始めて活動するを得るなり。

◎蛙　　安藝　りよ子

お湯あみをして居ますと、蛙がのつそり〳〵はつて來ました、何だか可愛くつて、みみづを取つてやつて愛して居ましたら此頃ではもう足音迄ちやんと知つてますのよ、それて妾は蛙さんを伴れて散歩致しますが中々面白うムいます。

◎燐寸の箱　　神戸市　高橋紫峰

夏日炎天、休暇中四十五日の別天地を、やれ避暑旅行だの、海水浴だのと、山や海へ逃出す間に、私等は涼しい木影に妹を相手に燐寸の箱を張ります。よく十一二の少女すら一日に二千は張りますのです、而して千張る手間代は十錢てす。實に勞働は神聖て尊ひものです。

◎知りたい心　　廣島縣　今西京子

あのおたづね致します、私しが金屋て生活する時、又、天女と共に空中て舞ふて居る時、死んだ時、こう三つの心が知りたいのですが、どうか賢明なる諸姉様お敎え下さい、お敎え下さつた方には、粗末な物てすが、浦島太郎が持つて居た、玉手箱をお授け致します。

◎看護婦　　盛北　峽よし子

婦人の職業には判任官もあれば女敎師もある交換手もあれば女工もあるが妾は看護婦程清淨潔白な職は無からうと思ふ何となれば病の爲めに日日悶ゆる人々を赤心から慰めて重き病も忘らせるてはないか實に天使の樣な職だと云ふ世の諸嬢よ如何然考な傾す。

○向日葵　南品川　福澤夏子

庭の向日葵と丈くらべをして居た妹の晴ちやんが、椽側に居た私に「姉ちやん私なぜあの向日葵の樣に早く大くならないのでしよう」、と、晴ちやんは今年六つて有る。

○朝顏　札幌　山田鈴

寢苦しき夏の夜、曉をまちかねて庭に出ると、マア、美しい事、水晶の樣な露を花瓣に宿せて今咲たかの朝顏、

○冷たい湯　京都　嚴子

暑さの御障りて母樣が昨日から寢んで居られますから、夕方御飯たきをしながら行水の御湯にと鋼盥に灰をつぎそして御菜のお芋の皮をむき漸々の事て御飯も御菜も出來上りましたからさあ是から行水をと御湯を取らうと蓋を取つたまあ如何仕樣、灰はまつ黑て水は元の冷たい儘。

○花流し　三重縣　すみれ

今妾は三瀧橋の上に立つてやさしき撫子の一花を水に流したのてあるあゝ其の花は流れてつひに波靜かなる伊勢海にただよふてあろう

○押花　岐阜縣　小山殘香

私の祖母樣はいつも夕方から私を連れて野へ行つては愛らしい草花を摘て來てそれを押花にするのを樂んで居りました、亡くなられて早や五年今も花のみは殘つて私の文庫の中に……私はそを見る度に亡き面影の忍ばれて知らず花の上に露の玉を殘つゝもやどすのです。

○祭　越後　山口千代子

今日は鎭守の大祭てある芝居もあり輕業もあり見世物もあるので皆は樂しさうに行くのてあるが妾は母に女子文壇を讀で聞せるのが一番樂しみてある。

日吉神社　大坂市　阪井彩月女



○お友達　富山縣　梅雨女史

雪江さんはよく怒ずれば怒ち熱し、怒らさむる輕浮な所謂多血質のお方。愛子さんは神經質なので、常にくよ〳〵思つて居らしやるが温良なお方。芳子さんは沈着て、聰敏て、いつも學科は優等。信子さんは活潑で庭球の選手。

○虹　小樽　高橋喜美子

紅白の薔薇を挿してお茶をたてゝ居るとたん、大きな雨がばら〳〵とやつてきた、と思ふ内に植込の青葉に露を殘して空は清い、今しがた增毛山に入り掛る夕日を受て、日本海を一渡しに七色の帶があらはれた。

○小供の勇氣　神戸市　三木久仁子

夕立がやつて來たので、使ひに行つた妹を、迎ひに兄を遣つた、暫くすると、篠突く樣な中を、兄が風呂敷包を抱へ、妹は二人の下駄を提げて、平然と唱歌を唄ひながら歸つて來た。

○時間割　北陸　清子

私は一晝夜を幾分かしまして時間割を作りました。てこの一日から實行しつゝあるのですが、色々の事情にさまたげられて誠に行ひがたいものです。

○少女の胸中　德島縣　若槻淑子

十二三の愛らしい女の子が、柳の木にもたれて、鏡の樣な池の面に、緋鯉が親子むつまじく泳いてゐるのを羨ましさうに眺めて、星の樣な涼しい目に一ぱい涙を浮べてゐるのてす、あゝ此花の樣な美くしい少女の小さい胸の内にはどんな悲しい事が潜んでゐるのでしやう。

新笑話 編輯局選

三等

○芝居 甲斐 矢壽子

三人の女學生そゞろ歩きして芝居の前に來かかり
甲「あなた芝居へ這入りませうか」
乙「えゝ見て行きませうあなたいかゞ」と丙生に向ふ
丙「私だつて大賛成だわ」
甲「だけども私おあしを持つて來なかつたわ」
乙「あら私も」丙「おや私もよ」

四等

○ひとり 長崎市舘内三番戸 山口蝶子

母が息子に向つて「だつてあちら樣にもお孃さんお一人しかいらつしやらないんぢやないか」
息子「私はそのお一人て澤山てす。

五等

○盗賊を捕る網 小石川 未成女史

田舍の爺、野良より歸りに山の木陰て、ハンモツクに寢てゐる書生を見て「エレイ開けて來たもんだナア、フーン、泥坊を捕る網だな、うまくひつ掛りやあがつた」

○悪い花 本郷 朝井千とせ

甲女「大層綺麗なお花ね」
乙女「エーお友達が二本持つて入らしたのを漸く一本頂いたのよ」
甲女「アラさう、でも此の花植て置くと病人が絶えないつて」
乙女「それじや私捨て仕舞ひませうか」
甲女「捨る位なら私に頂戴な」

○寫眞 韓國 吉谷美津

寫眞師「ハイ寫しますから動かないで下さい
田舍女「アツ一寸御待ち下さい、梅やその麝香を持つて御出て

○御同感 横須賀 村上濱子

甲女學生「私今度の修身の點はきつと甲よ」
乙女學生「まああんなむづかしいのがよく出來てね何と答を書いて」
甲「先生と御同感なり」と書いたのよ

○夜だから構はぬ 山形縣 米地とき

『あなた提灯一ツ貸して下さい』『御貸し申すのも可いが非常に汚なくつて』『なに夜だから構はないや』

○兄と妹 千葉 丁子

鏡臺の前に座つて熱心に化粧最中の妹に向ひ
兄「靜さんお前大工か左官の處に嫁くがエヽヨ」
妹「アラ兄さん私お嫁になんか行やしませんよ、デモ大工か左官なんてあんまりですワ」兄「だつていつ見ても靜さんはヒサシのふしんか、カベ塗りして居るてはないか」

○田舍者 佐渡 谷川桂月子

田舍者郡會の郵便局へ來りて、
田舍者「切手を下さい」
局員「どのようなのを」
田舍者「手紙にはるのを」

○お灸 千葉 木村せつ

母「坊や御前障子へ燒穴なんかこしらへて父樣に申上ますよ」
坊「だつて母樣障子が僕の云ふ事をきゝませんから今御灸をすへてやるんです」

○電話口 南葛飾 牧野松操子

田舍者電話口をいつしようけんめいて眼をこすつてのぞいてみていた「伯父さんそれは電話口よ 田舍者「どうりてちつとも顏が見えれえと思つた」

○マジツク 麻布 松崎みどり

若旦那「僕は昨日演伎座のマジツクを見に行つたが隨分面白かつたよ」
手代「へーそれても私がまゐりました時は手品をやりましたよ」

○釜山 神田 もと子

朝鮮へ出稼に行つてゐる息子の居所を人に聞かれた田舍の親父「はい先達手紙が來ましたがわしにや讀めましれえから隣の旦那樣に見て貰ひましたら何でもはあかまやま(釜山)ちう所ださうてがんすよ」

○雨漏り 上總 三橋愛子

細君「オヤコンな新らしい家て何所から雨が漏るのかしら」女中「アラ家根から漏るのですわ」

誌友倶樂部

文學顧問

問　能く和歌などに、用ひます「よしきり」と云ふのは、どんな鳥でどんな聲をして鳴き、又どんな處に住む鳥です、(備後あふち)

答　剖葦(ヨシキリ)は川の岸などの葦の中に鳴く鳥で、けけし、けけしといふやうになきます、葦の莖の中の虫を捕つて食ふ鳥ださうです

問　佛敎の語の字典有之候哉文典の書は何が宜敷候哉(久留米市紫花)

答　佛敎辭典は未だ出來ません、文典は大槻文彥氏の日本文典が矢張最も勝れて居ませう

問　記者樣御地に地歷專門の學校がありますか(濱松在の一少女)

答　ありません

問　(一)御地の官立音樂學校へ、高等女學校三年修業で、入學出來ませうか(二)音樂學校を卒業すればすぐ、師範の敎師が出來るでせうか(三)音樂學校の修業年限は、何年ですか(四)音樂の雜誌で何か好いのは、ありませんでせうか(音樂生)

答　(一)高等女學校二年修了の者は本校豫科に入學出來ます(二)出來ます(三)豫科一年、本科三年、別に研究科に入れば二年です(四)「音樂」と云ふ雜誌があるやうです

問　「玉蟲」や「塔影」のやうに新體詩を多く集めた書物が未だ外に何册もありませうが其書物の名と發行所等を御教へ下さい(加賀、角本あけぼの)

答　新體詩集は澤山ありますから迚も此處で皆お答へ出來ませんが分り易さうなもの二つ三つを言ひます藤村詩集(定價一圓、春陽堂)暮笛集、ゆく春、二十八宿(以上何れも五十錢位、文淵堂)

問　てにをはの意味(小石川、一賤女)

答　凡ての歌文の中、或る語と或る語とのつゞける場合に用ゆる詞、それで獨立した意義の無い詞をいふ、例へば「花が咲く」の「が」「く」の如き詞はてにをはです、今の日本文典の大部分は以前のてにをはと同じものです

問　新歌謠を學ぶに一番分りやすい初學者適當な本の名御敎へ下さい(下總三橋)

答　新歌謠の獨習書はありますまい

問　小石川區竹早町の女子師範學校本科に入學せんとするに學術はともかく身體も強健なれど背丈低き時は不合格となるや伺ひたし(東京たつ子)

答　規則には身長に就いて一定の寸尺が無いやうですから强健でさへあれば、少し位低いのは通過するでせう、なほ實地に問合せて御覽なさい

問　初心者の新派の和歌及び新體詩の獨習致しますに適當な書物は未だ出來ませんか亦新派と舊派とは何所が違ひますか敎へて頂戴よ(筑前夕雲)

答　獨習書に據るより、新派和歌集、新體詩集を見る方が爲になります、新派と舊派との相違は一言に說明しかねます、舊派には保守の風があり新派には進步の希望があります

問　記者さんに伺ひます、新聲と文庫の發行所と代價を一寸御敎へ下さいませ、(千葉縣齋藤秀子)

答　新聲は京橋區南鍋町隆文館發兌定價一五錢、文庫は本鄕西片町內外出版協會發兌定價二十錢

問　新派和歌の始めはどなた樣ですかそして明治の今日では晶子樣が始めてですか(濱田、三明千鳥子)

答　明治の文壇に新派和歌を始めて起したのは與謝野寛氏です

問　記者樣私は手紙を書くのが拙くて困りますの、どう云ふ本を練習すればよいでしやうか何卒、御敎下さい(白菊)

答　手紙を書くのに上手、下手は餘り無い筈で、强ゐて上手に書いた手紙は却つて手紙として劣等です、挨拶の書き方ぐらゐ覺てる爲なら手紙用文風の書物が澤山あります、嘗て本紙に紹介した女子書簡文(寶文館發兌)は何うです

問　記者樣外國へ出すにゑはがきは四錢と書いてありますが封筒へは何錢の切手ですかまた、よこもじでなくてはいけませんか(瑞穗村、紫葉)

答　外國郵便の封筒へ入れた書狀なら普通十錢です、勿論歐文でなければなりません

問　自然派と寫實派との區別をお教へ下さいませ

答　自然派は進歩した寫實派とも云ふべく、明確な區別はつきませんが、自然派と技巧派とが最近の二流派です

問　私は外國語を解する事が出來ないで不幸にして原書を讀むことが出來ませむダンテの「神曲」希臘羅馬の神話等譯したのがございますなら何卒お教へ下さいませ(以上朽葉子)

答　ダンテ神曲の完成した譯は見ないやうです、斷片的に紹介されたものは幾許もありませう、其中で上田敏氏の『ダンテ』(定價一圓位、金港堂發兌)が好いでせう、神話の飜譯には「天馬」「胡蝶の少女」の二書があります

問　記者樣敍事文と抒情文との區別を敎へて下さい(つゆくさ)

答　敍事文は事柄を主とした文、紀事文、寫生文など是に屬し、抒情文は感想を主として書く文章です

問　私は或學校の試驗を受る者ですが音樂家幸田先生と下田歌子先生の住所を御知らせ被下ませ、(白すみれ)

答　幸田女史は小石川區表町、下田女史は麴町區永田町です

問　記者樣まことに御手數をかけて濟みませんが水野年方樣と鏑木清方樣のお住居をお教へ下さいまし(弓町忍子)

答　下谷區清水町十九水野年方、日本橋區濱町二丁目十二鏑木清方

諸嬢と記者

○記者樣、私は今まで愛讀者の一人てはゞ御座いましたが投書を致すのは今度が始めてゞ御座います。どうぞ御敎導下さいますやう願ひます。誠に未熟てすが文學を好むことは恐らく諸姉の君にまけないてせうと存じます。本誌の文章は敍事文ても抒情文ても大方口語體のがのせられてありますが、その方を奬勵して居られるのてすか伺ひ度う御座います(萍の花)(記者曰、必ずしも口語體を奬勵し、文語體を輕忽にすると云ふ譯はありません、內容、技巧、共に優勝な作を選拔する方針てす、併し或る種の文は口語體が多いと云ふやうな事は天下の大勢てす)○記者樣始め諸姉樣先頃の暴れに おさはりもありませんてしたか當地は水道破壞のため斷水て時節柄大に困却致しました(横濱淸水ふき子)(記者曰、あつても困り、なくても困り、それにしても神が人類を養ふべく、水や火をその種々に賜はることは平素に於て深く感謝せねばなりません)○先生、妾しは本年十八才父母は美術學校へ入學せよ、と申しますが妾しは音樂學校を望みますさて、父母の御言葉に從つた方がよいてしようか妾しの想ふ學校に入つた方がよいてしようかどうかどうか次號て御答をねがいます、(東京小路卷子)(記者曰、これは少々困りました、能く双方の申分を聞いて見ないと確乎たる判斷は出來ませんが、おほまかに言へば自分のやらうと思ふ學校に入つた方が好いてす)○秋の下葉もいろづき初めて詩人そゞろ惱みの秋とはなりましたが記者樣には御變りはございませんか御伺ひ申しあげます 有馬は此頃大變よいけしきてございますが歎幸薄い私はこれを記者樣に御知らせすることの出來ないのが誠に殘念てございます何うか御ひまの時は湯浴み旁々御遊びに御越し下さいませ(有馬鈴蘭)(記者曰、猪名のさゝ原風吹きて、秋は津の國の北なる山にも來るてせう、記者未だ有馬を知らず、そゞろ枕頭臥遊の念に堪へません)○記者樣私は本月初めて愛讀者となりました私の兩親はまことに年よりて御座いますのでこれ迄雜誌などゝ云ふ物は買ふた事はありませなんだ隨がつて投書などゝ云ふ事もした事がありません御恥しい事てすが私は小學二年より登りませんので皆樣のように上手にはとても出來ませんがこれから一生けんめいに作つて見ますから惡いところは云ふてちようだい本字をよけい存じませんのてかな澤山て堪忍して下さいませこれてきそくにはづれてはをりませんか御伺申升(大坂淸子)(記者曰、此文章をお書きになつた位てすから別に人前に出てはづかしくありません、雜誌と云ふもの初めて御取りになるさうてすが、見ると好きになつてやめられないものてす、幸ひに愛讀をたまへ)○記者樣私は今年やう〱小學を卒へたばかりの少女てすが、始めて作つて初めて投書して見ました新體詩秀逸にお入れ下さいましてありがたう存じます、お蔭て一晩眠られなくて翌朝お父さんに大目玉頂戴致しました、是からも種々作つて投書しますから、可笑しくても御笑ひ下さらぬやうに、(神戸市、平林たつ子)(記者曰、安眠を妨げた罪は記者にありますから、此次はお父樣に記者を叱るやう仰つて下さい、猶記者は每月一晩づゝ眠られない時があるやうに祈ります)

○記者樣、和歌俳句新歌謡新笑話短文など必ず一人一句に限りますのですか此頃度々御伺申しましたが投稿規則でわかるとのお知らせで直ぐ見ましたにそれまでは載へてありませんから何うぞ此度こそ哀れと思召何卒載へて下さる樣願ひ上げます(羽前杉葉女)(記者曰、成程然うでした、凡て一種類に一人一章又は一首づゝです)○記者樣妾も愛讀者の一人です以後諸孃に永久的の御交誼を御願ひ致したいと思ひますどうぞ御多忙中恐入ますが御引合せ下さいませ(上毛都久子)(記者曰、御住所を明記してないと御交際のしやうがありません)○記者さん私は堺女學校の只今は四年なのです今日從姉の綾子さん處にいつたら机の上に女子文壇が載つてありましたから借りてよみました もう愉快でなりませんどうかあたしも誌友の御仲間入して頂けませんかそして出しましたらどんな下手でも載せて下さつて御慕れいたします(堺市細田房子)(記者曰、どんな下手でも載せるわけには行きかねます、併し自分で下手だと思つてゐても好いのがありますか知れませんから投稿して御らんなさい)○福岡、磯部巨久子。筑前、中泉千代子。岩代、高野よれ子。陸前、宮崎英和子。高知縣、樟涙子。丹波、みどり。愛媛縣、如仙。長野縣、町田さみ子。横濱、石井芳子。伊勢、一少女。上總、松ヶ枝。大栗せん。伊勢、花王子。三田、初音子。鹿兒島縣、小牧岩江。京都、大下紫子。しづゑ。五日市濤子。濱田町、三明ちどり子。新潟縣、山田たか子。大分町、篠田緻窓子。神奈川縣、木村はる子。尾張、不明女史。大阪、中道秋子。林ぎん子。神奈川縣、渡邉佳根子。山口志都牧。陸奥、直子。東大久保、玉波。伊勢、山川つい子。秋田縣、高橋芳子。伊豫、田舍女。沼津、孤村。福岡、吉田白梅。霞子。田村富美子。西島、一女子。かれ子。なでしこ。梅香。越後、山口千代子。一葉女史。佐賀、一少女。内山ふみ子。奈良縣、森本あさ子。紀伊、川西よれ子。京都、玉井露子。鹿兒島、白つゆ女。備後市岡久子。周防、紫雲女史。三河、初子。福島、露子。岩代、時雨女。彥根、日比定子。以上の諸孃からの原稿は不殘拜見致しましたお答へ致さないことはお尋ね通りで宜しいのです投書についての質問は卷末の投書規則に精しくありますから就いて御覽下さればよく分ります。(記者)▲投稿規則に就いていろ〳〵お尋ねの諸孃がありますが一々お答へする迄もなく御覽になれば分りますけれど其中の二三に就いて茲に一括して答へます、投稿は凡て一種に就き一人一章又は一首限りです同じものを一人で幾つも出すと皆沒收します、各種原稿の同封は差支なし、題の上へ小說とか敍事文とかは必ず書く事、誌友倶樂部の外原稿をハガキに書くのはいけません、句頭の下一字飛ばすのはよろしい、寫眞は裏に乞返送とさへ書いて下されば返します、投稿を書く紙は半紙、罫紙、原稿紙皆差支なし但し卷紙や洋紙はいけません、(以上記者)

寫眞編物交換

○皆樣のうちに、栞送つて下さる方はありませんか、何かお禮には乾度相當のものを送ります(下總成田郵便局内秋山花蕊)○妾しはれ留れく友垣の寫眞を集めて居ますから御交情致さる方は御送り下さいな繪葉書や種々な編物も併せて御願申し升よすぐ御禮いたします早い御方には珍品の繪葉書と寫眞を送ります(栃木縣鹽谷郡阿久津村石末一三九小川美喜子)○諸孃樣妾は隨分繪葉書を集めたのですが、今はもう倦きて了ひましたから皆樣の御手製の栞と交換して頂き度いのです。(東京下谷區徒士町一丁目七番地橋本波子)○諸姉上よ妾も愛讀者ですがどうぞエハガキ寫眞玉章あみもの等の御交換を御願申ます(山梨縣東山梨郡鵜瀨村天野茂子)○人口三萬二千の少都會に淋しく暮します妾にも御見捨なく寫眞栞繪葉書何れなりとも交換して頂戴な、殘らず相當のもので返禮します、尙立山登山紀念スタンプ付を一枚づゝ添えて差し上げますどうぞ御願ひします、(高岡市通町三十一番地北本歌子)○誌友の諸孃樣私は鶴見の總持寺移轉地の邊りに朝夕さびしく日を送る不束者ですが皆樣と永久に親密の御交際を願ひ度いのですそれで寫眞を添へて玉章を御惠み下された先着十五名の方には綾織絹のふくさと私の見苦しき寫眞を添へて御返禮いたします尙最先着六名の方には臺灣總督府發行の紀念繪葉書を添へます(武藏國鶴見局配下旭村鶴田利)○皆さん、編物や、寫眞繪葉書など賜はりて、いと〳〵ゆかしく、病も打消えし如く心も清々となります厚く感謝しますよ、猶以後も、編物などの交換を願ひますよ、(山城國相樂郡笠置局區內松田方みや子)○上等繪はがきの御交換を願ひます一番上等のを撰び五名丈へ相當の品と失禮ながら妾の寫眞とをお送り致します(大阪親南通三丁目長手方石神敏子)○諸姉樣何卒繪葉書や寫眞やしなりの御交換を願ひます、御返禮には恥しながら私共姉妹

の寫眞を差上ます（石狩國雨龍郡北龍村字和松本勝子）〇編物や寫眞の交換し願ひます編物御送り下さつた御方には見惡き妾の寫眞を添て返し致します（京都府下相樂郡高山村字田山有野良子）〇誌友の御なさけ深き姉上樣方何卒繪葉書交換して頂戴なそれから御姉樣のお寫眞を御惠送下されたお方先着六名樣には私のを差し上げてよ　そのかはりおたふくよ……（麻布區日下窪町八番地伊東房枝）〇皆さん編物、肘突、栞等送つて下さい、直に繪葉書で御禮を申し上げます（芝櫻川町一九小林方いちかは）〇誌友の姉上樣妾しは病氣の爲め女學校を中途にして當地に居るものです何とぞ繪はがき玉章などの交換をして頂戴御禮として先着十五名樣に不束な妾しの寫眞を添へて御返しいたします（神戸市橋通り四丁目十一ノ四十二永戸ます子方民子）〇賢明なる諸姉樣絹製の寫眞掛の御交換を願ひます第三着迄は醜いけれど妾の小影をキット狹めて添送致します（香川縣木田郡川添村元山町佐野紫子）〇誌友の姉上樣妾しは岡山の女學校を卒業しまして當地へ母と共に歸宅して來ました何とぞ誌友のよしみを以て以後繪はがき玉章編物などの交換して頂戴先着二十名樣丈けは妾しが十四歳の時より本年十九才迄に寫しました寫眞が有りますからそれ〳〵樂しき繪はがきに添へて御返しいたします（神戸市奥平野町二六九番ノ八〇中西光子方梅子）〇懸賞よ私は三村裁縫女學校に通がくする者ですがどうぞ御手紙下さい御禮は必ずいたします造花リボン御不用の方は御送り下さい　先着五名には繪葉がきて御禮致します（千葉縣東葛飾郡　船橋町九日市川島市太郎方はつ子）〇御寫眞お惠み下さいな妾も先着十八名へ醜いのですが絹製の寫眞掛を添へて早速御禮致します後着のお方樣へは長野高等女學校卒業の際紀念に撮つた寫眞を必ず〳〵御答禮いたします（長野縣下高井郡日野村三百〇四番地中村ま佐枝）〇私にヒザツキか寫眞掛をお送り下さる方はありませんか私は當地の大展覽會に高評を得ました美術造花か縫トリかを以て御禮致ます又お寫眞下さらば私の醜いのに編物を添て御禮致ます（長野縣下高井郡延徳區更科部中村まさ）〇誌友の姉君樣よ、妾は技藝科を出たばかりの不束者ですが何卒編物エハガキの交換を願つてよ尙玉章も拙ないながら御返事は致します（兵庫縣川邊郡立花村大字大西六番地淺尾節子）〇諸姉樣方の、御寫眞に御地風景寫眞又は編物などをそへて御送り下さいな妾もきつと、寫眞に風景寫眞又は編物などをそへて御送りします（大阪府下南河内郡西代奥田よし枝子）〇誌友の諸姉樣方の御寫眞やおあみもの御送り下さいな、御返禮として妾の寫眞と大津繪一組差上ますよ（滋賀縣蒲生郡西大路村大字西大路久村證道方武子）〇繪葉書や御寫眞の交換を永遠に願ひます、先着十名には特別に他の品を添へて御返禮致します（京都府相樂郡高山村大字田山、森西松子）〇皆樣永久に御交換を願ひます十日迄着きました内或る方法で五名丈へ妾の寫眞をお送り致します（大阪府堀江裏町木村艶吉方啟子）〇繪葉書や天然の御交換を末永く願ます繪葉書には自作の名句諸姉樣の寫眞等を送つて頂戴な妾も自作の俳句、寫眞を以て御禮を致します（芝區芝公園地三ノ二智間隆子）〇誌友諸姉樣!!!何卒スタンプの交換を願ひますこれから寫眞の交換もして下さいナ、若次第見惡いですが妾の寫眞をお送りします（播磨國揖保郡千本村本佐野方前田秀子）〇誌友の御姉樣よ「寫眞」又は「編物」を御惠み下さいな御送り被下し方には私の寫眞に繪葉書をそへて御返禮いたします（河内國南河内郡長野村西代角野貴美子）〇誌友の諸姉樣よ、私に「造花」「絹栞」「肱突」「寫眞掛」等御送り下さいな、そして編物のひな形もね、御禮は必ず致します（大阪府東成郡榎井村野江、木西時子）

圖書換讀

〇乳姉妹後編、伯爵夫人、濱子、想夫憐御持の方は松山嵐、紫手綱、楠正儀、兄の仇其他内國少女鏡　外國少女鏡と御交換下さい伏して　お願ひ致します、（岡山縣小田郡大井村守屋醫院内守屋小萬龜）〇「諸姉上樣方」私のところに、女學世界、婦人世界、文藝倶樂部（二た昔もあり）女鑑、國民中學會講義錄、少年界、など不要なのが澤山ありますから諸孃のうちに、晋海、金色夜叉其他御不要なら御取換くださいＩ（福島縣西白河郡矢吹町郵便局隣まさ子）〇今妾しの手許に不如歸、血の涙、綺師の戀、町女房、夏子、紙子、二人ミナシゴ、月に立つ影、等の小說が不用になつて居ますから當樣の中で上等の繪はがき五枚に御寫眞一枚を添へて御送り下さつた方に御望みの者一部差上げます（京都府加佐郡由良港一二九荻野靜枝）〇誌友の姉上樣妾の手許に小說後の世新小說文藝倶樂部がありますから皆樣の内で破戒お持ちの方は交換して下さい（三重縣鈴鹿郡龜山東町尾崎千代子）〇ほとゝぎすの新體詩御もちの方は御送

り下さいまし御禮はきつといたします（神田區猿樂町一ノ二高橋菊衛方高岡もと子）○私は小說、二筋道上下、吉丁字上下、富美子夫人、ハイカラ令孃上下、夫さだめ上下、戀學生、有情無情などもつて居りますが皆樣の中でなにか他の新刊小說と御交換下さいます方が御ざいますならば何卒下名へ（尾張國知多郡龜崎町井口白百合）○皆樣エハガキの交換ねがひます小說女心、女波男波、雲のゆくへ、新不如歸思ひ出の記不用になつて居りますから濱子、己が罪、火の柱、血の涙、魔風戀風と交換して頂戴なほ他の小說及び女子遊學便覽御送り下さる方にきつと其以上の御禮致します（すゞりが岡の一少女）○皆さんの內で菊池先生著小說緋子の空御不用の方がありましたら妾に御惠み下さいませんか御禮として矢張菊池先生小說賢花娘に女學世界を添へて必ず差上げます（愛知縣名古屋市長島町二丁目中島まさ子）○妾は、金色夜叉、ほとゝぎす、緋子、己が罪、乳姉妹、二人娘。夏子、な持てなりますが、親愛なる諸姉樣の內に交換したいと思召す御方は相當のものが送つて下さい先着十名には、すぐ御送り申します（石川縣羽咋郡中甘田村字福野、岡部よし子）○私の手元に女鑑女學世界、女學生訓、女子文壇、文藝倶樂部、ムラサキ等二十冊ばかり不用になつて居りますから皆樣の少女世界外何んても宜しう御座いますから御交換下さい（千葉縣安房郡北條町六軒町隱倉文子）○私の處にコブシ、はつ姿、伯爵夫人、濱子、うろこ雲、朝晴が不用になつて居ります希望の方は繪葉書封入にて御申込み下さい、雜誌御惠み下さいました御方へは栞にて御返禮致します）肥前國杵島郡楢下村山崎絹子）○新作文、紀行文、美文組立法、言文一致文例の三、淡紙がとれたけれども文學同志會の斷選絕壁、臥龍梅、三千里、小說青葉若葉上下、水滸傳物語の上、言文一致名家文庫、中學世界、はがき新誌、中學文藝、中學雜誌、女學世界定期增刊當世交際社會、秀才詞林、絲葉紅情右の本がありますから相當の雜誌繪物、栞、寫眞、最も上等な繪葉書と御交換を致します（仙臺市南川町三番丁高橋あき子）○皆樣の中に自然と人生、思出の記、花守日記、順禮紀行、第一懸賞文集其他高尙の御本御持の方は私のわか草、玉蟲、朝はれ、露英歌話、靜思斷片其他種々ありますから御交換下さいませんか、又言海か新英和字典御不用の方は私の美文辭典と交換願ひます（橫濱山の手共立女學校山口直子）○親愛なる諸孃よ妾は非常に圖書が好きてすから御不用の書があれば何卒御交換下さいな妾の不用な書は玉蟲懸賞文集。朝晴。日露戰爭公報集四冊。ホトヽギス。小說家。桑の號。多情多恨。不言不語。婦人世界二月號より九月號までありますが何卒諸孃樣の內て夏子。乳姉妹。魔風戀風。緋子。伯爵夫人。濱子。御不用の物あらば御一報下さいな。（福岡縣糸島郡怡土村浦志平藏內よし子）○皆樣の御中て銀鈴みだれ髮、雜草、塔影、テニソンの詩等御持ちならば御惠み下さいませんか妾の舞姫、五彩雲、シルレル物語、作文祕訣、ハイ子の詩等のちて御禮いたします（久留米市庄島町東堅う丁加納あやめ子）○妾の最も親愛する諸孃樣の中に、思出の記、晴小袖、玉むし、青春の怨、ほとゝぎす、魔風戀風、金色夜叉、紅葉句帖、テニソンの詩、小說夏子前編、等の御不用書が有つたら何れにてもよろしいが妾の新体詩歌自在秀才文壇は六卷の六號から七卷の十一號まで青葉若葉美文の資料、韻文の資料、青年と處世、文華、土佐日記、枯野の露、何れとにても交換いたしますから送つて下さつたら望みの本を書いて下さい直ぐ送りますから續々換讀をねがひます（京都府船井郡桐ノ庄字熊崎大下增太郎樣方大下繁子）○妾の許に左の本がありますのよ。秀才文壇、大阪文壇、文藝倶樂部、和歌作法、少年の友、明治字典、大成はがき用文、女學世界、國文解釋、鳴戶の響、言文一致新用文萬國日本附圖等不用のがあります故皆樣の中に新小說、美文作法、玉蟲、朝晴、文章世界、三體千字文ハガキ文學夏子、緋子、乳兄弟、催眠術、等と交換して下さい（德島縣麻植郡上浦村桒田京藏內登子）○諸孃さま妾の手許に德富蘆花著不如歸、木下尙江著懺悔、人生の半面、今人古人、明治青年傑作集、伯林土產戀の繪葉書、女學世界十七冊、女子文壇一卷五號より二卷十三號迄、探險世界五冊、成功十三冊、等の不用書がありますが己が罪、新夫人、白羊宮、夏子等御不用のお方は御交換下さい（香川縣大川郡三本松町松永あやめ子）○私の手許に女學世界六卷三四六九十四號七卷一二三號女子文壇一卷十十一號二卷四五六七八十、十一、十二、十三、十六號、三卷の一、二、三、四、五、六、九號日本の家庭一卷第一號より六號まであります少女界もありますから、皆樣御持合せの面白い小說と交換して下さい（和歌山縣有田郡箕島町伊藤せい子）○私手許に小說少少持つて居りますから馬琴著の里見八犬傳　盛

說弓張月等お持ちの方は御交換下さい御禮には定價に相當する品を送ります但し御送附下さる前に一寸御通知下さい（橫濱市辨天通り四丁目清水ふさ子）○妾の手許に西洋娘氣質小說集女錦耳漁師の娘星と菫戀と戀衣車の七冊がありますから皆樣の內で最も上等の未使用繪葉書二枚以上御送りのお方にお分け致します（岐阜縣谷合郵便局區內字北町千葉屋家內みどり女）○私に雜誌が七十冊と裁縫術裁要新式造花獨げいこ造花指南衛水探鑛法新撰國文試驗問答同算術問答小說花暦獄その他いろ／＼不用書がありますが皆さんの血の淚小說護婦烈女お藤母の心新春秋の卷日本文學全書一編より三編迄か新刊小說と御換へ下さいませんか（青森市米町村林矢須子）○記者先生、どういたしましようか、本紙にも惡い方がありまして、圖書の只取なします、妾は東海遊子吟、うき世車、などいまだに行衛が知れません（小路卷子）○私は左の本を持つてゐます、何かと御交換を願ひます、新體詩入門、小說作法、玉むし、作文辭書、かたみの師、普通用文、懸賞文集、不知火、其他（周防大島郡蒲野谷瑞子）○諸君よ面白い唱歌御存じの方は御知らせ下さい御禮は自製の編物と自稱の繪葉書を進呈します（福島縣耶麻郡堂島村大字吉沖三浦操）○本誌愛讀の諸姉樣の中で、少女の操、黃菊白菊花紅葉御不用の御方は御送り下さいな、私よりは新女子文、少年世界、花の白雲、中學世界、家庭文藝、金言一萬句などで御返禮します（羽前西置賜郡鹽川村梅澤盛子）○おなつかしき諸姉上樣私の所に十冊ばかりの不用雜誌と寫眞版だけ三十枚ばかり綴つたの一部とがありますから繪葉書を封じてかりボンかて御申しこし下さい先着十名に差し上げます（岩手縣膽澤郡相原村稗貫みつ子）○誌友皆樣妾は、極淺學なものですが、どうかよろしく、皆樣の內で、藤澤利喜太郎先生著の算術書、お持ちの方は私の諸雜誌、編み造花、などと、御交換を願ひます。（大和國宇智郡宇智村字三在植田時子）○左の不用書あり、しなり、寫眞にて申込者先着十名に限り進呈す日本女子進化論、四季の時鳥、江戸小町、捨小舟、家庭小訓、商業秘訣、商業作文、處生交際術、俳諧手挽草、文藝界、また秀才文壇第六卷第十七號及び中學文壇第七年第一集御不用の方は御讓りを願ひます必ず相當の返禮す。「千葉縣印旛郡成田郵便局內海老川秋山花響」○懷かしい誌友の皆樣よ妾の手元には「言海」「詠歌辭典」「女學校用國語中辭林」「東京苦學案內」「男女東京遊學案內」「渡米案內」「文章組立法」「女子作文作歌辭典」「女學世界」「刺繍編物生花通信教授書三冊全」「思出の記」「不如歸の歌」「向上の一路」「空想病」「ホト、ギス」「美的記事文」「家庭の母」「中學世界」「文章世界」等の不用の書がありますのよ皆樣の內「女學世界の增刊」「不如歸」「天ウツ還」「東京パツク」「言文一致」「女子用文五千題」「日本新林」「中學世界增刊」「名所繪葉書」「美人繪葉書」お持ち遊ばしたなら交換して頂戴な徒に男子の方には妾手製の枝折を御禮として御送り致しますわ（茨城縣眞壁郡闘本町宮川盛子）○敬愛なる諸姉樣妾の手許に左の不用の書物が有ます如何なる書籍にても差間がありませんから交換を望む御方は下名へ申込みください、俳諧葉書及草花種子の交換をも乞ふ、俳句十萬集新韻作文全書、殘月、靈殿の怪人、山高水長、滑稽小說集、夜の女界、蓮如上人の御文章、美人集英、百字文集、男女學生氣質、簪の花、（奈良縣宇智郡宇智村小島崎山若葉）○皆樣の內で小說の不用書お持ちの方は送つて下さい、数の光、遊戲集、其他はアメリカ繪ハガキと佛國エハガキ計二枚を御禮にします（芝區琴平町一瀨口方村島）○誌友の姉上樣方よ私の手許に天外のはやり唄、原抱一庵の泰西奇文、四十年錄、赤毛布、西洋はなごよみ、美文活法、淸少納言と紫式部、猩子の八種が不用に成つて居りますから何か面白さうな御本と御交換をねがひます（遠江國榛原郡白羽村木村分院內鈴木ゆき子）○私の手許に昨年から今年二月迄の婦人世界並に女學世界の增刊現代婦人成功立志談女學校生活新小說化粧かゞみ今月の女學世界などありますが姉樣方の內に小野鵞堂先生の習字帖日用文字御持ちの方は左記の本何冊なりとも差上げますから御交換下さいませんか（信濃木曾福島町橋本今江子）○皆樣のうちに白玉姬、ゆく春、暮笛集、銀鈴、戀衣、新聲、泉鏡花著の湯島詣、黑百合、田舍かゞみ、伊勢の巻、通夜物語等御持の方は私の黑髮「歌集」わか草「詩集」其他都の花文藝倶樂部、新小說、戰時、寫眞畫報等の舊報數十冊不用故御交換下さいませんか先は御願ひまで（橫濱市根岸町地藏坂上吉川白菊）○私、小說思出の記、相思恐、露子夫人、闇夜島、いざゝらば、名家紀行文集、枕頭の山水、陸の日本、星、等の文書を持つて居ます、皆樣の內に藤村詩集、亂れ髮、銀鈴、等の詩集や歌集や最近發行の小說類と交換して下さいます方はありませんか（伊勢龜山東町山

川つい）○諸姉様の中に女子文壇の第一巻第一號から十號までの中何號にても宜しいからおめぐみ下さいましお禮に左の雑誌どれてもお望みのを差上ますから少女界、少女世界、婦人世界、少年、女學世界（京都市寺町通竹屋町下る望月燊子）○皆さんの中で私の持つて居る雑誌御入り用の御方は何時にても申込まれよ但し郵券封入なきものには送付致さず。重なるものは女子文壇、秀才文壇、女學世界、婦人世界、家庭文藝、中學文壇、新手枕、女鑑、等です（近江國阪田郡居本町字中山平田道水子）○満天下の御嬢様方下記の外何の小説本とは申上げませんが、新刊の物御不用の御方は御恵み下さいな、御惠下されました御方へは編物、栞「組製」と上等の繪葉書にて御返禮申上げます、伺姿の許に不如歸の歌、新體詩集、俳句自在、黒風、女夫波、小猫、肉彈、横戀慕等が不用に成つて居ますから御交換か上等の繪葉書封入にて御申込み下さい（佐賀縣杵島郡北方村樋口みゆき）○皆様の内にて己が罪全部露子夫人天打つ波伯爵夫人金色夜叉良人の自白濱子想夫憐破戒不知火琵琶歌コブシ思出の記小華族下小説家緣不緣等御恵み下さる御方には觀兵式中己丙滿洲軍紀念其他遞信省發行スタンプ付郵來物地方紀念及他の私の小説上等繪葉書を差上げます（東京本所區番場町磯野澄子）○皆様方の内に霧笛の夢、陸奥の花、太田道灌、僧月照、廣瀬中佐、遊戯新唱樂譜等の音樂書御持ちの方にても御不用な方が遊ばすなら御ゆずり願たう存じます若し御ゆづりハてきないなら一寸拜借いたしたいのよ（福島縣石城郡神谷村大字中神谷山下修子）○諸嬢さんの中

て本年八月十五日の本誌御不用の御方は秀才文壇か中學文壇かと交換を願ます但し中學文壇なら二冊差上ます亦繪葉書玉章編物の交換も（下野那須郡荒川村須藤平作方つゆ子）○皆様の中で黄菊白菊御不用の御方が有りませんか若し有りましたなら甚だ申兼ますが妾の持つて居る懸賞女集か又其の他の書籍と交換して下されませんか御願ひ申ます（京都府相樂郡高山村田山有野貞子）○私の手許に契廟、塔影、花守、新體詩自在、黄菊白菊、無花果、琵琶歌等が有りますから濱子、夏子、魔風戀風、破戒、みだれ髪、青春、吾輩は猫である、己が罪、思出の記等と交換して下さいお禮には編物か造花を添て上げますわ（越後見附本町山田文子）○皆様の中に俳句雜誌御持の御方は送りて下さい私は返禮として小説や參考書類を送ります（熊本市細工町花里白鳥）○皆さまの内新派歌集の御不用のを御持ちの方がありましたならゆづつて下さいますか又は私の持つて居る本とかへて下さい（東京小野路、落合、横倉珂照）○私の許に不如歸の歌。歌曲の花園。中學文壇。ハガキ文學。文章世界。婦人世界。残縫。女子の友。才媛詞藻。時好。其他いろいろの本が御座いますから御申越し遊ばせ早速御送り申ますよ（埼玉縣兒玉郡旭村新井境野もと子）○私は可成新しい雜誌を三十餘册所持して居ります中學世界文章世界趣味少女界女子文壇少年世界少年界中學文壇探險世界少年ハガキ文學ムラサキ其他です一錢五厘切手四枚封入の御方へは直に御送り致します（茨城縣古河町杉並町小堀とし子）○名ある方々の作られた小説で不用のが御座りましたら是非ゆづゝて下さ

いな御返禮いたします尚は先着の御方五名には恥かしき妾のうつしゑを御添へ申します男の方でもいとひませんからどうか御知らせ下さい（東京市牛込區中町卅八番地船越しづ江）○皆様の内に女子懸賞文集言海火の柱良人の自白女子文壇何年のでも結構ですから御貸し下され度讀まして戴きましたら直ぐに御返却申升御禮には私の寫眞を差上升（大阪南區南炭屋町十四濱村濟子）○皆様の内で、露子、相夫憐、金色夜叉の歌お持ちの方は妾の手許にある良人の自白、小公子、忘れ形身、平家物語と換へて頂戴な、私名所繪葉書一組ヅヽ添へて差上ます（越後古志郡藍道四一遊川方野菊子）○諸嬢様の內で新學士新夫人夏子お持ちのお方は妾の晴小袖魔風戀風みだれ髪少女の煩悶從花娘其他小説雜誌と御交換下さいませんか先着三名の方へは御望みの本にリボンをつけて御禮致します御送り下さいます方は前以て下名へ御一報願ひます（東京市神田區今川小路二ノ六伊原様内端山葉波子）○誌友の皆様私は四季の月針の道櫻花の歌存じて居りますからうつくしき繪葉書か組製の編物にて申込めば直ちに送ります（静岡縣磐田郡龍川村横山三室秀）○誌友の皆様の內に人生觀をお持ちのお方は私にしばらくおかし下さいませぬか私手許に千草の錦、土佐日記、婦女家庭訓、俳諧季寄便覽ございます御入用の方はおかし申ます（大分縣東國東郡西安岐村近藤げん子）○妾は田舍に住て居る音樂狂です何卒同好の士女様樂譜の交換を願ひます（埼玉縣北埼玉郡下忍村飯野方白菊女）○滿天下の諸嬢様よ私は草深き田舍に淋しく暮して居る者ですが常に雜誌

を讀むのを唯一の樂として居るのですよて毎月四册位づゝ求めるのですが塵も積れば山となるの例で中學文壇八年三集より九年の十六集迄「三十八册」秀才文壇六卷五號より十九號迄「十四册」女子文壇二卷一號より三卷十號迄「內三卷五號より以後は送附せず」其他婦人世界女學世界など山のように机上に積み上げてありますが皆不用です 交換かたがた示錄に一錢切手封入書名附記して御送付下さい一册づゝに烏山名所の繪葉書を添へて直ちに御送致します 亦他雜誌と御交換下さつても宜しう御座います(下野那須郡荒川村須藤佐惠子)○妾の手元に露風戀風三册、新夫人、女波男波、多情多恨、想思怨、春若丸、其外不用の書籍澤山ありますから繪葉書で御申込下さい喜んで御送本致ます 又英字雜誌も有升よ(岩代若松市本郷町二三渡部柳子)○誌友の皆様、私の手元に、米國女教師ダツレー氏著の青幼卿、癡貿無類奇法大全、國民親文新書、探險世界落期臨時增刊氷山國、秀才文壇、新葉若葉、青年と處世、右の書物が不用になつて居りますので、若しも皆様の中に金色夜叉、少女の煩悶、思出の記、無果花、窺風戀風不用の方は交換ください(京都府南桑田郡龜岡町本町伊東瑞枝様方紫盤英)○皆さんの內で詩草社發行の「詩人」何號にてもよいですから御持ち合せの御方は御惠み下さい 相當の返禮は 替錢て致します(筑前國鞍手郡劒地村 大字中泉 加藤耕作様內吉田ちよ子)○誌友の誰様でも宜敷が 本年十月發行の文章世界お持のお方様よ 妾に送本くださる方は無いでしやうか 御禮として名刺を進呈致します(京都市五條大橋東詰北入三一、大井順子)

誌媛の交際

○私は男女に拘はらず御遊戯のお方と永久に眞面目に神聖な玉章の御交換を願ひたう御座います(和歌山縣海草郡西和佐村 池見澄香子)○なつかしい誌友の皆様私は甲州の山中で病魔をかゝへて愁しんで居る不幸兒、あはれと思召し給はゞ寫眞、玉章、繪葉書で御交際を(山梨縣甲府市深町澁谷方千勢子)○誌友姉様がたよ、妾は先月の誌上て、唱歌埴生の宿を御教へ願つたものですが、皆様から御教へくださつたので、ようくわかりましたから他の姉様がたよもう御をしへ遊しませんやう御願ひ申ます(赤坂區青山高木町高木春園)○諸姉様よ末永く繪葉書や玉章の御交際を願ひます 屹度御返事差上ます(神奈川縣愛甲郡南毛利村恩名廣呂木 孝三様方宮三千鶴子)○熱愛深き誌友 東京木村さな様、外五十一名より黑髮塚の碑文を示されよと美麗なる繪端書にておこせ給へど、ことわざ繁き身の、各かへしは思ふにまかせれば誌上にて示すになむ。

黑髮塚者瘞婦人所斷髮之處也頭髮婦人之所最重而斷之者何蓋以表其信也夫甲辰乙巳之役國稱前古所未有而戰則克攻必取蓋雖聖德廣大使然非民心一致以敵愾則安能如此哉當是時百萬貔貅風餐露宿轉戰萬里之外而內則老幼婦女尙能以報國爲念愼守其家使出征諸士無後顧之患矣當山僧侶亦日修護摩法於不動尊前以祈王師克捷及諸士健全殆將二年遠近來拜者絡繹不絕就中婦人皆斷髮以供爾前堆積成山其意不外於祈良人無事且以明己貞志也比之于彼賦雄雉以徒怨嗟者何啻天淵嗚呼婦人兼志如斯其激厲諸士以躬手報可知也今也六軍凱旋諸士皆論功受賞斷髮一事豈可不表彰哉因藏于石函以瘞之建碑以志其由而爲之銘曰。(銘略)

(東京市本所區外手町拾七番地金尾常子様方、波光女史)○記者様を始め誌友の皆様、此の秋を如何にくらし給ふらん妾は草ふかき里に獨寂しさに泣く身なり、木の葉の雨の板廂をうつ頃ともなれば、秩父颪は如何ばかりか寒からむ、今より思ひやるだに堪え難く候 さりながら其の寂みこそ幾年か妾を孚くみて詩歌の園に誘ひしものにて候へ。さてもさても聞かまほしきは皆々様の御境遇に候(埼玉縣入間郡東吾野村淺見なみ子)○神戸から御はがきを下すつた方御芳名が英字の爲め解りかねますから急に御手數ながら又御知らせを尙々皆様御交りをどうか(遠江國榛原郡萩間村西萩間新村 兵四郎様方すゑ子)○誌友の皆様妾は信濃の山奥に白ひ山百合子と二人して淋しく青葉の下に住んで居る不束者でありますどうぞ御なさけ深き諸姉様御姉様末久しく御交際遊して下さりませ(長野縣下高井郡瑞穗村宮川貞子)○誌友の姉上様未見ながら親しくお交際をお願ひ申し上げます(鹿兒島縣姶良郡西襲山村西光寺賴丸ちま子)○誌友の諸姉様よ私も昨年までは女學校で毎日澤山のお友達と遊びましたが今は極く山奥に日を送りて居ります何卒永久に寫眞玉章繪はがきの交換を願ひます決して取がちには致しませんから(岐阜縣加茂郡久田見村山田よね)○誌友の諸姉様私は淋しき山奥に住むものですがあはれと思召し是れより御玉章の交換を願ひます(廣島縣賀茂郡東志和村光源寺內堀保子)○諸姉様の御交際が日に盛になつてまゐりますのみ見て私も御な

かまに入れて燒きたくなりましたどうか〳〵御手紙や繪葉書御送り下さいませきつと御返報差上げます又私のこしらへたへたな造花も御送り致します（東京市本郷區本郷六丁目三十二、杉浦深雪）○私は當地の女學校へ通學して居る至つて不束者でありますが女學校の三年以上の御方は何卒御交際を願ます但普通葉書の事、（靜岡縣磐田郡岩田村寺谷永井清子）○皆様我は淋しく片田舍に女子文壇を誰よりの友として居る者で御座いますが何卒是から繪端書の交換なり又寫眞玉章の交換等末永く御願申ます（三重縣伊勢國河藝郡大黒村字山室赤塚信子）○誌友の姉様がたよ、妾も讀者の、一人です、よろしく御交際を願ひます、繪はがきの、御交換な、又寫眞御送り下さいまし、先發五名の、御姉様には諸雜誌一部づゝ進呈します、後者は繪はがきて、御れい致します、さようなら。（北海道石狩國札幌郡札幌村番外地本間政吉方本間靜子）○天下の皆様私も愛讀者の一人ですから今後ドーシドシ交際を願ひます御寫眞も願ひます私は本縣生れてはありません越しま縣生れてす（秋田縣平鹿郡横手町柳町三ツ梨健一郎方松山節子）

懸賞品發送報告

八月一日發行第十號の懸賞當選諸嬢には九月九日附にてそれ〴〵賞品をお送りしましたから例によつてその姓名を左に御知らせ致します。

○わか葉○山田くに子○松永白蓮○ます子○田原瑠璃○くれなゐ○村岡香貴子○小泉さかえ○石出堂子○水神まさき○村雨○謠女○秋保八千代○鈴木さち子○木原蓮舟○千代延君子○臼井宮子○小島なみ子○磯部なか子○佐伯城よしゑ○末政善惠○三橋千代子○雛波あいの○濵川清子○竹下季子○中里きん子○古志谷子○三浦ます子○須吉はるみ○桒谷德子○榎本龍子○今西こゆき○平野雪子○淺井こう子

▲なほ○土佐、石川一葉女○札幌、山田鈴子○備中、季花子○下谷、岡野豐子。の四嬢は至急住所姓名を御通知下さい。

剽窃詩文の注意

●●●●●第十二號の分　○千葉縣、多田方子。書簡文三等「妹に遣はす文」は卅六年中の中學世界定期增刊『旗風選集』より○群馬縣、坂上香花。叙事文秀逸「招待席」は『中學生』二卷五號より○茨城縣、嫁菜子。新體詩秀逸「孔雀の賦」は『中學生』一卷十號より○南總、原たき子。短文秀逸「霰ひろ」は『文章世界』一卷七號より○筑前、花田くら子。和歌秀逸「望春逝きし」は本年一月發行の『秀才文壇』より、何れも剽窃。

▲石狩、綺澤源子。文藝遊戯四等「ちやうづ」は昔噺として古くより唱はれるものを自身の出來ごとの如く書きたるにつき○伊賀、山村りやう。新笑話四等「田草とります」は本年の『婦人世界』に掲載の和歌を作り換えたる跡あるにつき、送賞を見合す。

●●●●第十一號の分　○備後、二子山。新體詩四等「朝顔夕顔」は文學同志會發行の『すみれ集』より○千葉縣、松ヶ枝浪江。評論文四等「不平と慰安」は卅九年中の『活動の日本』より○紀鈴宮。俳句四等「向き合つて」は卅九年中の『萬朝報』より○靜岡縣、藤本靜江。書簡文五等「菊に添へて」は卅七年中の『百字文』より○紀伊、竹園女史。新體詩秀逸「幼兒の枢」は卅六年中の『中學文壇』より○千葉縣、金子薔子。同上「久米仙」は卅九年中の『萬朝報』より○水戸、小磯愚女。和歌秀逸「朝の欄に」は『中學世界』第八卷十六號より

●●●●第十號の分　赤坂、大村竹尾子。新體詩一等「寂寞」は卅九年十二月發行の『新聲』より○紀伊、告天雀女。叙事文五等「夏の夜」は明治卅年七月の『少年文集』より○越後、哲子。短文秀逸『可憐兒』は卅九年五月の『中學文壇』より

●●●第九號の分　○陸奥、ふみ子。新笑話三等「老人」は『兒童教育』第七期第六號より

●●●第八號の分　○上總、春子女史。和歌二等「朝の館」は秀才文壇臨時增刊『青葉若葉』より、何れも剽窃とす。

◎今回注意を與へられたる諸嬢は○白露女史○女探偵○秀子○北海道、小笠原○笑作、沼元りん子○探偵女○渡良瀬河畔の人○孝和女史○浪花、ＳＫ○汀女史○山里の女○忠告女○磁北、よし子○福岡、中村嵐峯○大坂、直田岸枝○暁の女○注意女○和歌山、岡崎さき子○さち枝子○上野、一愛読女。

記者通信

文藝遊戲新課題
女子文壇愛讀會

明治四十年最終の文藝遊戲は何をして皆さんと樂みませうか、一歳の終りでもあり新しい歳を迎へる希望もありと云ふので、諸孃に平素愛讀して頂く女子文壇の愛讀會と云ふのを催ふしませう

▲諸孃に女子文壇に就いて何でも彼でも思ひついた事を話して頂きませう▲初めて女子文壇を見た時の感▲わが地方の愛讀者▲わが家と女子文壇▲投稿の感▲懸賞を得たうれしさ▲沒書された失望▲投書家に對する感▲女子文壇より得たる利益▲女子文壇に對する不平▲女子文壇に望むべき事▲記者に對する感▲家の記事に就いて▲主なる投稿家の評論▲面白き記事▲女子文壇の體裁及び挿畫に就いて▲編輯に就いて▲誌友と交際の事▲想像せる女子文壇社▲其外何でもよろしい女子文壇に關係したことでさへあれば投稿して下さい▲文章は例の通り十六字詰十行まで▲賞品も例の通り五等まで▲投稿しめきり十月二十日

▲口繪用紙の改良。　本誌は本號より口繪寫眞版を一層鮮美ならしむる爲め、舶來上等光澤紙を用ゆることにしました、黴賞を乞ふ

新出版

▲『明治少女節用』　少女の爲に編纂した小さな百科辭典で上は皇室一覽から下は家政や化粧の秘傳乃至歷史地理作文植物動物算術物理化學音樂天文地文禮式體操裁縫料理茶ノ湯活花お伽噺農業鐵道郵便の事まで何でも分らぬものは無い本文は五號活字總振假名つき上段下段に分ち殆んど毎頁に繪があり美くしき口繪もあり撫子を金摺にしたクロースの表紙で堅に長い製本紙數六百頁、机上に具へて好い書物ですが又お土産にしても何より好からうと思ひます(定價八十五錢博文館發兌)

▲『東海道線旅行圖繪』　昔の道中繪風に明治の趣味を以て描いたもので東海道線沿路の光景は此書に依りて更に面白さを增しました畫は例の小杉未醒氏、飄逸な筆致は能く旅行趣味と合して居ます、繪の間々に花袋風葉癡音三氏の紀行文があります但し文より繪の方が面白い幾度見ても飽きません(並製五十錢上製八十錢神田錦町一丁目修文館發兌)

▲『旅ごろも』　さきに寄宿舍日記を著して好評を博した枯林中村文學士の著です卷中の題目凡そ三十三篇何れも草枕旅のさま〲を書きつめたもので文章極めてやさしく衒ふ處なく山の姿、人情風土の樣も有りのまゝに書いてありますから作文の參考にも宜しく諸孃の情懷を慰むるにも最もよろしい四六版紙數三百頁(正價四十錢京橋區新肴町晴光館發兌)

▲『日蓮上人』　山崎紫紅氏が高僧日蓮上人を新体詩に歌つたもので、世に好評のあつたものです、今回三版が出來て體裁も更に善くなりました(定價三十錢金港堂發行)

▲『婦女の心得』　細川潤次郎氏の著、女子の幼時から母になるまで一代の心得となるべき事柄を、大要をつまんで分り易く穩健に書いた書物です、教科書の參考にもなるでせう(定價二十八錢神田錦町明治書院發兌)

雜報

▲女學生間の流行。　近頃は婦人界の流行も女學生が其起りをなすやうで、髮の形も然うでした、近頃は廂髮も稍すたれ氣味で、女學生間の流行となつて居る髮の結方は、今迄の銀杏返し又は桃割の類に前髮を取らずに廂髮のやうにしたものです、十七八才から二十二三才迄の女學生はよく見ます。それから挿物ですが、細いリボンの派手なのは學校で許さないので、リボンで櫛の齒を一つ置きに縫ひゆき其兩端を小さな蝶の形に結ぶ事が一部に流行して居ます其他襟止の流行は殆んど一般の婦人に行きわたり、中には贅澤な寶石入などを用ゐるものもあるさうです。

▲洪水の損害。　去る八月の大洪水は實に近來稀なる大損害を與へた、今最も能く調べた内務省の統計に據ると死者四百五十九人、流失及び潰家六千三百六十七戸、浸水家屋十八萬七千四百九十九戸、橋の流失二千六百六十九、山壞れ四千三百八十二所、浸水田畑十五萬五千四百四十一町歩、被害區域は山梨、京都、群馬、埼玉、兵庫、長野、東京、山形、福島、神奈川、茨城、宮城、千葉、靜岡、滋賀、三重、栃木等に渉つて居る、以て變災紀錄に止むべきものでせう。

▲東京の冷氣。　前月十五六日頃より東京は大いに冷氣を感じ、北海道の一部には雪霜を見たと云ふ事です、全く西比利亞地方の氣象の影響でした。

▲文學界の問題。　昨今の文學界には大きな問題が一つもありません、小さな問題ならいつてもあるのです、自然派對技巧派の論爭、肉の衝動を直寫する可否、文藝の根本の疑、沈鐘の飜譯正否、作詩上造語の有無、佛蘭西の詩派、脚本界の生氣など先づ當面の問題でせう。

Y: Can you believe that this is already October?

H: Almost impossible. But October is one of my favorite months.

Y: Becouse you go on a picnic?

H: It is one of the reasons.

Y: By the way, when are we going to have one this autumn?

H: It seems that you are more anxious than I about picnics.

Y: Perhaps I am. I hope I shall be strong enough to walk with you when the time comes.

H: Teachers will laugh at us if they hear us talking about holidays already.

Y: I do not mind. The weather is so fine, and it is wrong to stay indoors, and not to enjoy nature more.

H: I hope we shall not spend too much time on our way to get to the place of picnic.

Y: Yes, there are many beautiful places without going far from Tokyo.

H: I do not know anywhere. Shall we not spend our Saturdays to take trips in the country?

芳：既に十月だと思はれますか？

花：六ヶ敷う御座います．併し十月は私の好な月の一ッです。

芳：遠足がある月ですからでしよう？

花：其も一の理由。

芳：其はそうと，此秋は何時に参りますの？

花：私よりも貴女の方が遠足に御熱心に見えます。

芳：左樣かも知れません．其時が來ましたら，御一所に步ける程强壯に成り度いものです。

花：今からもう，休みの事を語して居るのを，先生方が御聞きになると，御笑ひなさいましよう。

芳：構ひません．天氣が此樣に好のに，室內にのみ閉ぢ籠つて自然界を樂しまないのは罪です。

花：運動會の目的の場所に行く道に，餘り時間のかゝらない事を望みます。

芳：左樣です，東京附近に良い場所が，澤山ありますから。

花：私は何處も知りません．土曜日に郊外遠足をしようではありませんか。

An American tourist on the summit of Vesuvius was appalled at the grandeur of the sight

"Great snakes!" he exclaimed; "it reminds me of Hades."

"Really, how you Americans do travel!" replied his English friend, wh , stood near by.

某亞米利加旅行者が，ビスビヤス山頂に立ちて，其噴火口の壯嚴に驚歎して，

「ヤー，此は實に地獄を想出させると」と叫んだら，

「眞個に，君等米國人はよく何處迄も旅行する人間だ」と，側に佇立して居た英人が申しました。

October

Hana: Are you well enough to be back to school again?

Yoshi: Thank you, Doctor says I can come back now, but he does not allow me to study much at present.

H: I think you look much better since I saw you a week ago.

Y: It was very kind of you to come to see me so often when you were busy.

H: Not at all. September is not a good month for work any way.

Y: Why do you say that?

H: The school opens about the middle of the month, and every thing is very unsettled, and our minds are apt to wonder back to our homes.

十月

花：學校に御出に成る程丈夫に御成りですか。

芳：難有う．醫師は歸校してもよいと申ましたが，餘り勉强する事は今の中は許して呉れません。

花：先週御目にかゝりました時よりは，ズーと御宜い御様子です。

芳：御忙しいのに度々御見舞下さいまして難有う。

花：如何しまして．九月はどうて勉强に不適當な月ですから。

芳：何故そう御仰いますか。

花：學校は中旬に始まり，萬事落付かず，心は故鄕に彷徨ひたがりますもの。

was left to his mother's care. She was a woman born to command, and since she was left alone with a family and an estate to care for, she took the reins into her own hands, and never gan them up to any one else. She used to drive about in an old-fashioned chaise, visiting the various parts of her farm, just as a man would do on horseback. The story is told that she had given an agent directions how to do a piece of work, and he had seen fit to do it differently, because he thought his way a better one. He showed her the improvement.

"And pray," said the lady, "who gave you any exercise of judgment in the matter? I command you, sir; there is nothing left for you but to obey."

George Washington owed two strong traits to his mother,—a governing spirit and a spirit of order and method. She taught him many lessons and gave him many rules; but, after all, it was her character shaping his which was most powerful. She taught him to be truthful, but her lessons were not half so forcible as her own truthfulness.

(Selected.)

は彼女の資質にして，子女，田畑を一身に托せられて寡婦の身となるや，諸務の主權を掌中に握り，決して他人に譲るが如き事あらざりし．彼は日々古き二輪車を驅りて，恰も男子の乘馬にて巡察するが如く，自家の農場各部を臨檢せり。逸話あり，彼某日差配人に一事を命じて其方法をも示敎せしが，此者己が仕方の遙に卓越なりと思ひて，主人の示敎と其法を異にして其業を成就し，其好結果を彼女に示せり．「誰が汝に自己の判斷使用を許可せしや，我は汝に命ず汝は唯々服從の外あるべき者に非ず」と一喝せしとぞ。

華盛頓は二特性を母に稟けたり，即ち統轄と整律秩序の精神之なり．母は與ふるに多くの敎訓と法則とを以てせり，然れ共，ワシングトンの最も勢力ある品性を形造せしものは，母自身の品性なりき．又彼女は常に誠實を敎へしが，其强き敎訓も，彼自己の誠實なるに比しては其威勢半だにも及ばざりしとぞ。

英文（十）

津田梅子閲　河井道子述

Solidude

There is a pleasure
in the pathless woods,
There is a rapture
on the lonely shore.
There is society
where none intrudes
By the deep sea,
and music in its roar.
I love not man the less,
but nature more,
From these our interviews
in which I steal
From all I may be,
or have been before,
To mingle with universe,
and feel
What I can ne'er express,
Yet cannot all conceal.
(Byron.)

寂寥

道なき森林に快樂あり，
寂寞の海邊に喜悅あり，
人跡絶え，
洋々の海近き處に親睦あり，
怒濤の中に音樂あり．
我人類を愛せざる非れども
自然を想ふいや增せり．
斯る自然の氣に觸れては
將來未來の我を去り，
宇宙萬有に我靈通ふ．
而して其感應する處は，
決して言表し得ざるものにして
而も又隱蔽し能はぬものなり。

George Washington's Mother

George Washington owed most of his training to his mother, for when he was eleven years old his father died, and he

華盛頓の母

ジョジ．ワシングトンは彼の教育過半を其母に受けたり．十二歲にして父を失ひし彼は，母の手に全任されしなり．指揮統管

投書家並に愛讀諸君は必ず此社告を御覧下さい

募集課目

選評大家（文學士沼波瓊音先生、廣津柳浪先生、河井醉茗先生、佐々木信綱先生、巖谷小波先生、山中古洞先生）

甲種
◎叙事文 ◎抒情文 ◎書簡文 ◎評論文（各半紙廿四字詰三十行以内楷書にて認めらるべし）
◎短篇小説（半紙楷かな付廿四字六十行内）◎新體詩（半紙かな付廿句以内）

乙種
◎和歌（半紙半分一首宛）◎俳句（仝上）◎新歌謡（仝上）
◎短文（半紙かな付端書又は）◎新笑話（半紙半分十六字詰）◎圖書（一寸の二寸風俗景色）（但日本紙の薄きもの）

別種
◎文藝遊戯（半紙十六字詰）
◎誌友倶樂部（端書又は半紙二十一字詰）

「此賞品は甲乙種以外のものを呈す」

△課題隨意一人一章一句宛の事但取交ぜ同封にて差支なし開封にて卅匁まで郵税二錢

↓（毎月十五日投稿〆切）↑

奬學懸賞品

甲種
第一等 賞金賜品類……價格金拾圓
第二等 呉服物類……價格金參圓
第三等 小間物類……價格金八拾錢
第四等 便利の圖書切符……金五拾錢
第五等 同……金四拾錢

乙種
第一等 絹張洋傘……價格金五圓
第二等 帶止、半襟類……價格金壹圓
第三等 文房具類……價格金六拾錢
第四等 便利の圖書切符……金三拾錢
第五等 同……金貳拾錢

○賞品は發表翌月五日に故障なき當選者へ懸賞品贈呈すべし、右當選者は贈品に差支へざる様前以て住所氏名を明細に通知ありたし

△嚴守すべき投書規定 必一讀を要す

○投書は各欄とも決して政治的時事論に渉るべからず○投書は題の下に必ず住所姓名を記し假名は平假名を用ひ明瞭なるを要す○各種の投書は別に認むべし○封筒は『原稿在中』の文字を記し中には他の用事の文句を記すべからず○投書に圏點は一切施すを禁ず○投書は他人の作物を剽竊するを禁ず之を犯したる當選文は無効たるべし○投書は一切返付せず○投書は不足、未納税は一切受取らざるべし

定價

女子文壇（毎月一回（一日發行）定期増刊年四回 二月、五月、八月、十一月の十五日發行）

冊（大判百餘頁）	金拾錢	郵税共前金拾壹錢
八冊（半年分増刊共）	前金七拾六錢	同 前金八拾四錢
十二冊（一年分増刊四冊）	前金壹圓八錢	同 前金壹圓廿錢
十六冊（一年分増刊共）	前金壹圓四拾四錢	同 前金壹圓六十錢

振替貯金又は爲替に限ると

輕便の送金法

女子文壇社の郵便振替貯金口座は第壹七貳九番です
○爲換料、通信料、書留料其他一文も入らず安全の送金法
此の「拂込用紙」は何處の郵便局でも申出あれば何度でも無代て呉れます

明治四十年九月廿八日印刷
明治四十年十月一日發行

無代價 金拾錢

不許轉載

編輯兼發行者 東京市京橋區大鋸町十一番地 野口竹次郎
印刷者 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 石川金太郎
印刷所 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 株式會社秀英舍

發行所 東京市京橋區大鋸町十、十一番地 電話〔本局六〇七番〕 女子文壇社

特約賣捌元 ○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂

廣告料金

特等	一頁三十圓	半頁……	一行……
上等	一頁廿五圓	半頁十三圓	一行……
普通	一頁廿三圓	半頁十二圓	一行四拾錢

〆切 毎號十五日前

（宮本）


婦人藥王
中將湯
中將湯の的中症
子宮病
血の道
胸先差込
腰足冷込
下腹痛み
白血赤血
こしけ
難産流産
月經滯り
月經不順
産前産後
逆上頭痛
（定價）一日分十錢、四日分三十五錢、一週間分六十錢、二週壹圓十錢、三週壹圓六十錢